

茨城県明野町埋蔵文化財発掘調査報告書第1集

くら もち
倉 持 遺 跡

— 第 1 年 次 調 査 —

1983. 3

明野町教育委員会

くら
倉 持 もち 遺 跡

— 第 1 年 次 調 査 —

序 文

明野町は南北に流れる桜川と小貝川に挟まれ、広大な台地と河岸低地からなっています。現在本町内の埋蔵文化財包蔵地は、151カ所を数えることができますが、遺跡の性格を知る手がかりを得る機会をもてずにおりました。

このたび町の事業として、倉持遺跡の発掘調査を実施し、ここに多くの成果を得られましたことは、明野町の原始、古代の究明ができ、その成果が、生きた教材として、学校教育等に広く活用されると共に、住民の文化財に対する認識を深めることになるものと念じております。

当遺跡の調査は、今後年次計画をもって、その全貌を明らかにする所存でありますので、関係各位の御協力、御指導をお願い申し上げます。

なお、調査にあたりましては、多くの方々に御高配をいただきましたことを、厚く御礼申しあげ、発刊のあいさつといたします。

昭和58年3月31日

明野町長 加倉井正利

例　　言

1. 本書は明野町教育委員会が昭和56年8月25日から10月25日にかけて実施した同町倉持遺跡の第1年次発掘調査の報告である。なお略報で遺跡名を倉持中妻としたが、調査対象地を明確にするため小字まで使用した。
2. 調査は今後継続的に実施し、年度ごとに報告する。遺跡全体の調査が終了した後、研究編を発表する予定である。
3. 本書の図面作製・写真は山野井哲夫、遺物の実測・拓本は鶴見貞雄・安田厚子・田口崇・山野井哲夫が担当した。
4. 本書の執筆は、第1～5章を山野井哲夫、第6章第1節を齊藤弘道、第2節を鶴見貞雄、第3・4章を田口崇が担当した。
5. 本書の編集は阿久津久が担当した。
6. 資料はすべて明野町教育委員会で保管している。
7. 調査期間中、瀬尾多喜三氏、中山博善氏、飯島東海男氏、山口民三郎氏には御協力いただき御礼申し上げる次第である。
8. 調査組織は次の通りである。

倉持遺跡発掘調査会

会長	長塚 誠暉
副会長	西村 鮎寿
委員	水柿 晃一 稲葉 昭一 飯島 庄一 稲木 露三 山口 清 八田 昭夫 飯島東海男 山口幸一郎 松木 毅一 中山 博善 大和田 達 関根 利康 石塚 正道 井上 哲郎
調査員	山野井哲夫
協力員	阿久津 久 鶴見 貞雄 編引 逸雄 照山 量弘 鹿志村則男 安田 厚子 瓦吹 堅 桜井 二郎 水柿 順子 小唄 弘子 後藤喜八郎 高野 正水 岩松 和光 梅原 晶 斎藤 弘道
作業員	稻葉勝一郎 岛塚 広市 武井 良平 武井 よし 山口喜久雄 中島喜一郎 飯島 廣治 助川 要 中島 正一 山口徳次郎 飯島 八枝 飯島 光江 飯島 利子 酒寄 平 星野 茂美
測量協力者	市村 守 古宇田寿雄 鈴木 祐二 木村 茂 中島 由夫 山口 明 渡辺 重忠
事務局	山口 晴道 吉宇田 久 鈴木 毅 飯村 英子 渡辺 利夫 尾見 有史 入江 敬三 島田 公夫 鈴木 勝利 塚田いづみ 寺崎 鶴美

目 次

序文	1
例言	2
第1章 調査に至る経緯	6
第2章 調査の経過(調査日誌)	7
第3章 遺跡の地理的歴史的環境	10
第4章 遺跡の概要	12
第5章 遺構	16
第1節 繩文時代の遺構	16
第2節 弥生時代の遺構	51
第3節 古墳時代の遺構	53
第4節 歴史時代の遺構	59
第6章 遺物	61
第1節 繩文時代の遺物	61
第2節 弥生時代の遺物	109
第3節 古墳時代の遺物	112
第4節 歴史時代の遺物	113

掲図目次

第1図 遺跡位図	11	第34図 33号土壤	44
第2図 遺跡地形図	13	第35図 34号土壤	44
第3図 遺構全測図	14	第36図 35号土壤	45
第4図 上層断面図	15	第37図 36号土壤	45
第5図 1号土壤	17	第38図 37号土壤	46
第6図 2号土壤	18	第39図 38号土壤	46
第7図 3号土壤	19	第40図 39号土壤	47
第8図 4号土壤	20	第41図 1号埋甕	47
第9図 5号土壤	20	第42図 2号埋甕	48
第10図 6号土壤	21	第43図 1号焼土ビット	48
第11図 7号土壤	22	第44図 2号焼土ビット	49
第12図 8号土壤	22	第45図 3号焼土ビット	49
第13図 9号土壤	23	第46図 1号住居址	52
第14図 10号土壤	24	第47図 1号方形周溝墓	54
第15図 11号土壤	25	第48図 2号方形周溝墓	56
第16図 12号土壤	26	第49図 1号墳	58
第17図 13号土壤	27	第50図 1・2号溝	60
第18図 14・15号土壤	28	第51図 繩文式土器	67
第19図 16・17号土壤	30	第52図 繩文式土器	68
第20図 18号土壤	31	第53図 繩文式土器	69
第21図 19・20号土壤	33	第54図 繩文式土器	70
第22図 21号土壤	34	第55図 繩文式土器	71
第23図 22号土壤	35	第56図 繩文式土器	72
第24図 23号土壤	35	第57図 繩文式土器	73
第25図 24号土壤	37	第58図 繩文式土器	74
第26図 25号土壤	37	第59図 繩文式土器	75
第27図 26号土壤	38	第60図 繩文式土器	76
第28図 27号土壤	39	第61図 繩文式土器	77
第29図 28号土壤	40	第62図 繩文式土器	78
第30図 29号土壤	41	第63図 繩文式土器	79
第31図 30号土壤	41	第64図 繩文式土器	80
第32図 31号土壤	42	第65図 繩文式土器	81
第33図 32号土壤	43	第66図 繩文式土器	82
		第67図 繩文式土器	83
		第68図 繩文式土器	84

第69図 縄文式土器	85	図版 7 遺跡	121
第70図 縄文式土器	86	図版 8 遺跡	122
第71図 縄文式土器	87	図版 9 遺跡	123
第72図 縄文式土器	88	図版10 遺跡	124
第73図 縄文式土器	89	図版11 遺跡	125
第74図 縄文式土器	90	図版12 遺跡	126
第75図 縄文式土器	91	図版13 遺跡	127
第76図 縄文式土器	92	図版14 遺跡	128
第77図 縄文式土器	93	図版15 遺跡	129
第78図 縄文式土器	94	図版16 遺跡	130
第79図 縄文式土器	95	図版17 遺跡	131
第80図 縄文式土器	96	図版18 遺跡	132
第81図 縄文式土器	97	図版19 遺跡	133
第82図 縄文式土器	98	図版20 遺跡	134
第83図 縄文式土器	99	図版21 遺跡	135
第84図 磨製石斧	101	図版22 遺跡	136
第85図 打製石斧	102	図版23 遺跡	137
第86図 すり石	103	図版24 遺物	138
第87図 すり石	104	図版25 遺物	139
第88図 磐器・砥石・石鍤	105	図版26 遺物	140
第89図 石鐵・石錐・スクレバー・ 石皿・凹石	106	図版27 遺物	141
第90図 上製品	108	図版28 遺物	142
第91図 弥生式土器	111	図版29 遺物	143
第92図 古墳時代の遺物	113	図版30 遺物	144
第93図 歴史時代の遺物	113	図版31 遺物	145
		図版32 遺物	146
		図版33 遺物	147
		図版34 遺物	148
		図版35 遺物	149
図版 1 遺跡	115	図版36 遺物	150
図版 2 遺跡	116	図版37 遺物	151
図版 3 遺跡	117	図版38 遺物	152
図版 4 遺跡	118		
図版 5 遺跡	119		
図版 6 遺跡	120		

図版目次

図版 1 遺跡	115	図版36 遺物	150
図版 2 遺跡	116	図版37 遺物	151
図版 3 遺跡	117	図版38 遺物	152
図版 4 遺跡	118		
図版 5 遺跡	119		
図版 6 遺跡	120		

第1章 調査に至る経緯

明野町には、遺跡の分布調査によると、埋蔵文化財の包蔵地である遺跡が現在 151ヶ所が確認されている。この様に多くの埋蔵文化財があるにもかかわらず、郷土の歴史を語る上で重要な文化財について、それを正しく理解し、活用する機会にあまり恵まれていなかった。そのために地域住民の文化活動に対する認識や参加も消極的であった。また、一方では地域開発における自然環境の破壊や、社会構造の変化に伴う生活様式の推移の中で、先人たちが残してくれた貴重な文化遺産を保護していく心を忘れがちであった。

こうした現状の中で、町では人間性豊かな生活を営むためにはあらゆる面において、文化活動の開発を推進することがこれからの課題であるとして、特に文化財に対する町民の意識を高揚させていくために、町の文化財保護体制を整備する計画をもった。そして文化財保護審議会の答申に基づいて、長期的な展望に立った具体的な調査計画が作成された。

この様な一連の協議の中で、埋蔵文化財を開発から保護し、活用していくためには、町民の埋蔵文化財に対する理解を深め、協力を得ることが必要であることから、昭和 56 年 4 月、社会教育活動における事業の一環として、遺跡の継続的な学術調査を実施するために発掘調査の年次計画と予算を計上し、かつ遺跡調査会も設置した。遺跡調査会では遺跡の総合的、体系的な調査が必要であると位置づけられた。そして自然環境や歴史的地理的環境を含む遺跡の状況、性格を調べるために文化庁に通知、同 56 年 7 月、倉持遺跡の予備調査が行なわれた。

予備調査では試掘した土層から多くの縄文土器が検出され、土壤と思われる遺構も確認された。（これが後に行なった第 1 次調査の 1 号土壤である。）さいわいにも、これ等の遺構は後世の擾乱や耕作の影響はほとんど受けおらず、遺物の残存状態も比較的良好であることがわかった。堆積した土層の層位、状況を確認して、予備調査終了後、これ等の遺構はそのままの状態で再び埋め戻され、本調査を待つこととなった。

予備調査の結果をもとに、さらに協議、検討が加えられ、同 56 年 8 月、倉持遺跡の第 1 次発掘調査が開始された。

以後、倉持遺跡の全容を究明するための継続的な学術調査を実施するに至った。

なお、発掘調査した区域は発掘調査終了後再び埋め戻され、元の畠地に帰されたが、耕作の影響はほとんどなく、検出された遺構も現状のまま土中に保存される対策が講じられた。

第2章 調査の経過（調査日誌）

8月25日（火）

午前中鍬入れ式を行なう。午後より調査の準備をし、明日の杭打ちの打ち合せをする。

8月26日（水）

調査区は5mのグリッドを設定し、その周辺には地形測量のための20mのメッシュを組む。

全部で75本の杭を打つ。

8月27日（木）

残り11本の杭を打ち、杭打ちを終了する。付近の三角点より調査区に標高を移動する。

8月28日（金） 雨のため作業中止

8月29日（土）

縮尺200分の1、50cmコンターで地形測量を行なう。調査区南半分を35～31mのコンターを引く。地形は東に傾斜し谷が入っている。

8月31日（月）

調査区南半分を30.5～28mまで終了する。北側に移り35～31mのコンターを引く。

9月1日（火）

調査区北側を31～28mまでのコンターを引き、地形測量を終了する。

9月2日（水）

調査区は東西方向にA～D、南北方向に1～14までのグリッドを設定し、D-11・12区の表土を排除する。深さ約20cmでローム層に達する。調査前の遺跡全景の写真を撮る。

9月3日（木）

C・D-11・12・13区の表土を排除し遺構確認をする。

9月4日（金）

B・C・D-2・3区を掘り下げる。この地区は谷になっており、Ⅲ層まで確認したがローム層まで達していない。また、遺物の出土量がかなり多い。

9月5日（土）

B・C・D-1・2・3区を掘り下げる。この地区は遺構確認ができず、多量の遺物は土から流れ込みと思われる。

9月6日（日）

C・D-11・12・13区を精査し、土壠20基、溝状遺構3本（2号方形周溝墓・1号溝・2号溝）を確認する。

9月7日（月）

C・D-5～10区の表土排除をする。8ラインあたりから南側にはローム層は現われない。

9月8日（火）

C・D-9・10区の遺構確認をする。C・D-5～8区をII層まで掘り下げる。C・D-3区及びB-2区出土遺物を写真撮影の後、取り上げる。

9月9日（水）

D-8・9・10区に溝状遺構（1号墳）を確認する。谷の深さを調べるためにD-1・2・3区を掘り下げる。B-3区出土遺物の写真撮影の後、取り上げる。

9月10日（木）

C-6区に溝状遺構（1号方形周溝墓）を確認する。D-4区を掘り下げる。

- 9月11日（金）
C-8・9、D-8区に1号方形周溝墓の統
きを確認する。
- 9月12日（土） 雨のため作業中止
- 9月13日（日）～9月15日（火）
1号墳と1号方形周溝墓の全体のプランを確
認する。
- 9月16日（水）
5号土壙を全掘し、4号土壙を調査する。
- 9月17日（木）
B-1～4区、C-9～12区の調査をする。
- 9月18日（金）
C-1～8区、D-9・10区の調査をする。
- 9月19日（土）
C-1～4区、D-1・5～8区の調査をす
る。
- 9月21日（月）
C・D-5～10区の遺構確認をする。土壙11
基、焼土ピット2基、埋甕1基を確認する。1
号墳の南半分の溝を掘り下げる。現場と並行し
て、出土遺物の水洗いを始める。
- 9月22日（火）
9ラインの上層断面より、1号墳が1号方形
周溝墓を切っていることを確認する。13号土壙
を半截する。
- 9月23日（水）
1号溝を掘り下げる。13号土壙の土層の写真
撮影、図面を取る。B・C・D-1～4区の土
層写真を撮る。
- 9月24日（木）
1号溝・1号墳・1号方形周溝墓を掘り下げ
る。13号土壙の遺物出土状態の写真撮影、実測
をする。
- 9月25日（金） 雨のため現場作業中止
遺物の水洗いを行う。
- 9月26日（土） 雨のため午前中一時中止
13号土壙の遺物を取り上げ全掘する。2号方
形周溝墓を掘り下げる。
- 9月27日（日）
13号土壙の調査を終了し、2号土壙の調査を
する。1号墳、2号方形周溝墓を掘り下げる。
- 9月28日（月）
2号土壙の土層の写真撮影・図面を取り、全
景写真を撮る。1号溝の平面実測をする。1号
墳を全掘する。1・2号方形周溝墓を掘り下げ
る。
- 9月29日（火）
2号土壙の調査を終了し、3・12号土壙の調
査をする。1・2号方形周溝墓を掘り下げる。
1・2号溝の交差部分を調査し、土壙を確認す
る。
- 9月30日（水）
3・12号土壙の調査を終了し、1号土壙の調
査をする。2号方形周溝墓を全掘する。
- 10月1日（木） 雨のため現場作業中止
遺物の水洗い、図面整理を行なう。
- 10月2日（金）
23号土壙の調査をする。2号方形周溝墓の土
層・遺物出土状態及び全景の写真撮影をする。
- 10月3日（土）
23号土壙の調査を終了する。1号方形周溝墓
を全掘する。
- 10月4日（日）
1号土壙を全掘する。1号墳の上層写真及び
1号方形周溝墓の土層・遺物出土状態の写真撮
影をする。2号方形周溝墓の平面実測をする。
- 10月5日（月）
1・2号溝を全掘する。1号土壙の調査を終
了する。1・2号方形周溝墓を実測する。10・
22・24・25・27号土壙の調査をする。

10月6日(火)	7・8・28・32～39号土壌の調査をする。1号墳の東側の周溝を確認するためトレンチを設定する。B・C・D-1～4区の遺物出土状態の写真撮影をする。	10月15日(木)	1号住居址の写真撮影をする。9・30号土壌
10月7日(水)	7・10・22・24・25・27・28・33～39号土壌の土層写真及び4・5・8・32号土壌の全景を写真撮影する。10・22・27・35号土塁の土層を実測する。1号墳のトレンチで、東側の周溝と1号住居址を確認する。	10月16日(金)	1・2・3号焼土ピットの土層の写真撮影をする。
10月8日(木)	雨のため現場作業は10時で中止し、遺物の水洗いをする。	10月17日(土)	9・11・14～21・30号土壌、1・2・3号焼土ピットを全掘する。
10月9日(金)	7・28号土壌の土層図を取る。	10月18日(日)	1号住居址の平面実測をする。D-1～3区をローム層面まで掘り下げる。
10月10日(土)	1号墳・1・2号方形周溝墓及び半截した土壙の土層図を取る。6・11・14～21号土壌の調査をする。1号住居址の全体のプランを確認する。全測図を取り始める。	10月19日(月)	現地説明会を行なう。
10月11日(日)	1・27号土壌の遺物出土状態を実測する。	10月20日(火)	D-1～4区の土層写真、図面を取る。
10月12日(月)	1号住居址の調査をする。全測図を完了する。	10月21日(水)	1号住居址の炉の調査をする。1・2号埋甕の調査をする。
10月13日(火)	1号住居址の床面を調査し、炉・柱穴を確認する。6・11・14～21号土壌の土層写真・図面を取る。谷の深さを調べるためD-1～3区を掘り下げる。	10月22日(木)	調査区の全景写真を撮影する。
10月14日(水)	1号住居址、6・26・39号土壌を全掘する。9・30号土壌、1・2・3号焼土ピットの調査をする。	10月23日(金)	雨のため現場作業中止
			遺物の水洗いをする。
		10月24日(土)	6・9・22・26・29～31・39号土壌、1～3号焼土ピット、1・2号埋甕の平面実測をする。
			来年の調査のため、A-9とB-5にコンクリート杭を埋める。
		10月25日(日)	6～12・14～31号土壌、1・2号埋甕の全景の写真撮影をする。
			午前中、残りの遺構の写真撮影をし、調査を終了する。
		11月5日(木)～11月6日(金)	1号住居址の埋め戻しを行なう。
		11月12日(木)	発掘調査現場の供養をする。

第3章 遺跡の地理的歴史的環境

明野町は、西は利根川に流れ込む小貝川、東は霞ヶ浦に流れ込む桜川にはさまれ、東側には筑波山を真近にひかえている。明野町の北西部から南東部にかけて水田が細長く延びているが、この水田を東側に臨む台地縁辺に沿って多くの遺跡が並んでいる。その中の一つが倉持遺跡である。

遺跡の立地する台地は、標高35m、水田面との比高差は約10mを測る。遺跡のすぐ下には薬師池と呼ばれる池がある。他にも周辺の台地下にはいくつかの水源があり、生活するにはかなり適した所である。(立地略号 Pe-Dt-Lt, Ho-Mf)

同じ台地縁辺部にはいくつかの遺跡が並んでいる。遺跡のすぐ北側の小支谷をはさんで弥生時代後期から古墳時代、奈良・平安時代にかかる宮前遺跡、その北には、縄文時代中期・後期、古墳時代にかかる宮北遺跡がある。遺跡の南側には、古墳時代から奈良・平安時代にかけての富士山遺跡・倉持前畠遺跡がある。いずれも同じ立地の遺跡である。また、水田をはさんで、対岸の標高24m・水田面との比高差1~2mの低台地にもいくつかの遺跡がある。倉持遺跡のちょうど真北には山王堂遺跡がある。この遺跡は、縄文時代中期・後期・晚期、古墳時代、奈良・平安時代、中世以降にかけての複合遺跡であるが、特に縄文時代晚期の遺跡で知られている。また、山王堂合戦のあった古戦場でもある。山王堂遺跡の南には、縄文時代・古墳時代、奈良・平安時代にかけての宮先遺跡・狭間遺跡、古墳時代から奈良・平安時代、中世以降にかかる台遺跡がある。

このような条件下で、倉持遺跡は、縄文時代中期・後期、弥生時代後期、奈良・平安時代、中世以降まで営まれていた。



筑波山頂から



第1図 遺跡位置図

第4章 遺跡の概要

倉持遺跡は、茨城県真壁郡明野町大字倉持字中妻・中道・竜造前 618～622、646～649、
658～668、678～694、702～712、726 番地に所在する。（茨城県遺跡地図 2229 番）

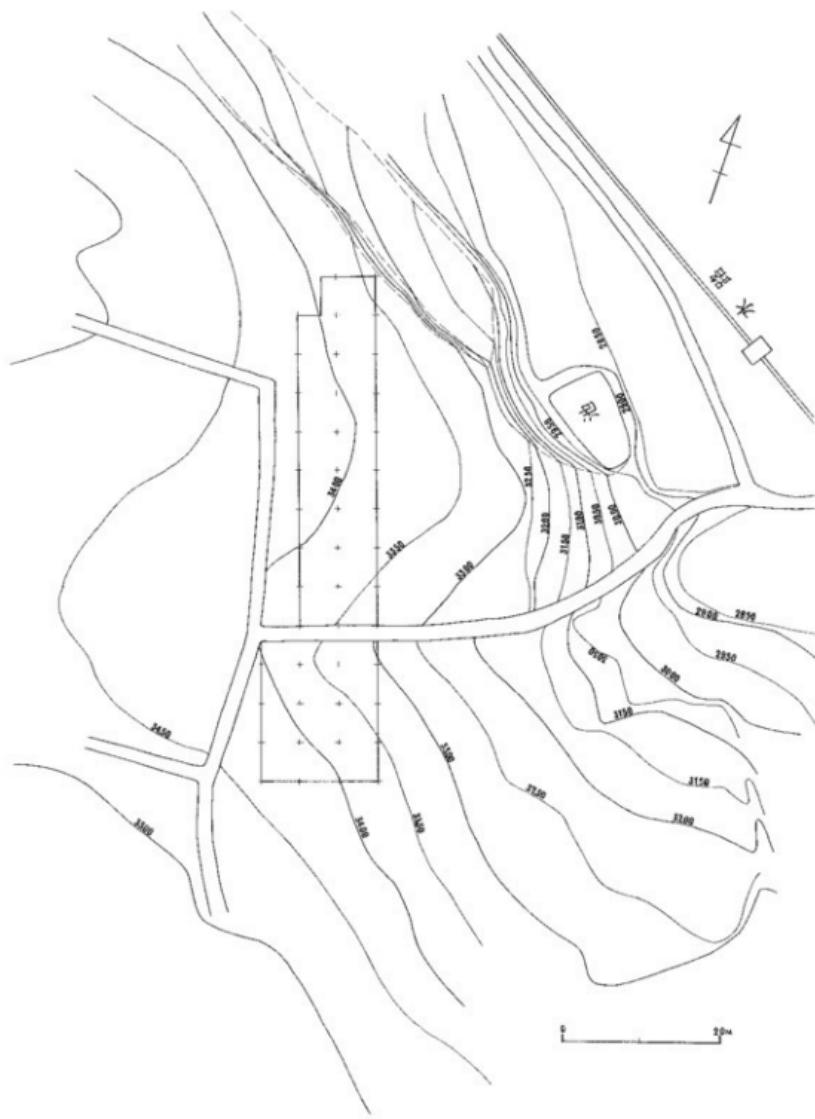
遺跡は、東側に水田を臨む台地縁辺部に立地し、標高35m、水田面との比高差は約10mを測る。遺跡の中央部には、東側の水田から小支谷が入り込み、遺跡はこの谷を囲むように形成されている。現状は畑地で、遺跡周辺の台地下には水源がいくつかあり、真東には筑波山が眼前にせまっている。遺跡は約450×150mの範囲に広がっているが、今回は、659・682・683 番地の約820m²を調査した。

土層は、調査区北部では、I層表土、VI層ローム層、VII層黄色粘土層、VIII層白色粘土層の順に堆積している。各土層の堆積は薄く、表土下20cmほどでローム層に達し、80cmほどで白色粘土層に達する。ほとんどの遺構は、この白色粘土層まで掘り込まれている。調査区の南側に行くにつれて、II層黒色土層、III層黄褐色土層、IV層黒褐色土層の堆積が厚くなり、谷部ではローム層まで約3mも堆積している。出土した遺物の9割はこの谷部から出土したもので、II・III層中に多く包含している。これらの遺物は廃棄あるいは自然に流れ込んだものと考えられる。

遺構は、縄文時代中期後半から後期前半にかけての土壙39基・埋甕2基・焼土ピット3基、弥生時代後期の住居址1軒、古墳時代の方形周溝墓2基・古墳1基、中世の溝2本を調査した。縄文時代の土壙は調査区の北半分に集中している。土壙は他に古墳の中にも確認されたが、期間の関係で調査しなかった。今回の調査で唯一の住居址は、古墳の東側の周溝を確認するためトレンチを入れた所、偶然に確認されたものである。

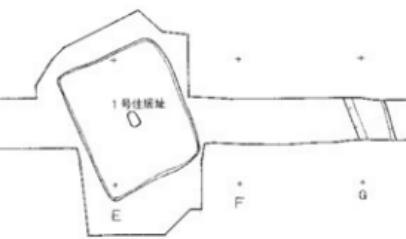
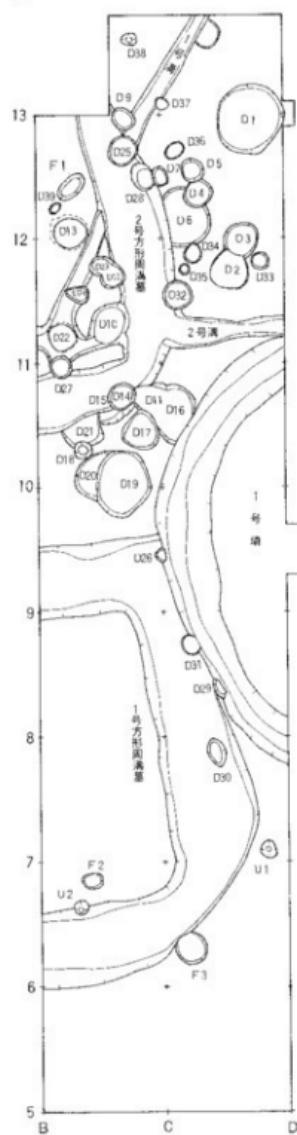
遺物は、平箱で60箱以上出土している。各時期の遺物が出土しているが縄文時代のものが圧倒的に多い。縄文式土器は、阿玉台式・加曾利E I～IV式・称名寺式・堀之内式土器である。石器は少量であるが、打製石斧・磨製石斧・石礫・すり石・石皿等が出土している。土製品は土製円盤等が出土している。土師器は、方形周溝墓から壺形土器・器台形土器、古墳から楕形土器が出土している。古墳からは他に鉄製の刀子が出土している。また、谷部のIII層上面からは、「院」の墨書きのある須恵器の杯形土器が出土した。

以上が、遺跡の概要であるが、今回の調査で特徴的なることは、弥生時代の住居址1軒を除いてすべて墓址的性格のものであった。



第2図 遺跡地形図

14



D—土
U—砂
F—沈土ピット

10M

第3図 造構全図

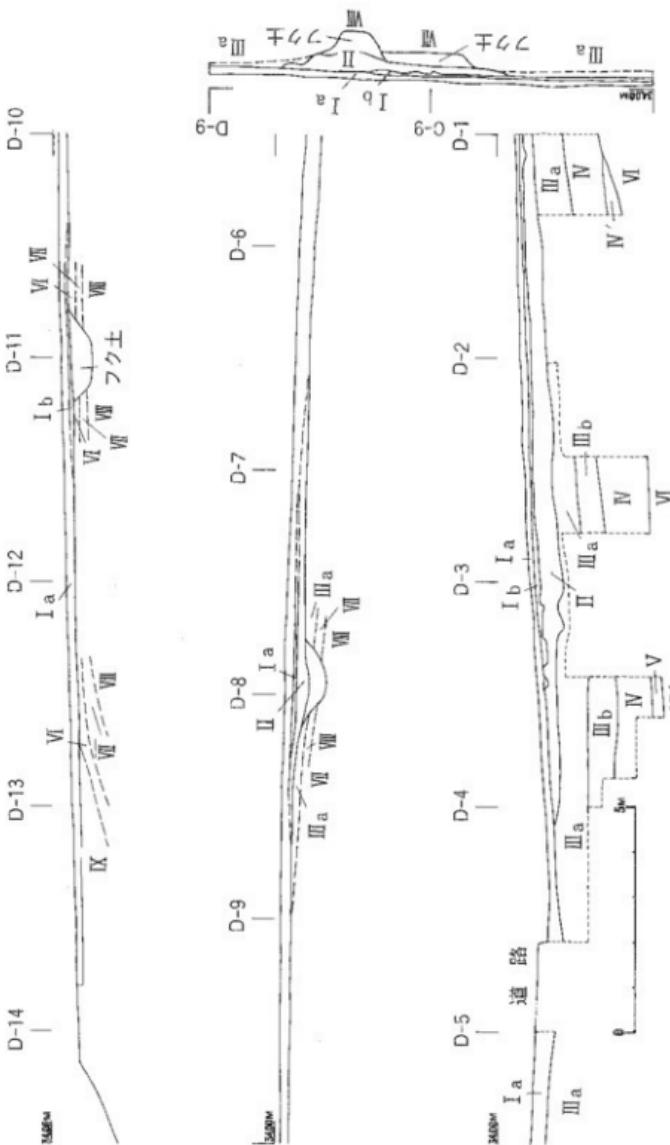


図 4 土壌断面図

第5章 遺構

第1節 繩文時代の遺構

1号土壙

位置 D-12・13区

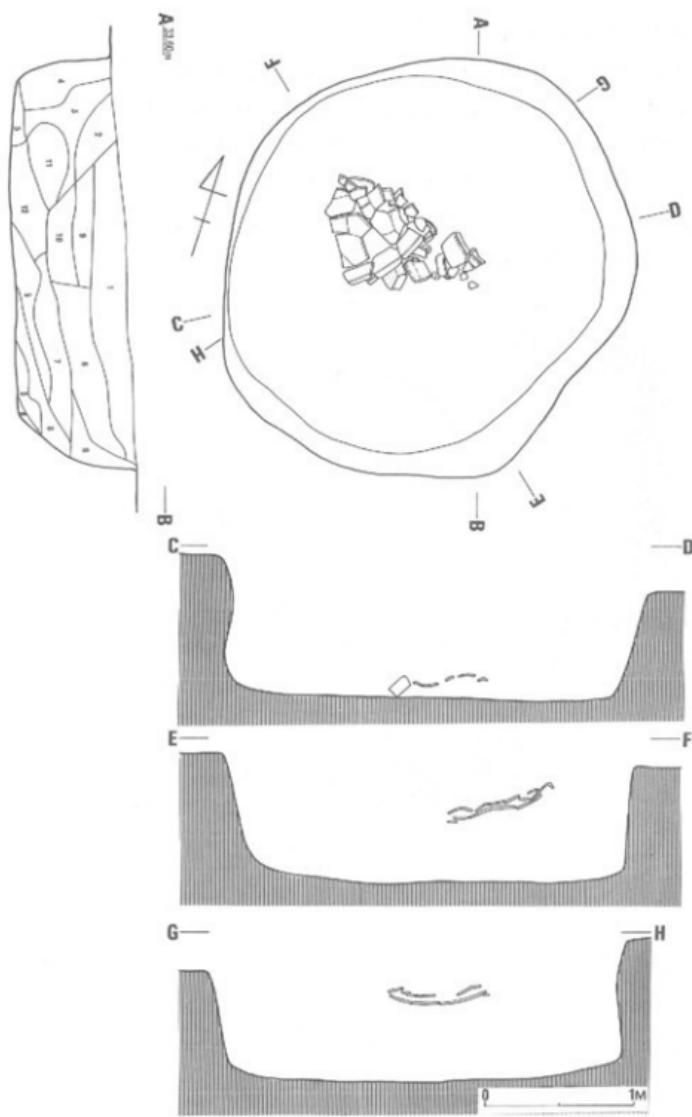
形態 300×260cmの不整円形で深さは90cmある。壁はほぼ垂直に立ち上がり、部分的に外側にふくらむ。底面は平坦である。なお、東側の壁中央部に径約20cm、奥行20cmの円形の掘り込みがあった。

覆土 12層に分けられ、2回に渡って人為的に埋められたものと思われる。粘土の混入した土が交互に重なっており、底面出土の土器はその土で固定されているようである。2回目に埋めた層は1・6・9・10層で、覆土中層出土の土器は9の粘土層によって固定されたようである。他に、骨粉が認められた。

遺物 底面から銅上半部完形の深鉢形土器（第62図2）が石と併に出土している。覆土中層から完形の深鉢形土器（第69図1）が横になってつぶれた状態で出土している。他に覆土内より破片が出土している。石器類では、すり石2点、石皿の破片が4個体、土製品では土製円盤が6点出土している。

土層説明

番号	上層名	混入物	備考
1	褐色土	ローム粒少	
2	褐色土	ローム粒、白色粘土	かたい
3	暗褐色土	ローム粒少	やわらかい
4	黒褐色土	ローム粒微	やわらかい、地山くずれ
5	褐色土	黄色粘土、白色粘土	非常にかたい、粘性強
6	褐色土	ローム粒・炭化物微	かたい
7	褐色土	6に似る	6よりかたい、粘性
8	褐色土	黄色粘土・白色粘土多	
9	黄色粘土	褐色土	ブロック状
10	暗褐色土	3に似る、炭化物微	
11	暗褐色土	ローム粒、黄色粘土、白色粘土	
12	暗褐色土	11より多	かたい、粘性



第5図 1号土壤

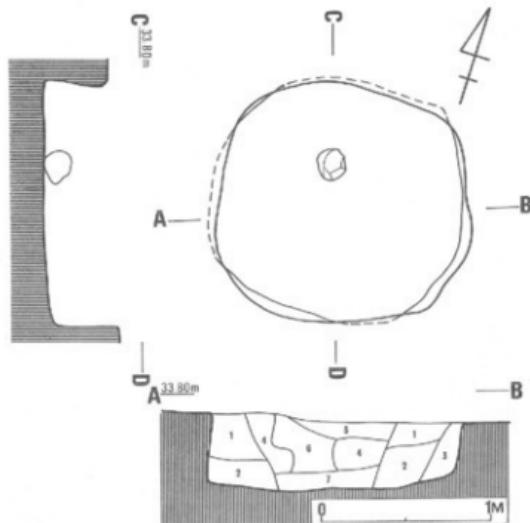
2号土壤

位置 D-11区 3号土壤を切っている。

形態 径150cmの不整円形で深さは45cmある。壁はわずかに袋状を呈し、底面は平坦である。

覆土 7層に分けられるが、大きく壁際の明褐色土と中央部の暗褐色土の2種類に分けることができる。壁際の明褐色土はかたくしまっている。中央部の暗褐色土はやわらかく、骨粉・炭化物・土器片が混入している。入為的に埋められたものと考えられる。

遺物 中央部の暗褐色土4~7層の出土に限られ、土器片の他、すり石と土製品が1点ずつ出土している。また、底面のはば中央部に自然石が置かれていた。



第6図 2号土壤

土層説明

番号	土層名	混入物	備考
1	明褐色土	ローム粒、炭化物	
2	明褐色土	1より多	かたい
3	明褐色土	ローム粒・白色粘土多	粘性強
4	暗褐色土	ローム粒、炭化物、焼土、骨粉	
5	暗褐色土	骨粉	バサバサしている
6	暗褐色土	4に似る、骨粉	やわらかい
7	暗褐色土	ローム粒・白色粘土多、骨粉	かたい、やや黄色

3号土壤

位置 D-11・12区 2号土

壇に切られる。

形態 径70cmの円形で深さは60cmある。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面はやや丸みを帯びる。

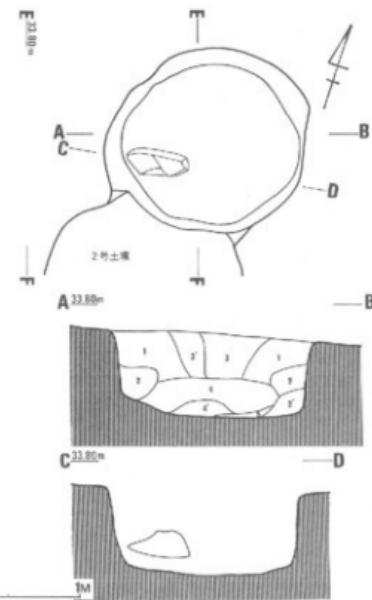
覆土 5層に分けられるが、2号土壤と同様に、大きく壁際の明褐色土と中央部の暗褐色土に分離される。壁際の明褐色土はかたく粘性があり、中央部の暗褐色土はやわらかく、骨粉・遺物・焼土が混入している。また、底面の中央部一帯には、灰の屑が薄く堆積している。

人為的に埋められたものと考えられる。

遺物 2号土壤と同様に、中央部の暗褐色土3'~4'層からの出土に限られ、土器片の他、すり石と土製品が1点ずつ出土している。また、覆土下層の壁付近から自然石が出土している。

土層説明

番号	土層名	混入物	備考
1	明褐色土	ローム粒	
2	明褐色土	1と同じ	かたい、粘性
2'	明褐色土	1と同じ	粘性弱
3	暗褐色土	ローム粒、炭化物、焼土、骨粉	やわらかい
3'	暗褐色土	ローム粒多、焼土、骨粉	やわらかい
4	暗褐色土	ローム粒少、焼土、骨粉	粘性
4'	暗褐色土	4と同じ	4よりかたい
5	灰褐色土	灰多	粘性



第7図 3号土壤

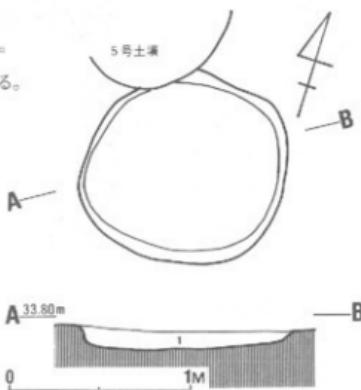
4号土壤

位置 D-12区 5号土壤に切られ、6号土壤を切っている。

形態 120cm×110cmの不整円形で深さは10cmある。

覆土 1層で、ローム粒子を少量含んだ褐色土である。

遺物 土器片が数点出土しただけである。



第8図 4号土壤

5号土壤

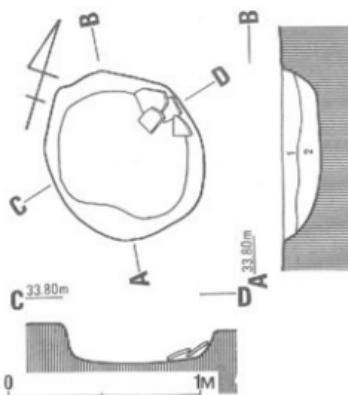
位置 D-12区 4号土壤を切っている。

形態 100×80cmの楕円形で深さは20cmある。

覆土 2層に分けられる。2層とも暗褐色土で1層

はローム粒子をわずかに含み、2層はローム
粒子・炭化物を含み粘性がありかたい。

遺物 磁器に1個体の胸部破片と、覆土内から石器
が1点出土している。



第9図 5号土壤

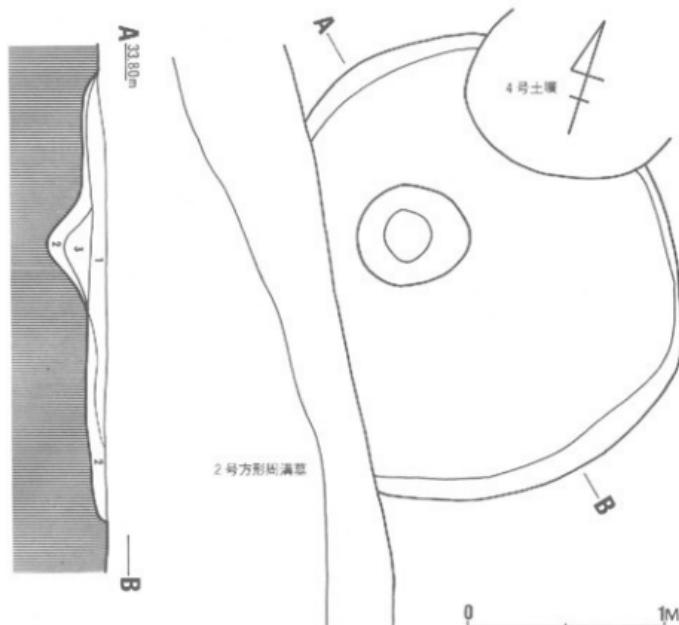
6号土壤

位置 D-11・12区 西側を2号方形周溝墓、北側を4号土壤に切られる。

形態 235×210cmの楕円形で深さは10cmある。中央付近に60×50cmの不整円形で深さが土壤の底面から20cmのピットがある。土層の堆積状態から、このピットは土壤に伴うものである。

覆土 3層に分けられ、自然堆積である。

遺物 覆土内より土器片が数点出土しただけである。



第10図 6号土壤

上層説明

番号	土層名	混入物	備考
1	茶褐色土	ローム粒少	
2	褐色土	ローム粒・黄色粘土多	かたい
3	暗褐色土	ローム粒少	非常にかたい、粘性

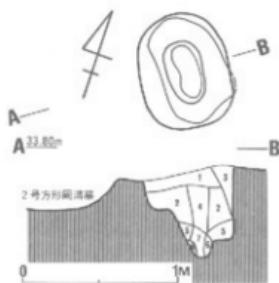
7号土壤

位置 C・D-12区 28号土壤を切っている。

形態 75×60cmの楕円形で深さは50cmある。土壤中央に40×25cmの楕円形で深さ約10cmのピットがある。2段に掘り込まれた状態である。

覆土 7層に分けられ、自然堆積ではない。

遺物 覆土内より土器が数片出土しただけである。



第11図 7号土壤

土壤説明

番号	土層名	混入物	備考
1	褐色土	ローム粒	
2	暗褐色土	ローム粒・粘土	かたい
3	黄褐色土	褐色土	ロームくずれ
4	暗褐色土		やわらかい
5	暗褐色土		かたい、粘性
6	褐色土	白色粘土	
7	暗褐色土		4よりしまる

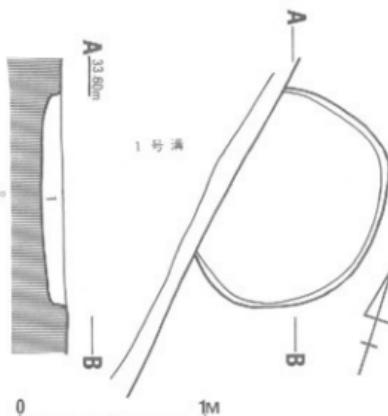
8号土壤

位置 D-13区 1号溝に切られる。

形態 長軸120cmの楕円形で深さは10cmある。

覆土 1層で褐色土である。

遺物 覆土内より土器が数片出土しただけである。



第12図 8号土壤

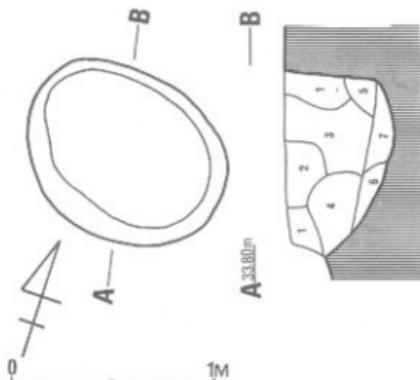
9号土壤

位置 C-12区 1号溝と2号方形周溝蒸に切られる。

形態 105×85cmの椭円形で深さは55cmある。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は丸みを帯びる。

覆土 7層に分けられて、人為的な堆積であると考えられる。底面と壁際の土はかたく、中央部の土はやわらかい。

遺物 覆土内より土器が数片出土しただけである。



第13図 9号土壤

土層説明

番号	土層名	混入物	備考
1	暗褐色土	ローム粒微、ローム塊	
2	暗褐色土	ローム粒少	かたい
3	暗褐色土	ローム粒微	やわらかい
4	黄褐色土	ローム粒・黄色粘土多	かたい、粘性
5	黒褐色土		かたい、粘性
6	暗褐色土	黄色粘土・白色粘土	非常にかたい、粘性
7	暗褐色土	6と同じ	6よりかたい、粘性強

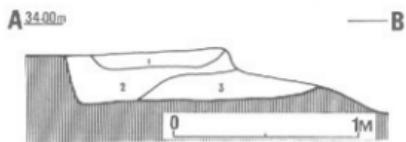
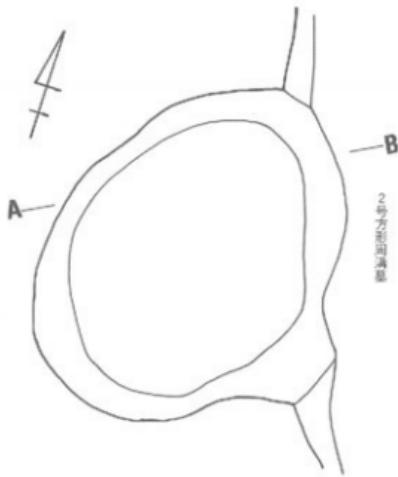
10号土壤

位置 C-11区 2号溝と2号方形周溝墓に切られる。

形態 200×170cmの楕円形で深さは25cmある。

覆土 3層に分けられ、自然堆積である。

遺物 覆土内より土器片が出土している。



第14図 10号土壤

土層説明

番号	土層名	混入物	備考
1	暗褐色土	ローム粒少	やわらかい
2	暗褐色土	ローム粒少	かたい
3	暗褐色土	ローム粒少	2よりかたい

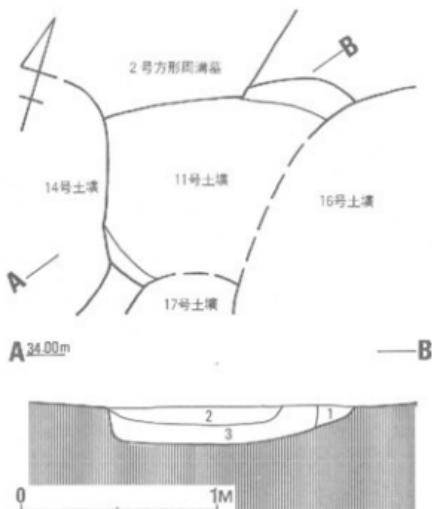
11号土壤

位置 C-10区 2号方形周溝墓と、16・17号土壤に切られ、14号土壤を切っている。

形態 残存している墳の状態から径140cmの円形か椭円形になると思われる。深さは20cmある。

覆土 3層に分けられ自然堆積と思われる。

遺物 覆土内より土器が数片出土しただけである。



第15図 11号土壤

土層説明

番号	土層名	混入物	備考
1	褐色土	ローム	
2	暗褐色土	ローム粒微	やわらかい
3	暗褐色土		非常にかたい

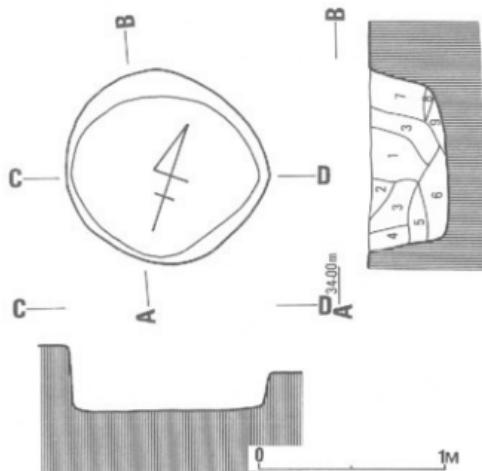
12号土壤

位置 C-11区 2号方形周溝基に切られ、23号土壤を切っている。

形態 径110cmの円形で深さは40cmある。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

覆土 9層に分けられ、3~5層のかたい土の間に1・2・6層のやわらかい土がはさまれており、
人为的に埋められたものと思われる。骨粉が混入している。

遺物 覆土内より土器片が出土している。



第16図 12号土壤

土層説明

番号	土層名	混入物	備考
1	黒褐色土	ローム粒、炭化物	やわらかい
2	暗褐色土	1に似る、ローム粒少	
3	暗褐色土	ローム粒多、炭化物少	かたい
4	黄褐色土	ローム	
5	暗褐色土	3に似る、ローム粒少	
6	黒褐色土	ローム粒・炭化物多	粘性
7	茶褐色土	ローム粒・炭化物少	やわらかい
8	黒褐色土		やわらかい
9	灰褐色土	ローム塊	非常にかたい、粘性

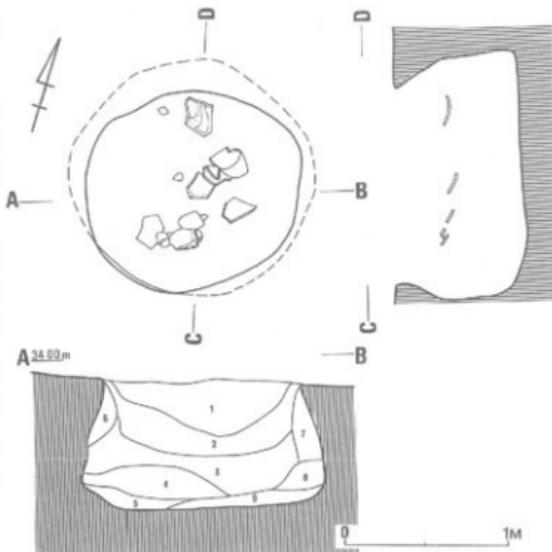
13号土壤

位置 C-11・12区

形態 135×125cmの不整円形で深さは80cmある。

壁は外側にふくらみ袋状を呈する。底面は径150cmの不整円形で平坦である。

覆土 9層に分けられる。壁際には地山に近い土が縦に堆積し、中の土層は自然堆積の状態を呈している。しかし、最上層の1層は、非常にかたく、平面でもその範囲が円形に確認でき人為的な意図が感じられる。



第17図 13号土壤

遺物 2層から大型の破片が出土し、3個体復原できた。1つは完形の深鉢形土器（第73図2）で、後は胴下半部（第81図6）と口縁部である。他層からも土器片が出土しているが、1層から多量に出土している。また、土製円盤が出土している。

土層説明

番号	土層名	混入物	備考
1	黄褐色土	ローム粒多、骨粉	非常にかたい、土器片多
2	暗褐色土	ローム粒少、炭化物、骨粉	大型破片
3	暗褐色土	ローム粒、炭化物、白色粘土、骨粉	2よりしまる
4	暗褐色土		かたい、やや黒色
5	褐色土	粘土粒	かたい
6	暗褐色土	ローム粒、ロームブロック	
7	黄褐色土		ロームくずれ
8	黄褐色土	ローム粒、ロームブロック、白色粘土多	
9	黒褐色土	ローム粒、白色粘土	

14号土壤

位置 C-10区 2号方形周溝墓と11号土壤に切られ、15号土壤を切っている。

形態 残存部から推定すれば、径130cm以上の円形を呈すると思われる。深さは35cmある。

覆土 3層に分けられる。

遺物 覆土内より土器が数片出土しただけである。

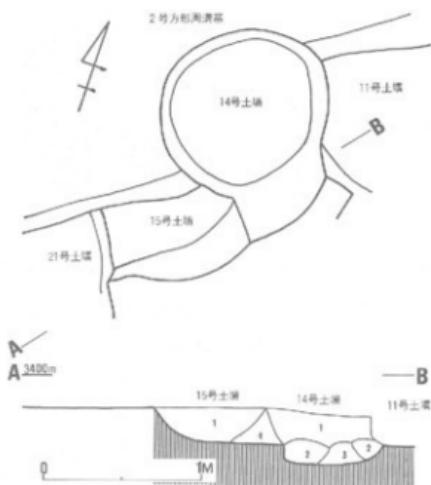
15号土壤

位置 C-10区 2号方形周溝墓と14・21号土壤に切られる。

形態 残存部からは推定できない。深さは25cmある。

覆土 2層しか残っていない。

遺物 覆土内より土器が数片出土しただけである。



第18図 14・15号土壤

土壤説明

番号	上層名	混入物	備考
1	暗褐色土	ローム粒少	やわらかい
2	黄褐色土	黄色粘土多	かたい, 粘性
3	黒褐色土	炭化物多	かたい
4	暗褐色土	ローム, 黄色粘土	かたい, 粘性

16号土壤

位置 C・D-10区 1号墳に切られ、11・17号土壤を切っている。

形態 200×180cmの梢円形で深さは20cmある。

覆土 4層に分けられる。2層に骨粉が混入していた。

遺物 覆土内より土器片が出土している。

17号土壤

位置 C-10区 16号土壤に切られ11号土壤を切っている。

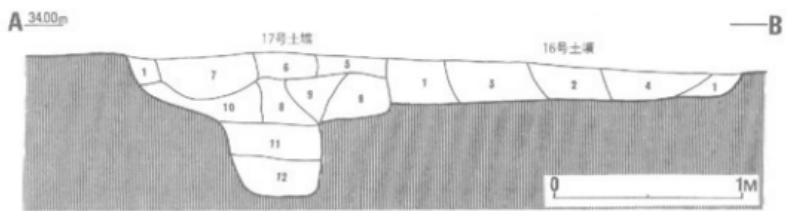
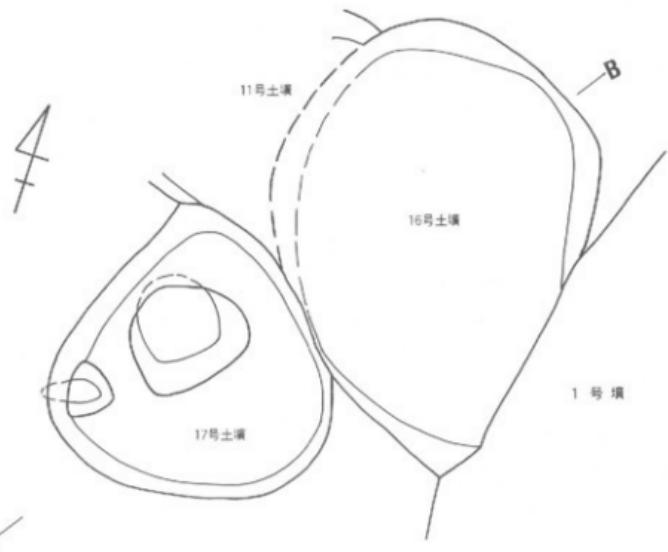
形態 径150cmの不整円形あるいは、1辺160cmの隅丸三角形を呈する。深さは35cmある。土壤中央に65×60cmの不整円形で深さ40cmのピットと、壁際に径30cm・深さ約10cmの円形のピットがある。2基のピットは斜めに掘り込まれている。このピットは、土層の堆積状態からこの土壤に伴うものと思われる。

覆土 9層に分けられる。自然地積かと思われる。

遺物 覆土内より土器片がわずかに出土しただけである。

土層説明

番号	上層名	混 入 物	備 考
1	黄褐色土		ロームくずれ
2	暗褐色土	ローム粒，骨粉	
3	褐色土	ローム粒微	かたい
4	暗褐色土		やわらかい
5	褐色土		やわらかい
6	褐色土		しまる
7	暗褐色土		しまる
8	褐色土		かたい，粘性
9	暗褐色土	ローム粒微	やわらかい
10	褐色土		8よりかたい
11	黄褐色土		粘性強
12	灰褐色土	黄色粘土，白色粘土	かたい，粘性強



第19図 16・17号土壤

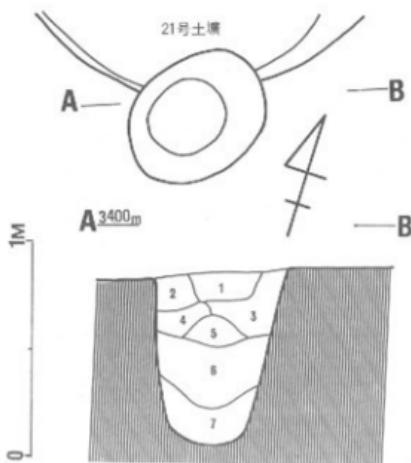
18号土壤

位置 C-10区 21号土壤を切っている。

形態 70×55cmの楕円形で深さは85cmある。

覆土 7層に分けられ、自然堆積と思われる。

遺物 覆土内より土器が数片出土しただけである。



第20図 18号土壤

土層説明

番号	土層名	混入物	備考
1	褐色土		やわらかい
2	褐色土		
3	褐色土	ローム粒少	かたい
4	褐色土	ローム粒少	
5	暗褐色土		やわらかい
6	暗褐色土	炭化物少	粘性
7	暗褐色土		非常にかたい、粘性強

19号土壤

位置 C-9・10区 20号土壤に切られる。

形態 270×230cmの楕円形で深さは30cmある。土壤の北側の壁に接して90×80cmの不整円形をし
た深さ約60cmのピットがある。この土壤に伴うものと思われる。

覆土 7層に分けられる。上層中央部に浮いた状態で焼土が認められた。

遺物 覆土内より土器片の他、自然石が出土した。

20号土壤

位置 C-10・11区 19号土壤を切っている。

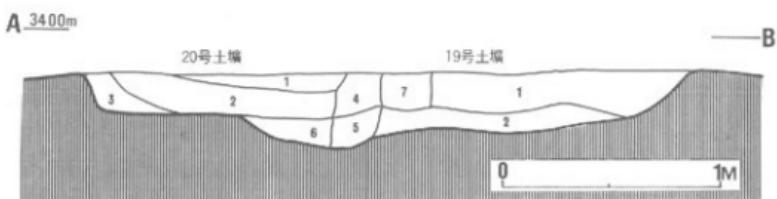
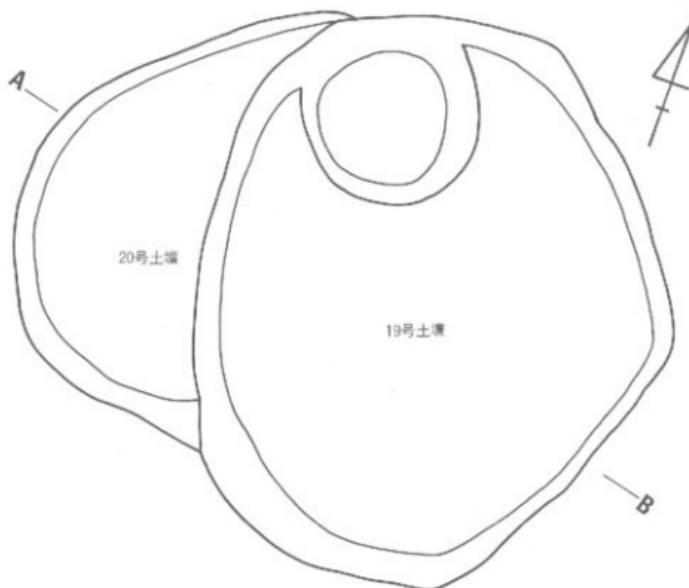
形態 径200cmの不整円形を呈すると思われる。深さは20cmある。

覆土 3層に分けられ、自然堆積である。西側から堆積したような状態である。

遺物 覆土内から土器片の他、自然石が出土している。

上層説明

番号	土層名	混入物	備考
1	暗褐色土	ローム粒微	やわらかい
2	暗褐色土	ローム粒少	かたい
3	褐色土	ローム	かたい
4	暗褐色土	ローム粒、焼土粒少	かたい
5	暗褐色土	黄色粘土	非常にかたい、粘性強
6	暗褐色土	黄色粘土	
7	焼土		



第 21 図 19・20 号 土 壤

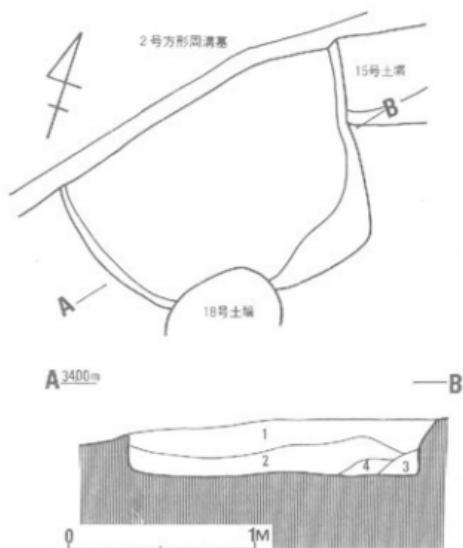
21号土壤

位置 C-10区 2号方形周溝墓と18号土壤に切られ、15号土壤を切っている。

形態 ほぼ2分の1が残存しているが、径170cmの不整円形を呈するのもと思われる。深さは30cmある。

覆土 4層に分けられ、自然堆積と思われる。

遺物 土器片の他、土製円盤が1点出土した。



第22図 21号土壤

土層説明

番号	土層名	混入物	備考
1	暗褐色土	ローム粒微	やわらかい
2	暗褐色土	ローム粒少	かたい
3	黄褐色土	ローム、黄色粘土	
4	暗褐色土	黄色粘土	粘性

22号土壤

位置 C-11区 1・2号溝に上半部を切られる。

形態 125×115cmの不整円形で、深さは50cmある。壁は一部を除いて、外側にふくらみ袋状を呈する。底面は120×110cmの不整円形でやや丸みを帯びる。

覆土 4層に分けられ、人為的に埋められたようと思われる。骨粉が混入していた。

遺物 土器が多量に出土しているが、その中から胴下半部(第72図5)が復原できた。

また、すり石が出土している。

土層説明

番号	土層名	混入物	備考
1	暗褐色土	ローム粒多、炭化物	
2	黄褐色土	ローム粒多	かたい
3	暗褐色土	1に似る	
4	暗褐色土	ローム粒少、炭化物	粘性

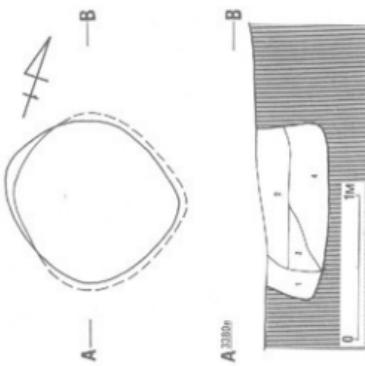
23号土壤

位置 C-11区 1号溝と12号土壤に切られる。

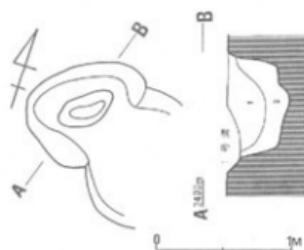
形態 90×70cmの楕円形で深さは40cmある。土壤中央に45×25cmの楕円形を呈し深さ10cmのピットがある。このピットは土層の堆積状態から土壤に伴うものである。

覆土 2層に分けられる。2層とも褐色土で1層はローム粒子を多量に含みかたい。2層はローム粒子を少量、粘土ブロックを含み粘性があり1層よりもかたい。また、骨粉を含んでいる。2層とも炭化物の混入が認められた。

遺物 土器片が少量出土した。



第23図 22号土壤



第24図 23号土壤

24号土壤

位置 C-11区 1号溝に切られる。

形態 95×70cmの楕円形を呈するが、長軸の一方は急に狭くなる。深さは40cmある。

覆土 3層に分けられる。

遺物 土器が数片出土しただけである。

土層説明

番号	土層名	混入物	備考
1	褐色土	ローム	かたい
2	暗褐色土	ローム粒少	
3	暗褐色土	2に似る	非常にかたい、粘性

25号土壤

位置 C-12区 1号溝と2号方形周溝墓に上半部を切られる。

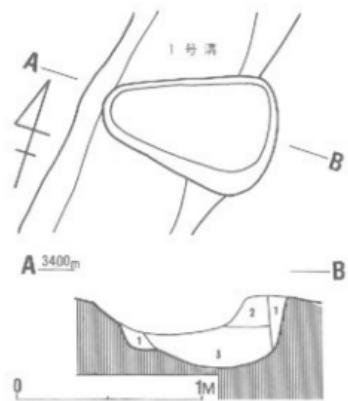
形態 125×115cmの不整円形で深さは50cmある。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は丸みを帯びる。

覆土 7層に分けられ人為的な堆積と思われる。

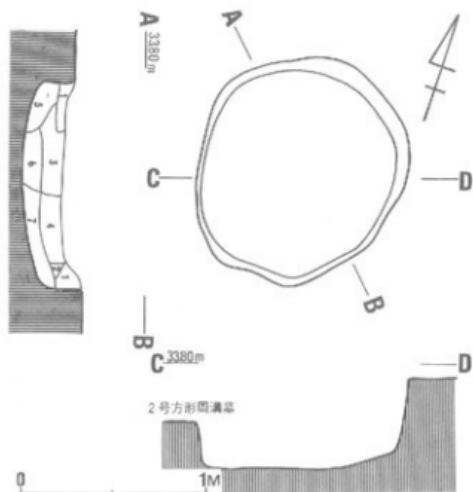
遺物 認められなかった。

土層説明

番号	土層名	混入物	備考
1	褐色土	ローム・粘土	やわらかい
2	黒褐色土		かたい
3	暗褐色土	ローム粒少	
4	暗褐色土	3に似る	やわらかい
5	暗褐色土		かたい、粘性
6	暗褐色土	粘土少	
7	暗褐色土	粘土多	



第25図 24号土壤



第26図 25号土壤

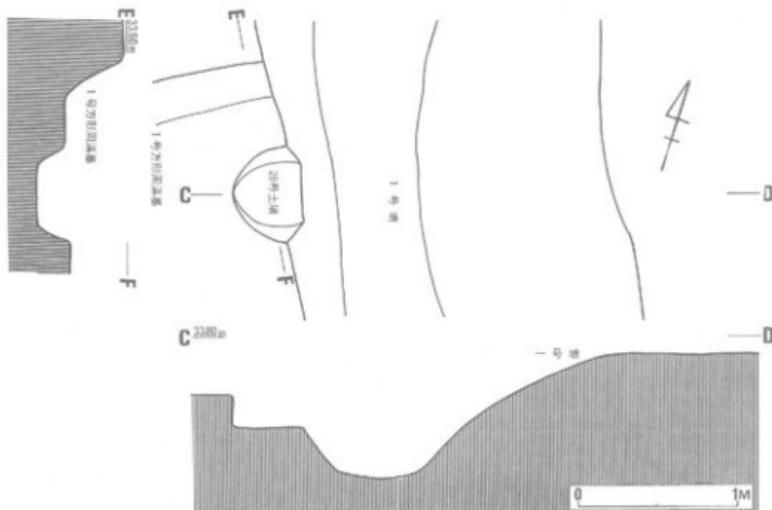
26号土壤

位置 C・D-9区 1号墳に東側の2分の1を切られ、1号方形周溝墓に残りの2分の1の上半部を切られる。

形態 残存する径は60cmで、円形を呈し深さは20cmある。

覆土 1層で褐色土である。

遺物 認められなかった。



第27図 26号土壤

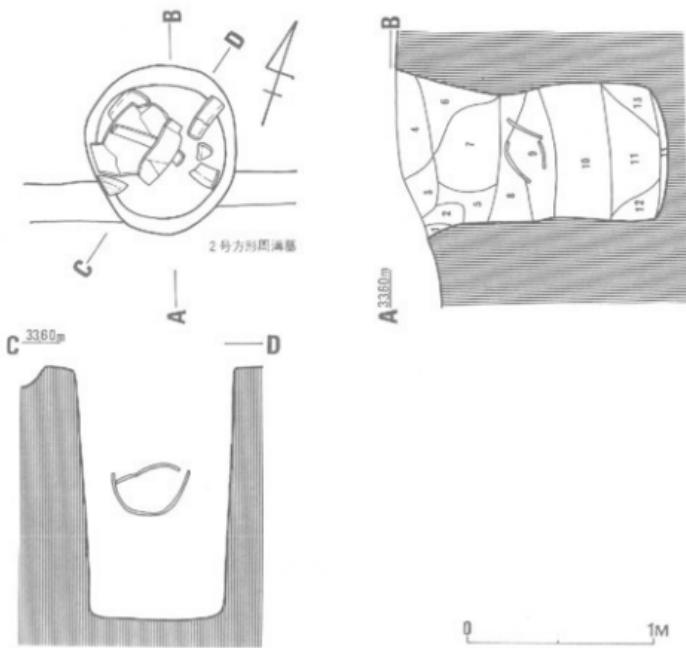
27号土壤

位置 C-10・11区 1号溝と2号方形周溝墓に上面を切られる。

形態 径90cmの不整円形で深さは135cmある。壁はほぼ垂直に立ち上がり円筒形を呈する。

覆土 13層に分けられ、上層の土は全体にかたい。中層には白色粘土層があり、そこに大型の土器がしっかりと固定されていた。その下の層は焼土と炭化物が多く混入したやや赤味がかった層である。人為的に埋められたようと考えられる。他に、骨粉が認められた。

遺物 墓上半部完形の深鉢形土器（第63図1）が壙になってつぶれた状態で9層の白色粘土内にしっかりと固定されていた。他に上層から凹石が出土している。



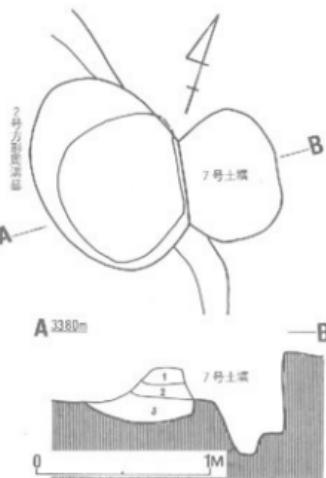
第28図 27号土壤
土層説明

番号	土層名	混入物	備考
1	黄褐色土	黄色粘土	
2	暗褐色土		やや茶色
3	暗褐色土	ローム粒・炭化物少	
4	褐色土	ローム粒	かたい
5	暗褐色土		粘性
6	暗茶褐色土	ローム粒・炭化物少	
7	暗褐色土	5に似る	かたい
8	暗茶褐色土		やわらかい, 粘性
9	白褐色土		かたい, 粘性強
10	茶褐色土	焼土・炭化物多	やわらかい, 粘性
11	暗褐色土	炭化物少	粘性強
12	褐色土	ローム粒	粘性
13	灰褐色土	白色粘土多	バサバサしている

28号土壤

位置 C-12区 2号方形周溝墓と7号土壤に切られる。

形態 120×85cmの楕円形で深さは35cmある。
覆土 3層に分けられ、自然堆積と思われる。
遺物 認められなかった。



第29図 28号土壤

土層説明

番号	土層名	混入物	備考
1	褐色土	ローム粒	
2	暗褐色土		かたい
3	暗褐色土	ロームブロック	かたい

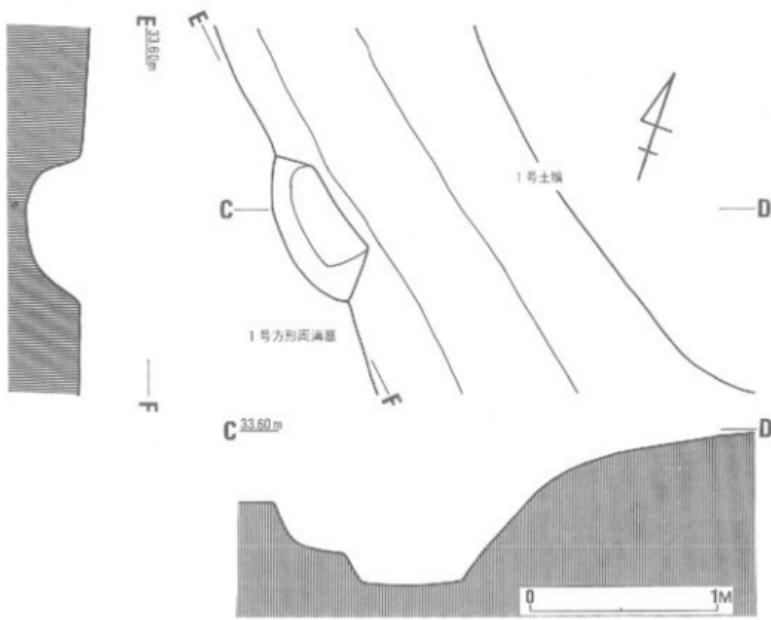
29号土壤

位置 D-8区 1号墳に半分以上切られる。

形態 残存部より推定すれば径約80cmの円形になると思われる。深さは25cmある。

覆土 残存部分に堆積していた土は褐色土である。

遺物 認められなかった。



第30図 29号土壤

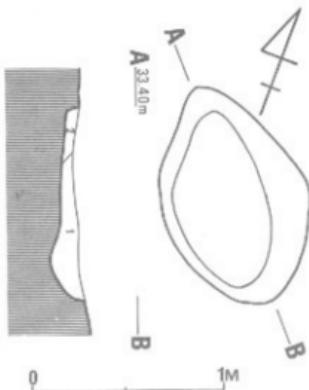
30号土壤

位置 D-7区 上半部を1号方形周溝に切られる。

形態 120×80cmの楕円形で深さは約10cmある。

覆土 2層に分けられる。1層は黒褐色土でローム粒子を少量含む。2層は明褐色土でローム粒子を多量に含みかたい。

遺物 土器片がわずかに出土しただけである。



第31図 30号土壤

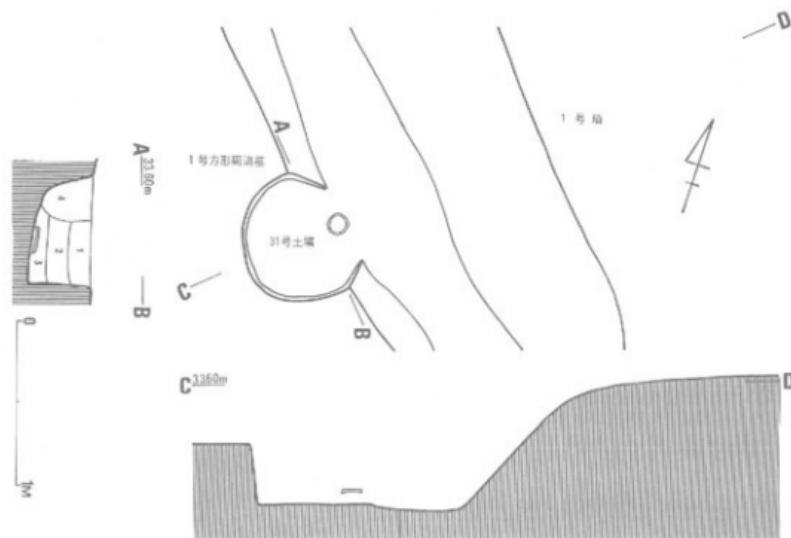
31号土壤

位置 D - 8 区 1号墳と1号方形周溝墓に切られる。

形態 徑80cmの円形で深さは40cmある。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

覆土 4層に分けられ人為的に埋められたものと思われる。

遺物 底面から浮いた状態で底部が逆さに置かれていた他は、土器片がわずかに出土しただけである。



第32図 31号土壤

土壤説明

番号	土種名	混入物	備考
1	褐色土		かたい、粘性
2	褐色土	黄色粘土	かたい、粘性
3	褐色土	ローム粒多	やわらかい
4	褐色土	黄色粘土、白色粘土	かたい

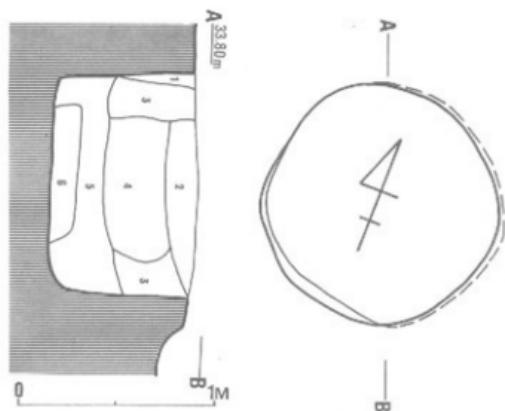
32号土壤

位置 D-11区 2号方形周溝墓に切られる。

形態 径125cmの円形で深さは75cmある。壁は西側ではほぼ垂直に立ち上がり、東側でやや外側にふくれる袋状を呈する。底面は平坦である。

覆土 6層に分けられ人為的に埋められたものと考えられる。骨粉が認められた。

遺物 土器片の他、すり石が1点出土した。



第33図 32号土壌

土層説明

番号	土層名	混入物	備考
1	褐色土	ローム	かたい
2	暗褐色土	ローム粒多	
3	暗褐色土	ローム粒・炭化物少	かたい
4	暗褐色土	ローム粒・炭化物少	やわらかい、粘性
5	褐色土	炭化物	かたい、粘性
6	黄褐色土	ローム塊多	かたい、粘性強

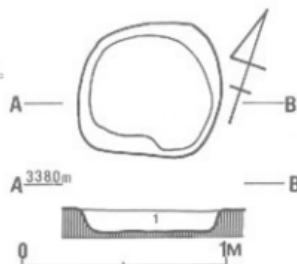
33号土壤

位置 D-11区

形態 70×65cmの不整円形で深さは10cmある。

覆土 1層で褐色土にローム粒子と炭化物を少量含みかたい。

遺物 土器片がわずかに出土しただけである。



第34図 33号土壤

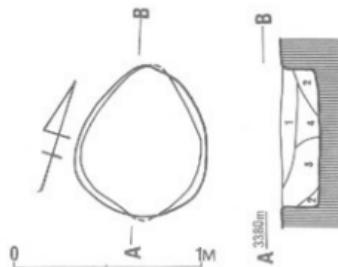
34号土壤

位置 D-11区

形態 80×70cmの楕円形で深さは20cmある。縁はほぼ垂直に立ち上がり底面は平坦である。

覆土 4層に分けられ、自然堆積と思われる。

遺物 土器片が少量出土している。



第35図 34号土壤

土壤説明

番号	土層名	混入物	備考
1	茶褐色土		やわらかい
2	褐色土	ローム	
3	暗褐色土	ローム粒、炭化物	かたい
4	暗褐色土		やわらかい

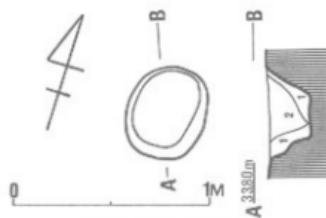
35号土壤

位置 D-11区

形態 50×40cmの楕円形で深さは20cmある。

覆土 2層に分けられ自然堆積と思われる。1層はロームを混入し、かたくしまった黄褐色土で壁際に堆積している。2層は暗褐色土でローム粒子を含んでいる。

遺物 土器片がわずかに出土しただけである。



第36図 35号土壤

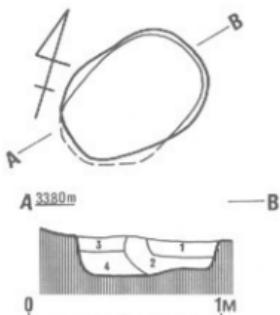
36号土壤

位置 D-12区

形態 80×60cmの楕円形で深さは20cmある。壁はほぼ垂直に立ち上がるが、部分的に外側にふくらむ。

覆土 4層に分けられる。

遺物 認められなかった。



第37図 36号土壤

土層説明

番号	土層名	混入物	備考
1	暗褐色土		やわらかい
2	暗褐色土	ロームブロック	
3	褐色土	ローム粒少	
4	褐色土		かたい

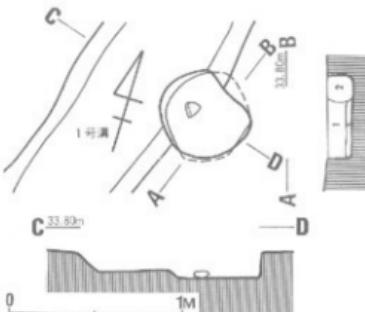
37号土壤

位置 C・D-13区 1号溝に切られる。

形態 50×45cmの不整円形で深さは15cmある。壁はほぼ垂直で部分的に袋状を呈する。

覆土 3層に分けられ人為的な堆積と思われる。

遺物 脊部の少破片が1点出土しただけであるが、底面に自然石が置かれていた。



第38図 37号土壤

上層説明

番号	土層名	混入物	備考
1	褐色土	ローム粒	やわらかい
2	暗褐色土	炭化物	
3	暗褐色土	黄色粘土	粘性

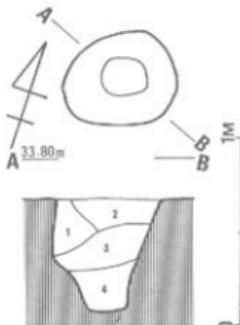
38号土壤

位置 C-13区

形態 60×50cmの楕円形で深さは60cmある。

覆土 4層に分けられる。

遺物 土器が数片出土しただけである。



土層説明

第39図 38号土壤

番号	土層名	混入物	備考
1	褐色土	ローム粒多, 炭化物	
2	暗褐色土	ローム粒多	やわらかい
3	暗褐色土	ローム粒少	やわらかい
4	暗褐色土	ロームブロック, 粘土	やわらかい

39号土壤

位置 C-12区

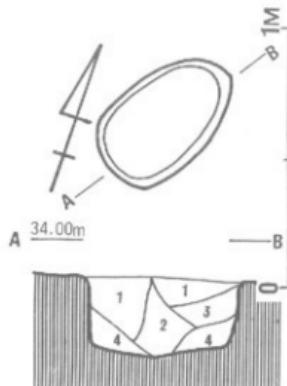
形態 65×35cmの楕円形で深さは30cmある。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

覆土 4層に分けられる。

遺物 認められなかった。

土層説明

番号	土層名	混入物	備考
1	褐色土		やわらかい
2	褐色土		かたい
3	褐色土		
4	黄褐色土	黄色粘土	



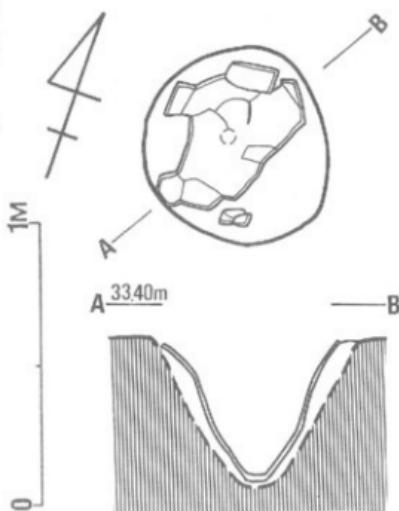
第40図 39号土壤

1号埋甕 (第62図1)

位置 D-7区

形態 径70cmの不整円形で深さは55cmある。土器よりもやや広いくらいに掘り込まれ底面は狭くなっている。

遺物 正位の状態で埋設されていた。土器内から骨粉が認められた。



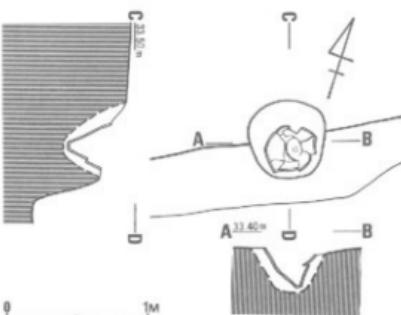
第41図 1号埋甕

2号埋甕（第80図4）

位置 C-6区 1号方形周溝墓に切られる。

形態 60×55cmの不整円形で深さは45cmある。土器よりも約10cm広く掘られている。

遺物 正位の状態で埋設されていた。1号方形周溝墓の壁際にかかっているため、胴中位から口縁部にかけての2分の1が切られている。土器内から骨粉が認められた。



第42図 2号埋甕

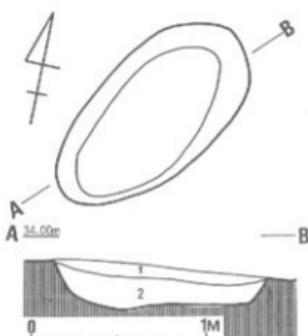
1号焼土ピット

位置 C-12区

形態 135×70cmの椭円形で深さは25cmある。

覆土 2層に分けられる。1層は焼上で、ロームが焼けたものでガリガリしている。厚さは10cmある。2層は粘性のなくなったローム層でサラサラしている。ピットは掘り込まれたものではなく、表面で焼かれたものと思われる。

遺物 地山であるので認められない。時期は不明である。



第43図 1号焼土ピット

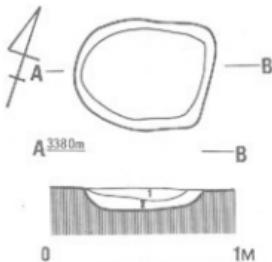
2号焼土ピット

位置 C-6区

形態 80×65cmの楕円形で深さは15cmある。

覆土 2層に分けられる。1層が焼土で褐色土が混入している。厚さは約5cmある。2層は暗褐色土で焼土とローム粒子が少量混入しかたい。

遺物 土器片が少量出土している。



第44図 2号焼土ピット

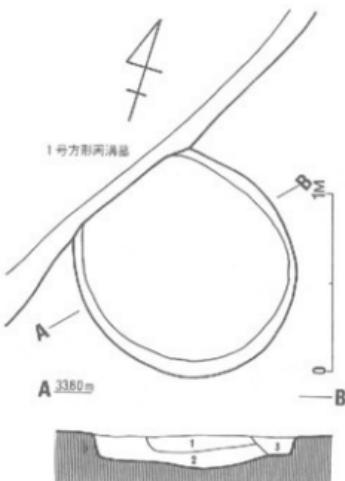
3号焼土ピット

位置 D-6区 1号方形周溝墓に切られる。

形態 径120cmの不整円形で深さは20cmある。

覆土 3層に分けられる。1層が焼土でピットの中央部にある。褐色土と骨粉を混入し、厚さは10cmある。2層は暗褐色土で焼土とローム粒子を少量混入しかたい。3層は攪乱である。

遺物 土器片の他、すり石が1点出土している。



第45図 3号焼土ピット

土壌一覧表

(単位はcm, 土器の数は復原上器あるいは大型破片の個体数)

番号	規 模	深さ	平面形	壁	底 面	土 層	遺 物	備 考
1	300×260	90	不整円形 一部袋状	平	坦	人為的	土器4, すり石2 石皿4, 十型刀1 十型刀1	骨粉
2	径150	45	不整円形 袋 状	平	坦	人為的	土器1, すり石1 土製品1	骨粉, 炭化物, 白色石
3	径70	60	円 形 單 直	やや丸み	人為的		すり石1 土製品1	骨粉, 炭化物, 焼土, 灰, 自然石
4	120×110	10	不整円形					
5	100×80	20	楕 圓 形					
6	235×210	10	楕 圓 形		ピットあり	自然堆積		
7	75×60	50	楕 圓 形		ピットあり	人為的		
8	120	10	楕 圓 形					
9	105×85	55	楕 圓 形	垂 直	丸 み	人為的		
10	200×170	25	楕 圓 形			自然堆積		
11	径140	20	(楕)円形			自然堆積		
12	径110	40	円 形	垂 直	平	坦	人為的	
13	135×125	80	不整円形 袋 状	平	坦	自然堆積か	土器3, 土製円盤1	骨粉, 炭化物
14	径130	35	円 形					
15	不 明	25	不 明					
16	200×180	20	楕 圓 形					骨粉
17	径150	35	不整円形		ピット2	自然堆積		
18	70×55	85	楕 圓 形			自然堆積		炭化物
19	270×230	30	楕 圓 形		ピット			焼土
20	径200	20	不整円形			自然堆積		
21	径170	30	不整円形			自然堆積	土製円盤1	
22	125×115	50	不整円形 袋 状	やや丸み	人為的		土器1, すり石1	骨粉, 炭化物
23	90×70	40	楕 圓 形	ピット				骨粉, 炭化物
24	95×70	40	楕 圓 形					
25	125×115	50	不整円形 垂 直	丸 み	人為的		なし	
26	径60	20	円 形				なし	
27	径90	135	不整円形	垂 直	人為的		土器1, 凹石1	骨粉, 炭化物, 焼土
28	120×85	35	楕 圓 形			自然堆積	なし	
29	径80	25	円 形			不明	なし	
30	120×80	10	楕 圓 形					
31	径80	40	円 形	垂 直	人為的		土器1	
32	径125	75	円 形 一部袋状	平	坦	人為的	すり石1	骨粉, 炭化物
33	70×65	10	不整円形					炭化物
34	80×70	20	楕 圓 形	垂 直	平	自然堆積		炭化物
35	50×40	20	楕 圓 形			自然堆積		
36	80×60	20	楕 圓 形 一部袋状				なし	
37	50×45	15	不整円形 垂 直			人為的		自然石
38	60×50	60	楕 圓 形	一部袋状				炭化物
39	65×35	30	楕 圓 形	垂 直			なし	

第2節 弥生時代の遺構

1号住居跡

位置 E・F-9区一部E・F-8・10区にかかる。主軸方位はN-42°Wである。

形態 540×440cmの隅丸方形を呈し、深さは西側で20cm、東側で10cmを測る。東辺がやや狭い。深さは浅いが、壁の立ち上がりはしっかりしており、床面も堅牢である。周溝は認められなかった。

柱穴 ピットは全部で41基検出した。すべて住居址内である。ピット1は南壁に接し、85×45cmの方形で床面からの深さは15cmある。床面からなだらかに落ち込み床面と同様に堅いので柱穴とは考えられない。あるいは出入口に関係するものかもしれない。ピット2・3・4・6・9の5個は深さが50~75cmあり主柱穴と考えられる。ピット3・4・6・9の4個は2m間隔で正方形に並び、ピット2は南壁寄りの中央に位置し、住居址の外側に向って斜めに掘られている。ピット2・3・4・9には段が認められる。主柱穴ピット4・6・9の外側に接近して支柱穴と考えられるものがある。ピット4にはピット5、ピット6にはピット7・8の2個、ピット9にはピット10がそれぞれ支柱穴と考えられ、深さは15~25cmある。ピット3には支柱穴は検出できなかった。ピット11~20の10基は深さが10~20cmあり、住居址の四隅と四辺の壁際を回っている。いわば壁柱穴ではないかと思われる。ピット21~24の4基は深さが5~10cmと浅く性格は不明である。ピット25~41の17基は住居址の北側中央部に集中している。径約20cmで深さが10~15cmあり、ピット内は床面と同様に堅い。4個ずつ、ずれながら4列にほぼ等間隔に並んでいるような規則性もあるようと思われるがはっきりしない。このピット群の性格は不明である。

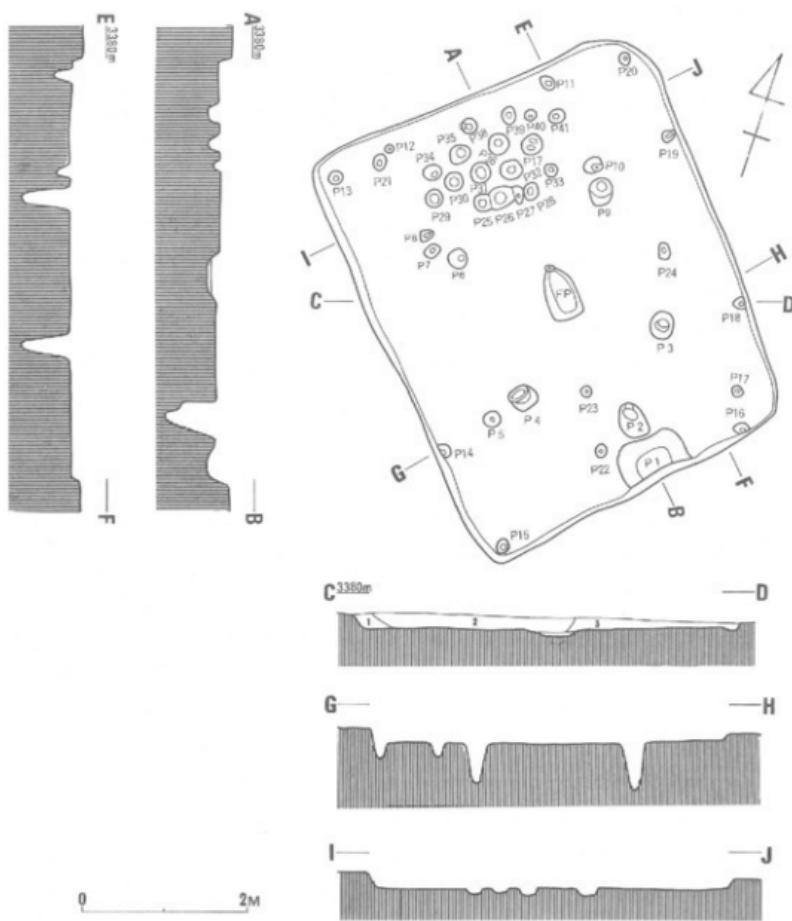
炉址 住居址の中心部に位置し、70×40cmの楕円形で、焼上上面までの深さは5cmある。焼土は55×20cmの範囲で厚さは5cmある。炉址の一端に10×5cm・深5cmの小ピットがある。

覆土 3層に分けられ自然堆積である。3層とも黒褐色土である。

遺物 弥生式土器の口縁部・胴部片や木葉痕のある底部が数点出土している。他に打製石斧・磨製石斧・すり石・土製円盤が1点ずつ、石皿の破片が2個体出土している。また、覆土内からは縄文式土器も多量に出土した。

土層説明

番号	土層名	混入物	備考
1	黒褐色土	ローム粒少、ローム塊	かたい、粘性
2	黒褐色土	ローム粒少	やわらかい
3	黒褐色土	ローム粒多	非常にかたい



第46図 1号住居址

第3節 古墳時代の遺構

1号方形周溝墓

位置 C・D-6~9区 東側周溝の一部を1号墳に切られる。26・29~31号上塙、2号埋甕、3号焼上ピットを切っている。主軸方位はN-27°Wである。

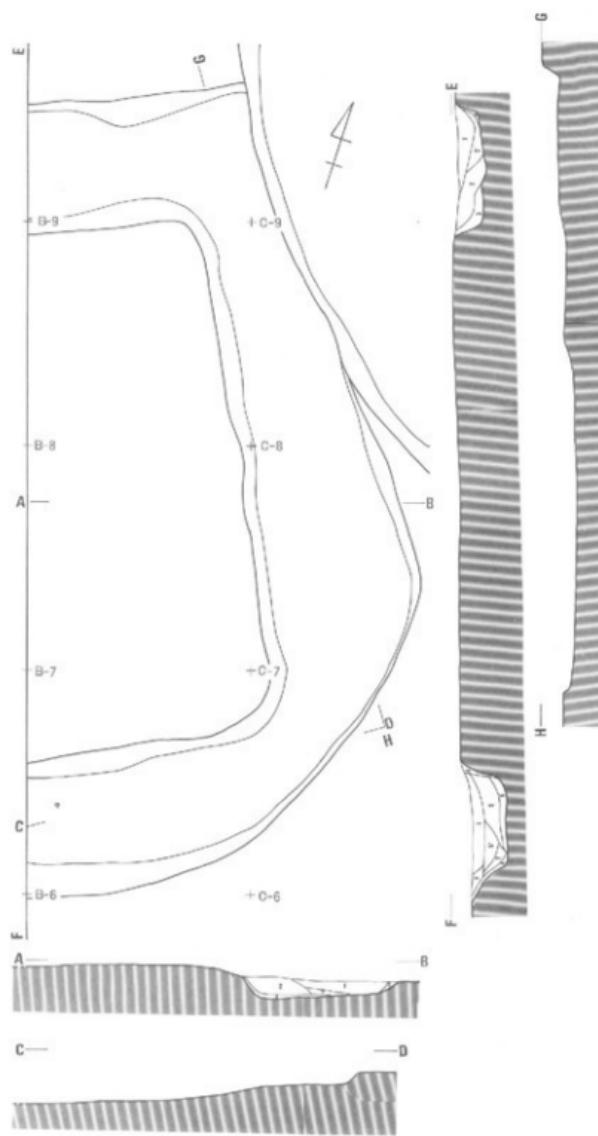
形態 東側のほぼ2分の1を検出した。1辺11.5m、溝の幅を入れて1辺約17mを測り、方形を呈する。周溝の内側の壁はきれいに方形を呈するが、外側の壁は東南隅部で丸くなる。溝の幅は東側が3m、北側が2.9m、南側が3.25mあるが、東南隅部では2mと狭くなる。溝の深さは、東側が50cm、北側が75cm、南側が1m、東南隅部で25cmある。南・北の溝は隅部から除々に深くなるが、東側の溝は隅部よりやや深くなる程度で全体に浅い。周溝の内側のレベルは周溝の外側よりも25cmほど高くなっている、マウンドがあったように思われる。埋葬施設は検出できなかった。

覆土 7層に分けられ、自然堆積である。内側から流れ込んだ状態が認められる。

遺物 土師器の器台形土器（第92図2）が完形で、南側の溝の下層（5層）から正位よりやや傾いた状態で出土している。他に、覆土内には縄文式土器の破片が多量に混入していた。

上層説明

番号	土層名	混入物	備考
1	黒褐色土	ローム粒少	
1'	黒褐色土	ローム粒少	やわらかい
2	暗褐色土	ローム粒多	
2'	暗褐色土	ローム粒多	粒子が細かい
3	褐色土	ローム・粘土	
4	褐色土		地山Ⅲ層くずれ
5	暗褐色土	ローム粒少	
5'	暗褐色土	ローム粒少	やわらかい
6	暗褐色土		かたい、粘性
7	黒褐色土	ローム粒微	やわらかい



第47図 1号方形周溝墓(グリット間5m)

2号方形周溝墓

位置 C-10-13区 一部D-11・12区にかかる。1・2号溝に切られ、6・9-12・14・15・21・22・25・27・28・32号土塙を切っている。主軸方位はN-29°Wである。

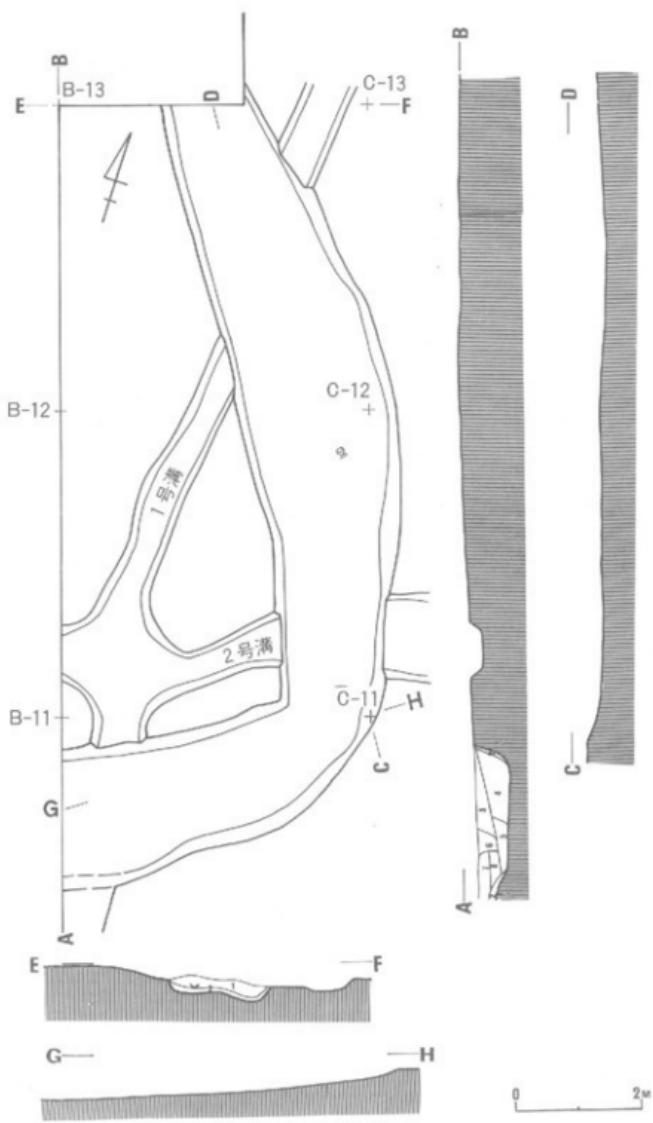
形態 東側の周溝と南側の周溝の一部を検出した。1辺約10cm、溝の幅を入れて、推定約14mを測り、方形を呈する。周溝の内側の壁はきれいに方形を呈するが、外側の壁は東南隅部では角でなく丸くなり、溝の中央部でふくれて、全体に丸みを帯びる。したがって溝の幅は、中央部では、東側が2.5m・南側が2.25mあるが、東南隅部では1.5mと狭くなる。溝の深さは、東側が25cm、南側が50cmある。1号方形周溝墓と同じように、南側の溝は隅部から徐々に深くなるが、東側の溝は隅部とほとんど変らず全体的に浅い。また、周溝の内側のレベルは外側よりも約25cm高く、マウンドがあったように思われる。埋葬施設は検出できなかつた。

覆土 8層に分けられるが、1～5層までが本遺構の覆土である。自然堆積で内側からの流れ込みが認められる。2層は1号方形周溝の3層に、本遺構の3層は1号方形周溝の1層に似ている。6層は新しい時期のピットかあるいは擾乱と思われる。7・8層は1号溝の覆土である。

遺物 底部を穿孔された土師器の壺形土器（第92図1）が完形で、東側の溝の中央部から横になつて出土した。他に、覆土内には縄文式土器の破片が多量に混入していた。

土層説明

番号	土層名	混入物	備考
1	黒褐色土	ローム粒少	かたい
2	褐色土	ローム・粘土	1号の3に似る
3	黒褐色土	ローム粒少	やわらかい、1号の1'に似る
4	黒褐色土	ローム粒多	
5	黒褐色土	ローム粒少、粘土	かたい
6	黒色土		非常にやわらかい、新しいピットか擾乱
7	褐色土	ローム塊	やわらかい、1号溝の覆土
8	暗褐色土		



第48図 2号方形周溝墓

1号墳

位置 D-7~11区に西側の周溝、G・H-9区のトレンチで東側の周溝の一部を検出した。1号方形周溝墓と16・26・29・31号土壙を切っている。また、本遺構は、1号住居址を開むようになされている。

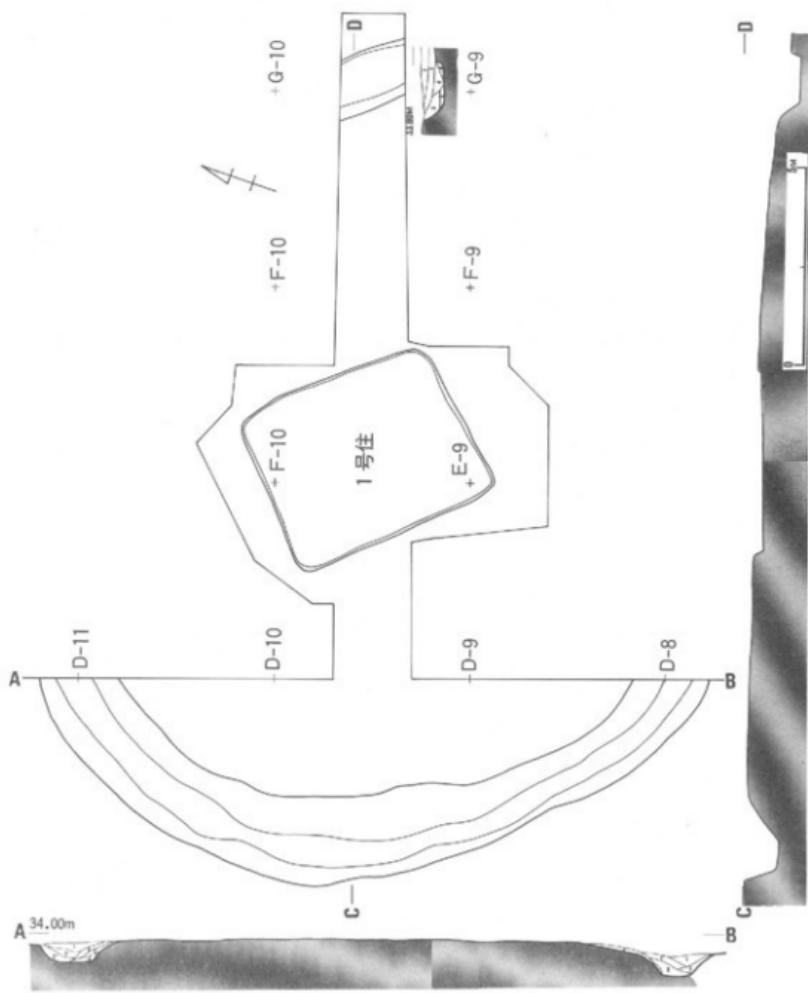
形態 内径約17.5m、外径約21mを測りほぼ円形を呈する。溝の幅は1.5~2mあり底面の幅は50~75cmと狭い。東側の溝の底面の幅は1.2mある。深さは50~80cmある。溝の外側の壁は急に立ち上がるが、内側の壁は丸みを帯びてなだらかに立ち上がる。底面は平坦である。マウンドは消失しているが、周溝の内側のレベルは外側よりも約25cm高くなっている。マウンドの面影が残っている。主体部は検出できなかった。おそらく、マウンドといっしょに消失したものと思われる。

覆土 7層に分けられ、自然堆積である。マウンドから流れ込んだ状態が認められる。西側と東側の周溝では土質が異なり、西側では1~4層、東側では4~7層に区別できる。8・9層は覆土ではない。

遺物 西側の周溝の覆土上層から土師器の楕円土器（第92図3）、下層から刀子（第92図7）が出土している。他に縄文式土器の破片が多量に混入していた。また、周溝内やマウンド上面から、1号住居址からの流れ込みと思われる弥生式土器が数片出土している。

土層説明

番号	土層名	混入物	備考
1	黒褐色土		やわらかい
1'	黒褐色土	ローム粒微	
2	暗褐色土	ローム粒少	
2'	暗褐色土	ローム粒多	かたい
2''	暗褐色土	ローム粒多	
3	褐色土		地山Ⅲ層くずれ
4	白色粘土	褐色土	
5	黒褐色土	ローム	
6	暗褐色土	粘土	かたい
7	暗褐色土	粘土多	
8	暗褐色土	ローム・粘土少	かたい
9	暗褐色土		やわらかい、サラサラしている。



第49図 1号墳

第4節 歴史時代の遺構

1・2号溝

位置 C・D-10~13区 2号方形周溝墓, 8~10・22~25・27・37号土壙を切っている。

形態 1号溝は、主軸方位N-7°-Eで南北方向にはば直線的に延びている。2号溝は主軸方位N-70°-Eではば東西方向に直線的に延びている。両溝は、C-11区の西南隅で交差しているが、重複関係は認められなかった。溝の長さは調査区外に続いているので把握できないが、調査区内だけでは1号溝が20m、2号溝が10mを測る。溝の幅は1号溝が約80cmで平均しているが、2号溝は60~120cmと細くなったり太くなったりしている。深さは両溝とも15cmと浅い。ただ、1号溝は、調査区西壁の断面を見ると、南へ行くにつれて深くなるように思われる。

覆土 1層で、ロームブロックが混入したやわらかい褐色土である。縄文時代や古墳時代の遺構の覆土と比較すると、新しい時期の土であると思われる。

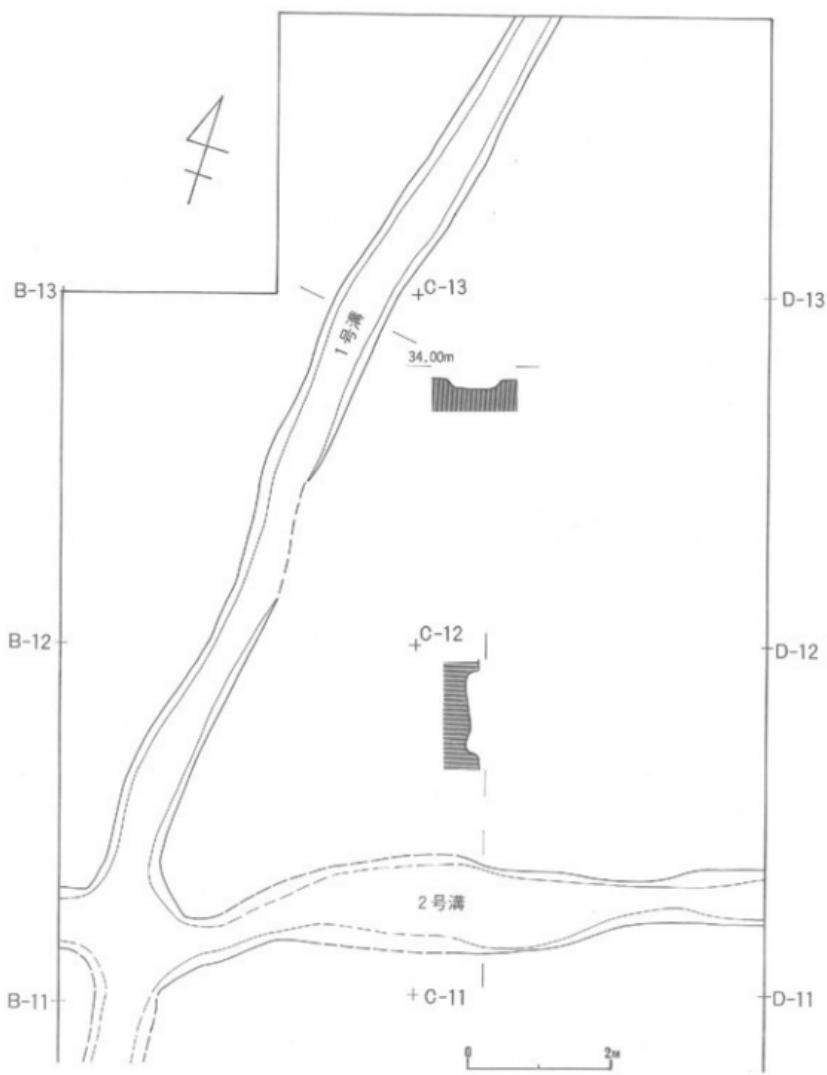
遺物 1・2号溝の交差部分から内耳土器が出土している。他に、縄文式土器の破片も混入していた。

時期 出土した内耳土器及び覆土の状態から中世以降の所産と考えられる。

B-14 +

+ C-14

+ D-14



第50図 1・2号溝

第6章 遺物

第1節 縄文時代の遺物

1. 縄文式土器

本節では、貯持遺跡出土の縄文土器について記述する。本遺跡の縄文土器は多彩である。主に中期前半から後期前半にかけての資料が多数を占める。資料の大半が破片の状態にあり、完形品は少ないために土器の文様を中心に分類を進め、時期別して若干の解説を加えることとする。

分類

縄文土器の分類にあたっては、文様を主とし、中期前葉（I群）、中期中葉（II群）、中期後葉（III群）、中期末葉（IV群）、後期前葉（V群）、後期中葉以降（VI群）、その他（VII群）に分類した。型式区分、時期区分のしくい無文土器、縄文、条線文などを主な文様とする土器群については一括して、その他（VII群）にふくめて記述した。

I群（中期前葉 第51図1～第51図27）

阿玉台式土器に対比しうるものが大半であり、隆線区画と角押文、結節沈線文、有節線文、沈線文などが見られる。第51図9の三角形状の刺突文はやや異質である。隆線上に縄文を施す第51図24、25は阿玉台式でも新しい部分である。第51図26は縄文地上に波状沈線文が付されており、阿玉台式には含まれない。II群へ下る可能性もある。

II群（中期中葉 第51図28～第53図5、第55図14～18）

a類（第51図28～第52図6）

本類は、量的に少ないが中峰式土器に対比しうる土器群である。第51図28の隆帶上のキザミの（前1）多用、第51図29、30、第52図2、3、4などの連続コの字文の盛行、第52図1、5に見られる太い隆線を一本の沈線を引いて二本にみせる手法などにその特色をみることができる。第51図29の口唇部が尖る例は異質である。第52図4は沈線が多数加えられている類例の少ない土器である。

b類（第52図7～第53図5、第55図14～18）

本類は大半が加曾利E式の前半に属すると考えられる。脣下半に磨消縄文帯を有さぬ一群と思われる。縄文地に隆線を貼付して文様帯を区画するものが多いが、無文地の例や沈線地文の資料もある。隆線の縁は調整される。第55図14～18などもこの群の胴部破片と考えられる。

III群（中期後葉 第53図6～第60図1～6、8～9、12、15、第61図2～8、10）

本群は、隆線および太日の沈線により口縁部文様帯を構成する一群である。渦巻と梢円形による区画構成から、口縁部文様帯がくずれて一条の隆線、沈線によるものへと移りかわる。第59図1の刺突文例も退化の一例といえよう。なお、本群には第54図18のように隆線区画が胴部にまで

及ぶものも含めている。本来ならば大木系列の土器群として区別すべきものである。本群の脣部は、直線的な幅広の磨消帯を有する土器群から、曲線的な磨消帯を構成する土器群へと変化し（註2）う。描線の太いから細いへの移行も一般論としては指摘できよう。第61図2～7の口縁部に刺突文、沈線文を持ち、以下に撫糸文を施す土器群は、所謂連弧文系列のものと判断されるが、第61図5は、磨消撫糸文を特徴の一つとする大木10式との関連が考えられるかもしれない。小破片のため確実ではない。今後の検討課題の一つである。

IV群（中期末葉 第60図7, 10, 11, 13～19, 第61図1, 9, 11～第70図10）

本群は、所謂微隆線文を文様の主体とする土器群を一括した。微隆起と繩文のみによる構成のものが大半であるが、細い沈線による区画を施し、磨消帯を有する例もいくつかみられる。第61図1は大胆な横位の区画に注意される。他に第61図11、第18図11のように細い磨消帯をもつ例は微隆起線文のみの例と構図は類似する。微隆線に沿って刺突文が施される資料も少数存在する。第62図2、第64図3、第68図9, 10, 11、第70図1などである。微隆線のみによる構成も稀に存在する。なお、今回は図示しなかったが、微隆起線文に沿って細い沈線が付される例が検出されている。両者の同時併存を確実なものとする貴重な例といえよう。

V群（後期前葉 第70図11～第72図1, 5, 第73図1～第75図2～第78図7）

a類（第70図11～第72図1, 5）

本類は、曲線的磨消繩文を特色とする称名寺式土器に対比される。第71図6, 7, 9などの口唇部文様は注意される。第71図4, 7, 8など繩文帯上の刺突文は、次のb類との関連を示すものである。

b類（第73図1～第75図2）

本類は、沈線と刺突文による構成の土器群であり、称名寺式土器に相当する。第74図8のしの字状の貼付文は注意すべきものである。

c類（第75図3～7, 11）

本類は、沈線文を主とする土器群で、格子目状を呈する。第75図3の押圧痕をもつ隆線はe類の隆帶文土器群の関係を示すと考えられる。

d類（第75図8～10, 12～第76図1～8, 11）

櫛齒状施文具による条線文、刺突文を主とする土器群を一括する。条線文のみの例が多いが、第75図15, 16, 17の例は沈線の区画の内外に施文されている。江戸川台第I遺跡の資料に近似するものなのかもしれない。第76図4は繩文地上に曲線的条線文が付されている。第75図8は施文法などからIV群に入るかもしれない。

e類（第76図9, 10, 12～第77図5）

隆帶を特色とする一群をまとめた。隆帶のみのもの、条線文、繩文、沈線文を複合させる例が

あり、隆带上は押圧、キザミ、刺突を有する例と持たない例が存する。

f類（第77図6～9）

沈線、沈線文を特色とする一群で、後期前葉と考えられるものをまとめた。

g類（第77図10～第78図7）

縄文、沈線、貼付文を特色とするもので、いわき市綱取貝塚出土器の一部に対比しうるもの。
(註4)

磨消縄文の例と縄文地沈線文の例は、若干の時間差を有しよう。

V群（後期中葉以降 第78図9, 14, 17）

磨消縄文を特色とする資料で、9, 14, 17は、加曾利B式土器と考えられるが、12, 13は、不明である。晚期前半かと疑っている。

VII群（その他 第72図2, 3, 4, 6～18～第78図15, 16, 18～23～第83図10）

本群には、分類の不手際から各類のものが含まれることになってしまった。寛容を願う。

a類（第72図2～4, 6～18）

中期後葉から後期前葉にかけての刺突文を主な文様とするものをまとめた。第72図2, 3, 4, 6～10, 14は中期後葉、11は中期末葉、12～13, 16～17などは後期前葉と考えられるが不確実である。15は不明、18は台付土器、ないしは台形土器と思われる。
(註5)

b類（第78図15, 16, 18～23, 第82図1, 第83図1）

無文を特色とする一群で、若干の沈線や隆線をもつものも含めた。第78図15, 16, 18～23は、深鉢の口縁部と思われるもの、中期末葉～後期前葉に属しよう。第82図1の浅鉢は整形痕が明瞭に残り、阿下台式土器と思われる。他は中期中葉～後葉にかけての浅鉢が大半である。波状線の資料、内面の綾の存在など細別の可能性を示しているが、今後の課題としておく。第83図1は中期末葉に所属しよう。

c類（第79図～第81図）

縄文のみを施文する土器群をまとめた。口縁部に無文帯を残すものと口縁直下より施文するものに大別しうるが、これによる細別はできない。無文帯を有する例の大半は中期末葉に属すると思われる。口唇部が外傾する土器群（第79図25, 28など）は後期前葉かもしれない。第80図3の橋状把手の例は中期末葉、同図4の完形品も一本の沈線による区画を有するが中期末葉と判定しうる。第80図9のタテの絞路文をもつ資料は、中期中葉までさかのぼろう。第80図11は折り返し口縁の例で特異なものである。第81図3の資料は有段の存在から後期中葉以降の可能性がある。

d類（第83図3）

本種はこの一片のみであるが、本遺跡最古の土器で、草創期初頭の燃糸文系土器群の井草式土器である。口唇部は羽状を呈し、以下横走、縦走の縄文を施している。井草式でも古い部分に相当する。千葉県西之城貝塚に類例がある。
(註6)

e 類（第83図4～10）

底部を一括した。網代痕の例と、木葉痕の例がある。

まとめ

本遺跡の縄文土器は、草創期から晩期（？）におよんでいる。主体は中期～後期前半であり、特に、中期木葉～後期前葉に特色がある。本遺跡の調査は今後に継続される予定であり、今後の資料の増加と検討に期待が寄せられる。

註1 下総考古学研究会「中津式土器の研究」『下総考古学』6 昭和51年

註2 小稿でいう「磨消帶」は、磨り消し、充満両者をふくめている。

註3 川根正教『江戸川台第I遺跡』日本住宅公團東京支社 昭和56年

註4 馬目順・『小名浜』いわき市教育委員会磐城出張所 昭和43年

註5 室状織「台形土器について」『丘陵』1～2 昭和51年

註6 西村正衛「千葉県香取郡神崎町西之城遺跡－第二次調査概報－」『古代』第45、46合併号 昭和40年

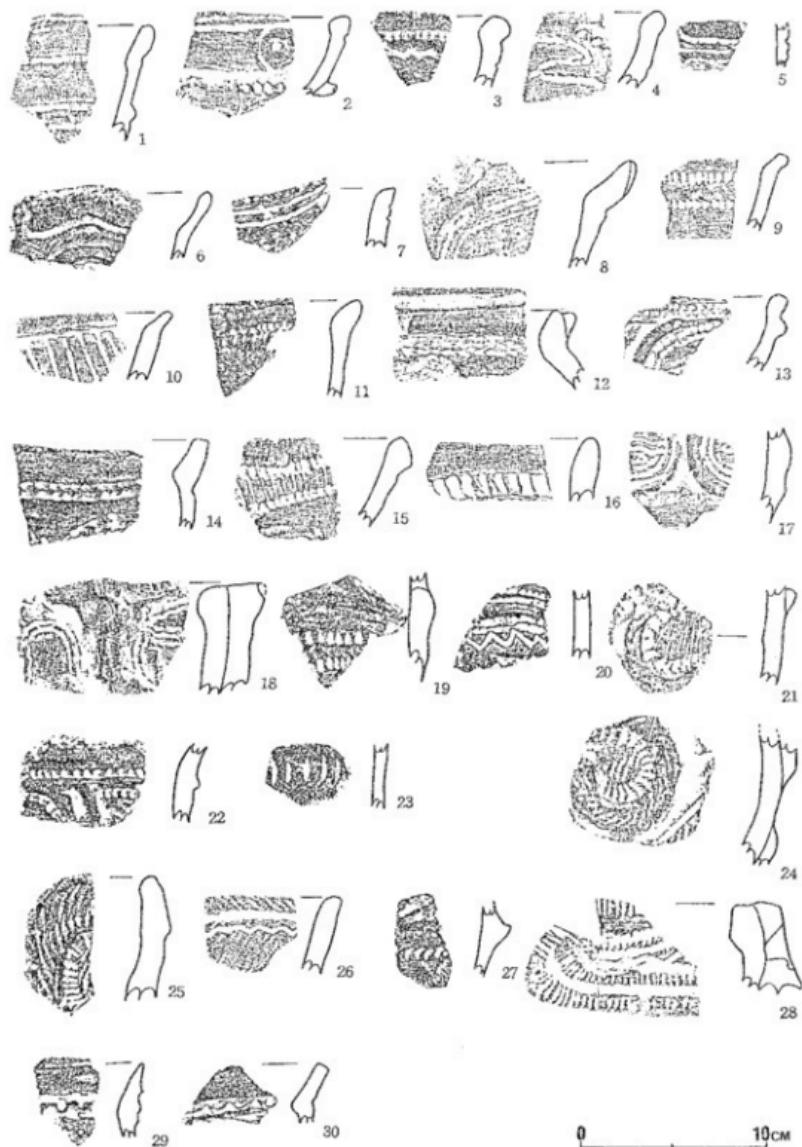
上記文献第9図の例は口縁直下が横走縦文ではなく、縱羽状の構成をとっている。

縄文式土器出土場所一覧表

第51図 1		18	B-3Ⅲ上	5	D-3Ⅲ	4	C-1	21	B-4Ⅱ	第54図 1	B-3Ⅱ
2	D-2Ⅲ	19	D1上	6	D32	5	C-1Ⅱ				
3	D12	20	D27	7	B-3Ⅲ	6	C-6Ⅱ	2	B-3Ⅱ		
4	D-3Ⅲ	21	D-1Ⅲ	8	D2	7	H2	3	D7		
5	D2	22	D3	9	D1中	8	B-3Ⅱ	4	B-2Ⅱ		
6	D32	23	D2	10	D21	9	B-4Ⅱ	5	B-2Ⅱ		
7	F3	24	D-3Ⅲ	11	C-4Ⅱ	10	B-4Ⅱ	6	C-11Ⅱ		
8	D-1Ⅲ	25	D32	12	H1	11	B3Ⅱ	7	C-6Ⅱ		
9	H1	26	H2	13	1住	12	B-3Ⅱ	8	B2Ⅱ		
10	H1	27	D3	14	C-5Ⅱ	13	D1上	9	C-8Ⅱ		
11	D3	28	B-3Ⅲ上	15	D27	14	B-3Ⅱ	10	D1		
12	D-2Ⅲ	29	D16	16	D-1Ⅲ	15	F3	11	B-3Ⅱ		
13	D-2Ⅲ	30	D13上	17	D1下	16	D2	12	B-3		
14	D16	第52図 1	D-2Ⅲ	18	B-2Ⅱ	17	D22	13	D2		
15	D-2Ⅲ		C-5Ⅱ	第53図 1	D-1Ⅲ	18	D23	14	B-3Ⅱ		
16	D-2Ⅲ	3	D-1Ⅲ		D1中	19	B-2Ⅱ	15	B-1Ⅱ		
17	D-3Ⅲ	4	D1中	3	D20	20	B-3Ⅱ	16	B-2Ⅱ		

17	C-2II	3	C-3II	10	D34	6	C-7II	15	D27
18	B-3III上	4	C-3II	11	C-5II	7	B-2II	16	B-1II
19	B-4II	5	D3	12	B-3II	8	B-2II	17	D13上
第55图 1	B3II	6	D1	13	F3	9	H2	18	D13中
	B-3II	7	B-3III上	14	F2	10	B-3II	19	B-1II
	B-3II	8	F3	15	D-3III	11	B-1II	20	H2
	D13中	9	B-3II	16	F3	12	1住	21	D27
	D13上	第56图 1	B-1II	17	D27	13	1住	22	B-1II
	C-1II	2	B-3II	18	D13	第65图 1	1住	23	B-1II
	B-4II	3	B-1II	19	D1上		2住	24	B-1II
	B-2II	4	B-3II	第61图 1	B-2II		3住	25	B-1II
	B-2II	5	D13上	2	D-1III		4住	第67图 1	D-2III
	D1下	6	B-2	3	D2		5住	2	D-3III
	D2	7	D1上	4	B-3III		6住	3	B-2II
	D1上	8	C-4II	5	D1II		7住	4	B-1II
	D1中	9	C-4II	6	D-3III		8住	5	R-1II
	D-2III	10	B-3II	7	D-3III		9住	6	B-1II
	1住	11	R-3II	8	B-3II		10住	7	B-1II
	D1上	12	B-3III	9	B-2II		11住	8	B-1II
	D27	13	C-7II	10	C-4II		12住	9	B-1II
	D9	14	B-3III上	11	H1		13住	10	B-1II
	B-1II	15	C-4II	12	B-1II		14住	11	B-3III
	D22	16	D10	13	D23		15住	12	D12
	H1	17	B-3III上	14	F2		16住	13	D22
第56图 1	B-1II	第59图 1	K1	15	D27	17	D1下	14	C-7II
	H2	2	H1	16	D3	18	D1下	15	D22
	B-2II	3	B-1II	17	B-4II	19	D1中	16	D27
	D1下	4	B-3II	18	D22	20	D1下	17	D12
	B-1II	5	B-2II	19	D21	21	D1上	18	D12
	D-3III	6	D6	20	B-2II	22	D13中	19	D12
	D1	7	B-2II	第62图 1	U1	23	D13上	20	1住
	D-2III	8	H1	2	D1	24	D13中	21	C-6III
	C-6II	9	B-2II	第63图 1	D2	25	D13上	22	C-3III
	D22	10	H2	2	D34	第66图 1	H1	第68图 1	B-1II
	B-3II	11	H2	3	D32		2住	2	B-2II
	C-4II	12	C-2II	4	D32		3住	3	D-1III
	D1上	13	B-2II	5	D1中		4住	4	D-1III
	D22	14	B-2II	6	F3		5住	5	D13上
	H2	第60图 1	B-2II	7	D27		6住	6	K1
	C-3III	2	H1	8	B-3II		7住	7	D1中
	B-3III上	3	D1中	9	B-1II		8住	8	D1下
	B-4II	4	C-4II	10	B-3II		9住	9	B-2II
	B-2II	5	B-2II	第64图 1	B-3II		10住	10	B-1II
	B-3II	6	D27	2	C-6II		11住	11	B-1II
	B-3II	7	D2	3	B-3II		12住	12	C-5II
	B-3II	8	B-2II	4	H1		13住	13	B-1II
	D-3III	9	H2	5	B-2II		14住	第69图 1	D1

2	HJ	6	H2	17	K1	第78図 1	D2	26	B-2II		
3	C-8II	7	D3	18	1住		2	D2	27	C-1II	
4	D1上	8	D34	19	D-1III		3	C-4III	28	B-4II	
5	D27	9	D13	20	K1		4	C-1II	29	D13上	
6	B-2	10	D1上	21	D2		5	1住	30	B-1II	
7	D3	11	D22	22	D12		6	1住	31	D1上	
8	D1上	12	D20	23	F2		7	H1	32	H1	
9	D27	13	F3	24	1住		8	D-3III	第80図 1	B-1II	
第70図 1		14	C-1II	25	D1中		9	B-2II	2	B-1II	
2	H2	15	1住	26	D1上		10	C-3II	3	D1	
3	D1上	16	K1	27	C-4II		11	H1	4	U2	
4	D1下	17	1住	28	D27		12	1住	5	C-6III	
5	D1下	18	1住	29	D8		13	D27	6	D13上	
6	C-7II	第73図 1		30	C-3II	第76図 1	C-4II	14	D13	7	1住
7	D1上	2	D13	2	D13		15	D1上	8	D-3III	
8	D1上	第74図 1		3	D13		16	B-3III上	9	C-10III	
9	B-1II	2	C-4II	4	D-1III		17	D-6III	10	D-2III	
10	B-2II	3	C-4II	5	C-8II		18	1住	第81図 1		D4
11	B-2II	4	C-4II	6	C-3III		19	D1中	D2		
12	D27	5	C-4II	7	D-1III		20	D2	B-1II		
13	D22	6	C-3II	8	C-4II		21	D2	B-3II		
14	D2	7	D32	9	H2		22	D3	H2		
15	H1	8	B-1II	10	1住	第79図 1	D1中	5	B-3II		
16	D-2III	9	D-1III	11	D-2III		2	D27	6	D13	
17	D32	10	B-2II	12	D22		3	D1上	7	H1	
18	B-2II	11	D22	13	D22		4	1住	1	D-1III	
19	1住	12	D22	14	D4		5	D1中	2	B-3III	
第71図 1		13	1住	15	1住		6	D1上	3	D-2III	
2	C-1III	14	1住	16	D-6III		7	D1上	4	D27	
3	B-1II	15	1住	17	H1		8	D22	5	B-1II	
4	H1	16	D22	18	K1		9	D1下	6	D1中	
5	D22	第75図 1		19	C-4II	第77図 1	D22	10	D2	7	C-3II
6	D-5III	2	C-5II	2	D22		11	B-1	8	D-1III	
7	D-3III	3	D-1II	3	D5		12	D20	9	D-3II	
8	D32	4	D-1III	4	H1		13	D22	10	B-4II	
9	D27	5	D-1III	5	H1		14	D13上	11	D20	
10	K1	6	K	6	D2		15	D16	12	B-2II	
11	D22	7	D-3III	7	C-2II		16	D1下	13	D1中	
12	C-4II	8	D22	8	H2		17	D1下	14	B-1II	
13	B-2II	9	D-2III	9	C-4II		18	D13上	15	B-2II	
14	C-4II	10	D-1III	10	C-3II		19	D3	16	D27	
15	H1	11	D-3III	11	D4		20	H2	17	C-8II	
第72図 1		12	D1上	12	C-3III		21	H2	18	B-2II	
2	B-1II	13	D32	13	D4		22	B-2II	19	C-7II	
3	D7	14	D32	14	D6		23	D1上	第82図 1		B-3III
4	C-3II	15	C-3II	15	D4		24	B-2II	2	B-1II	
5	D22	16	C-4II	16	1住		25	B-1II			



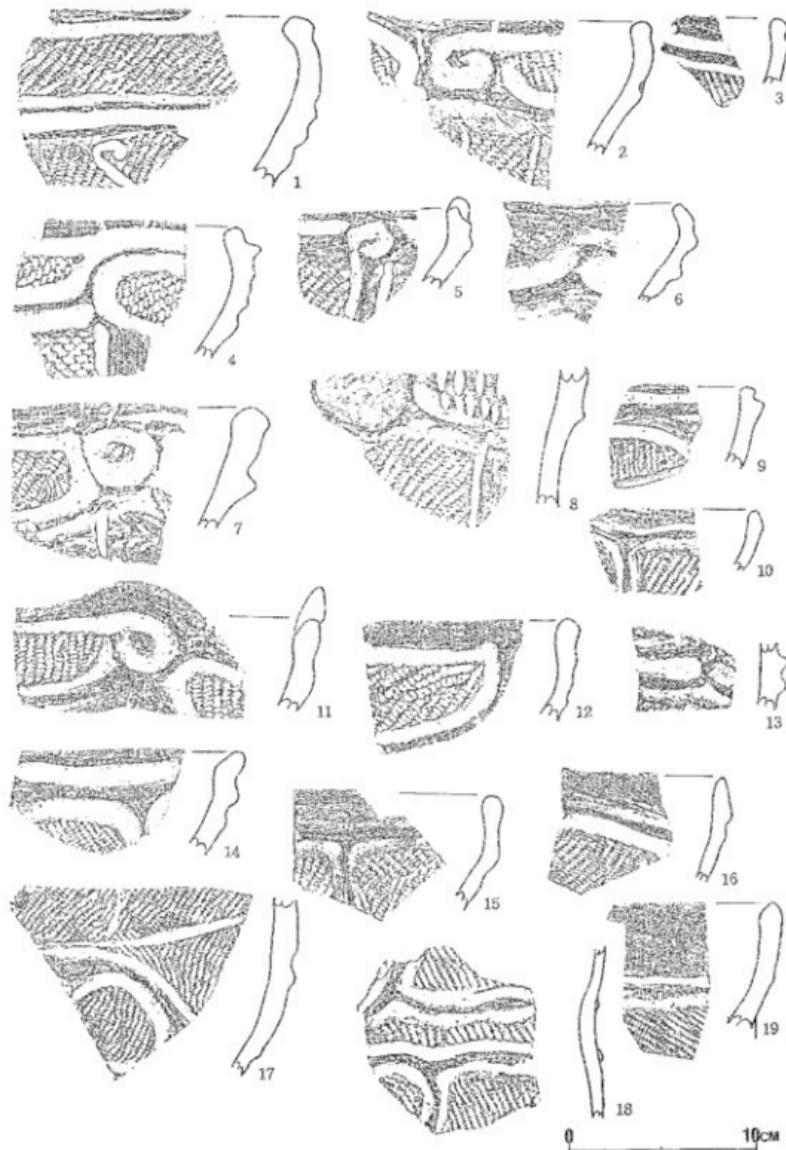
第51図 縄文式土器



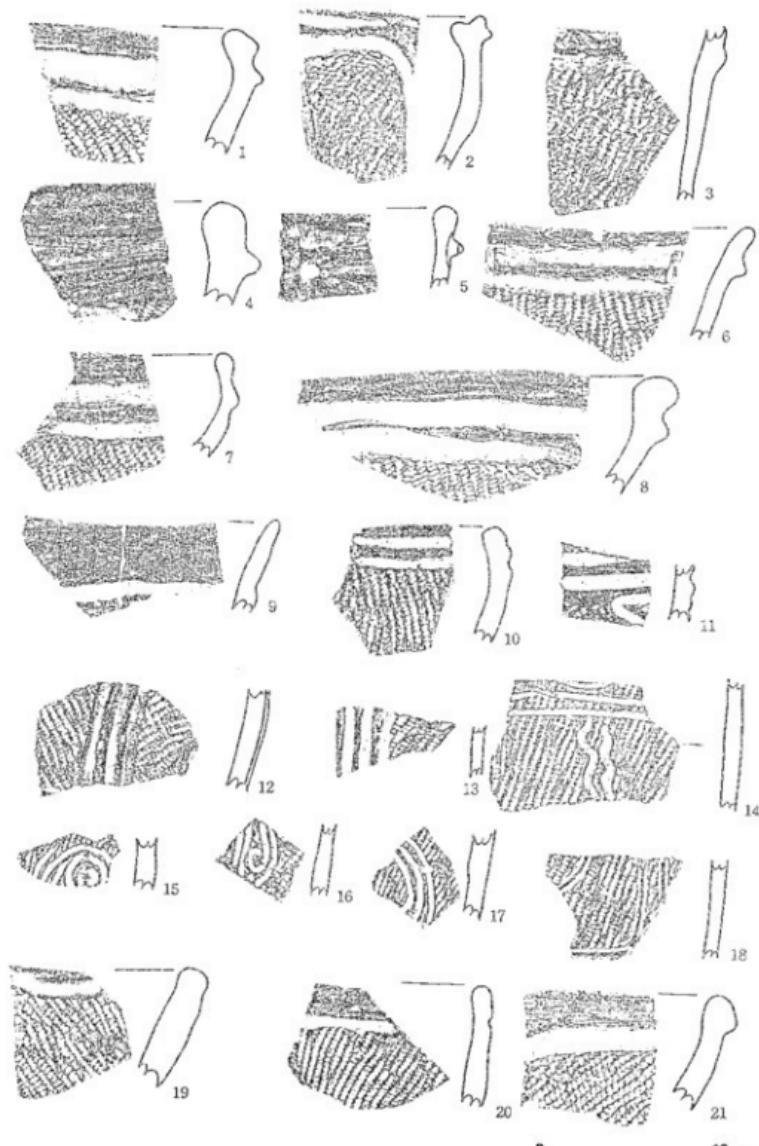
第52図 縄文式土器



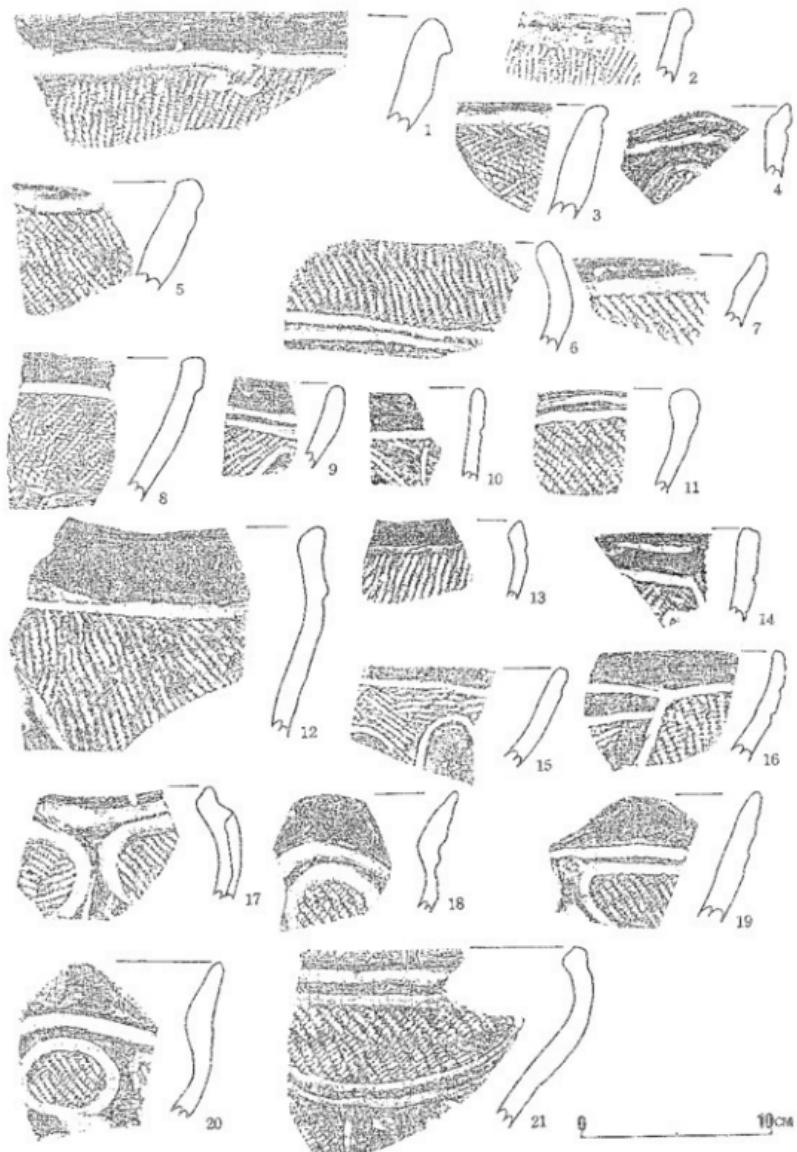
第53図 繩文式土器



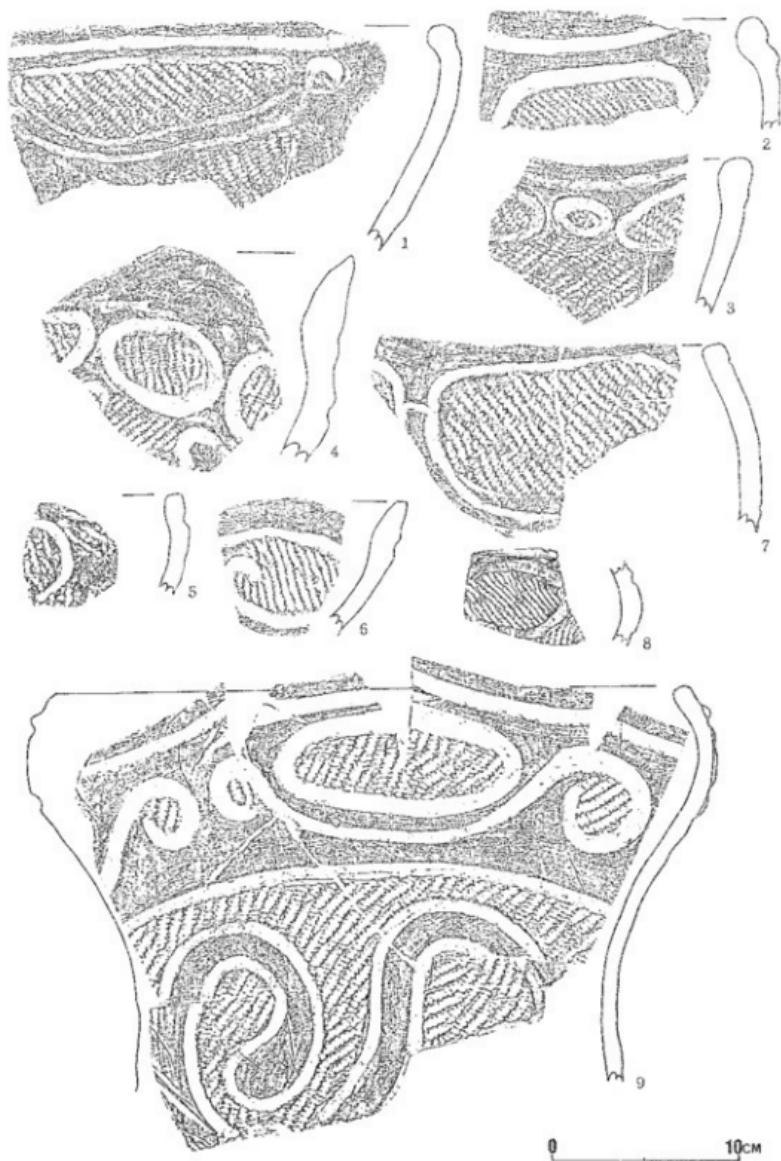
第54図 繩文式土器



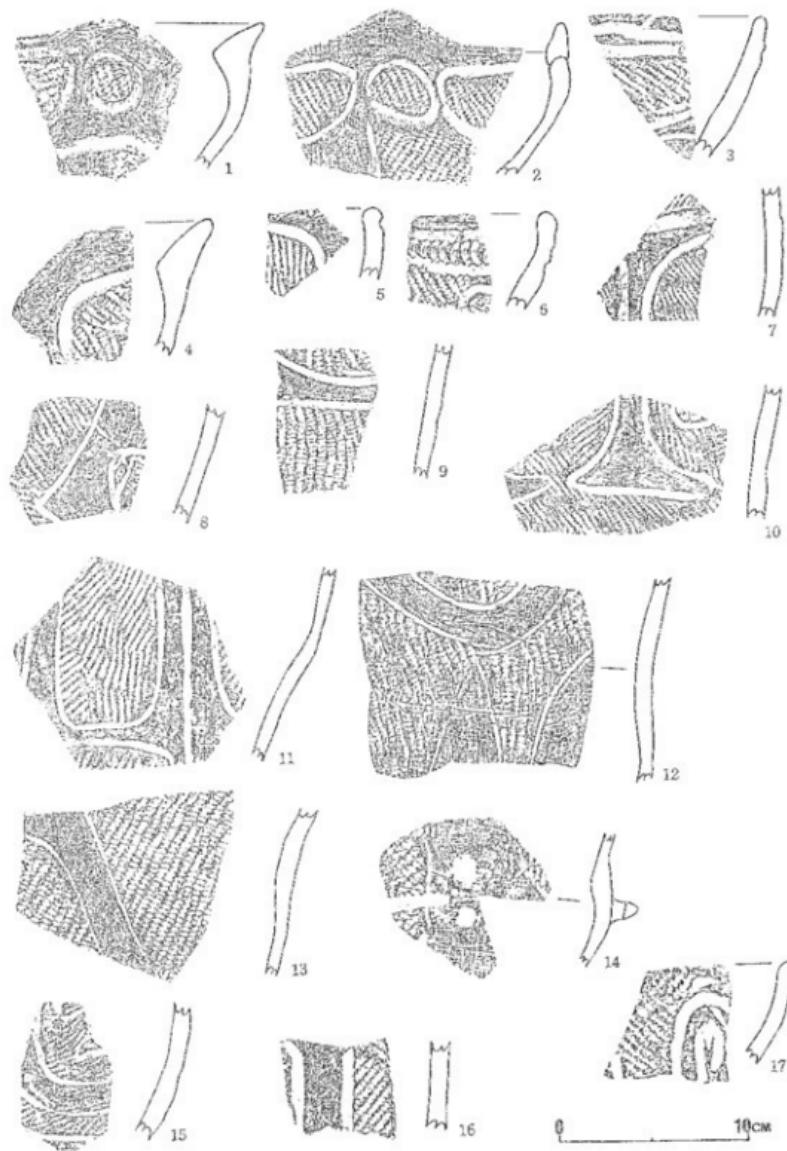
第55図 繩文式土器



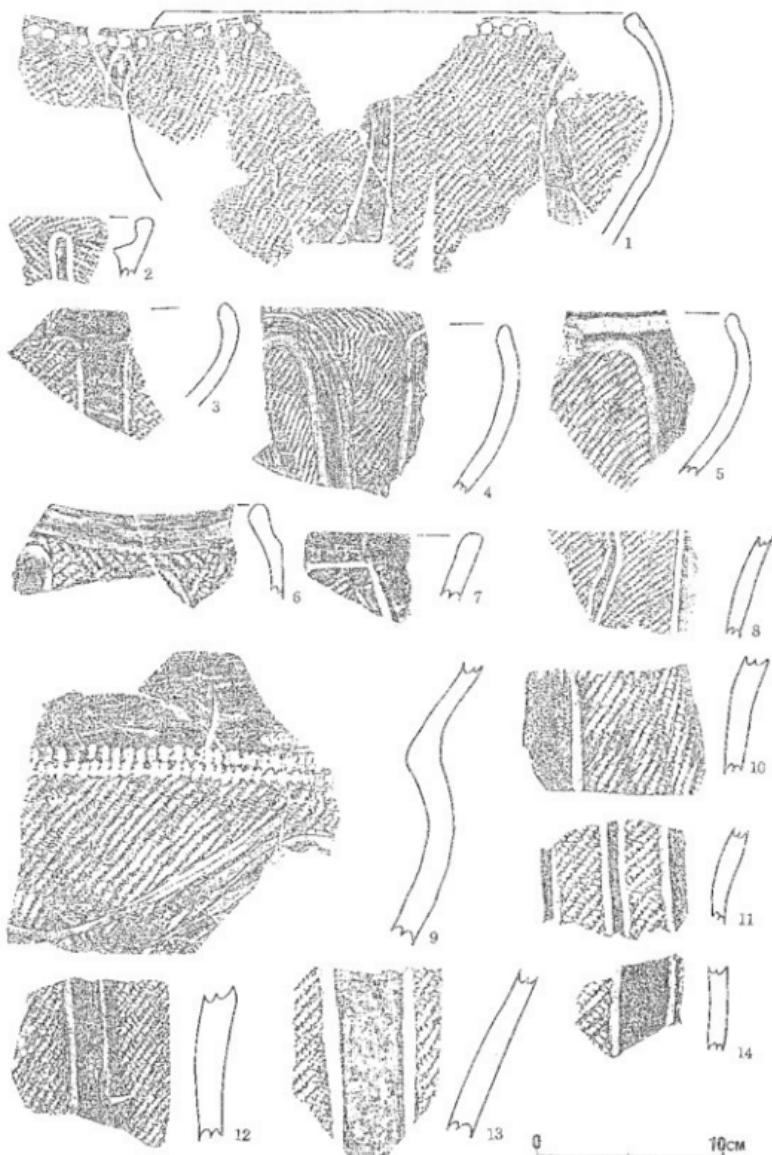
第 56 図 韩文式土器



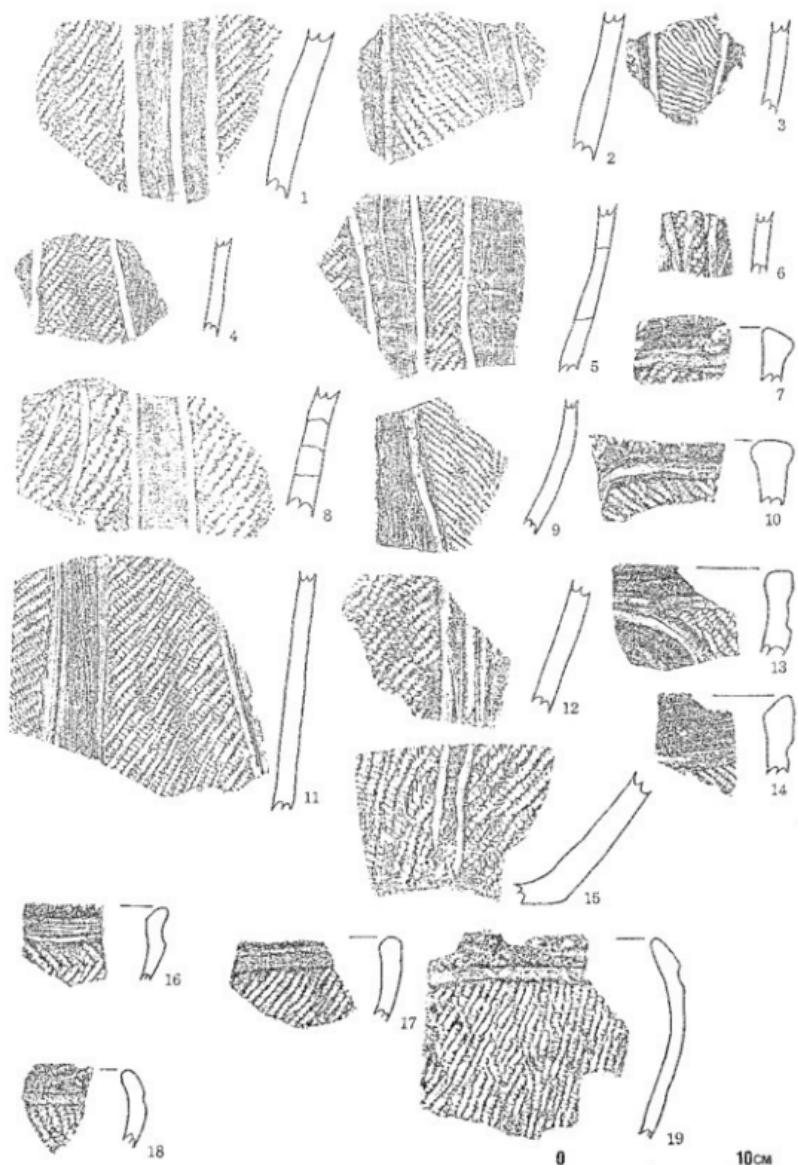
第57図 繩文式土器



第58図 繩文式土器



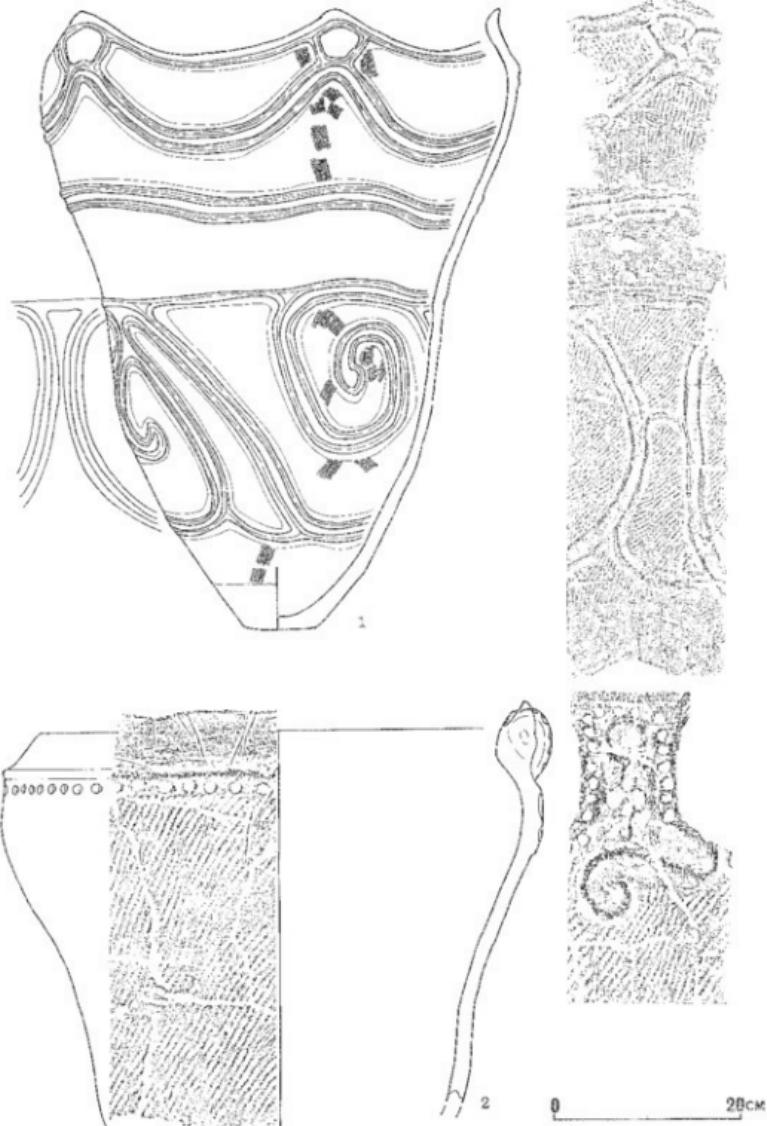
第59図 縄文式土器



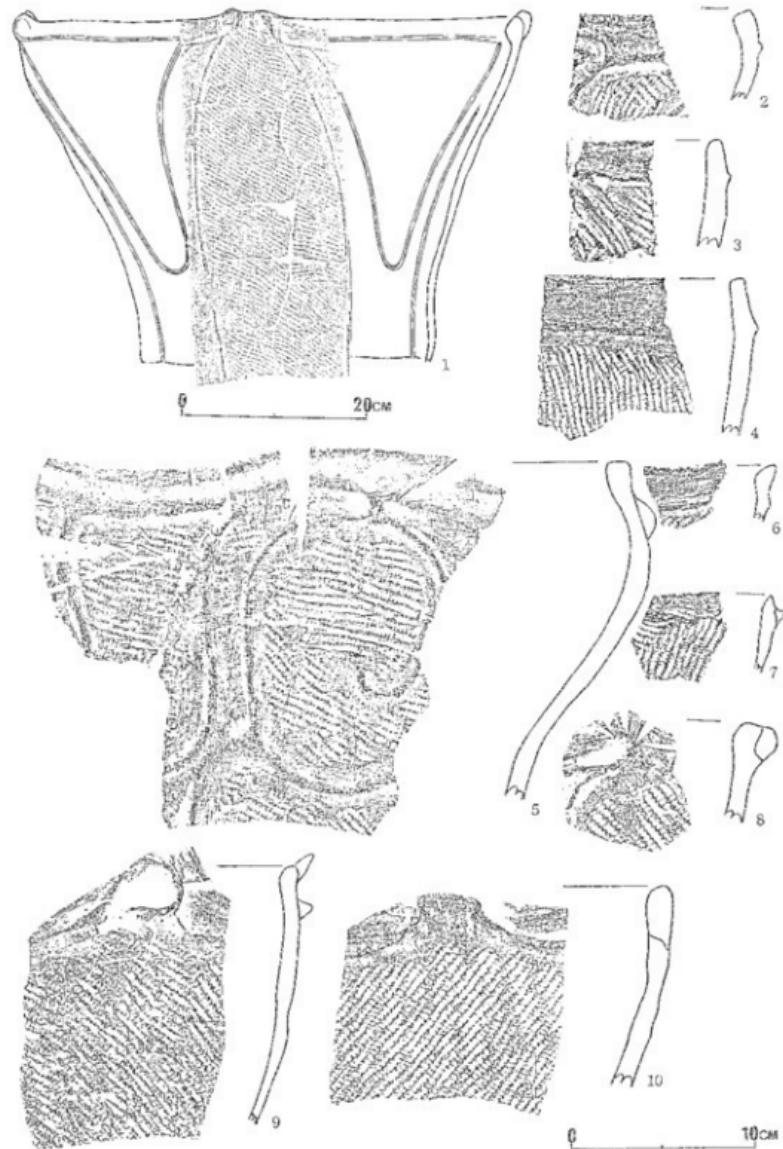
第60圖 繩文式土器



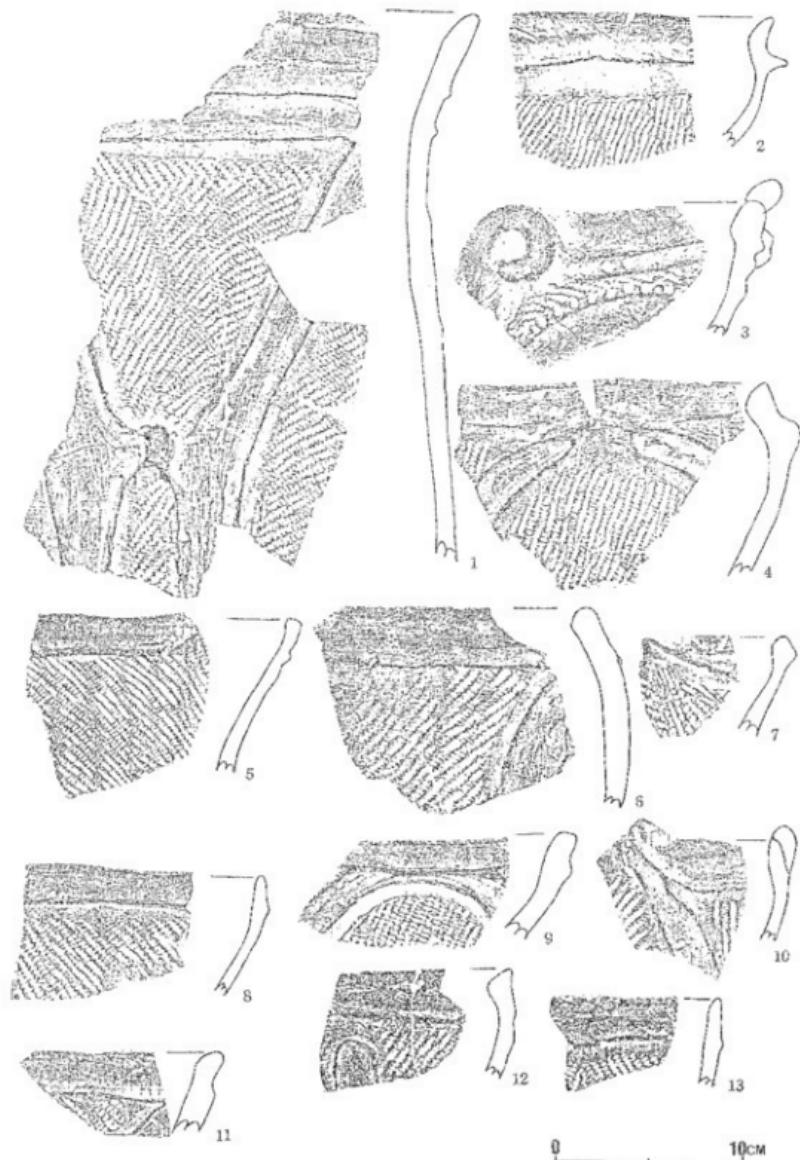
第61図 織文式土器



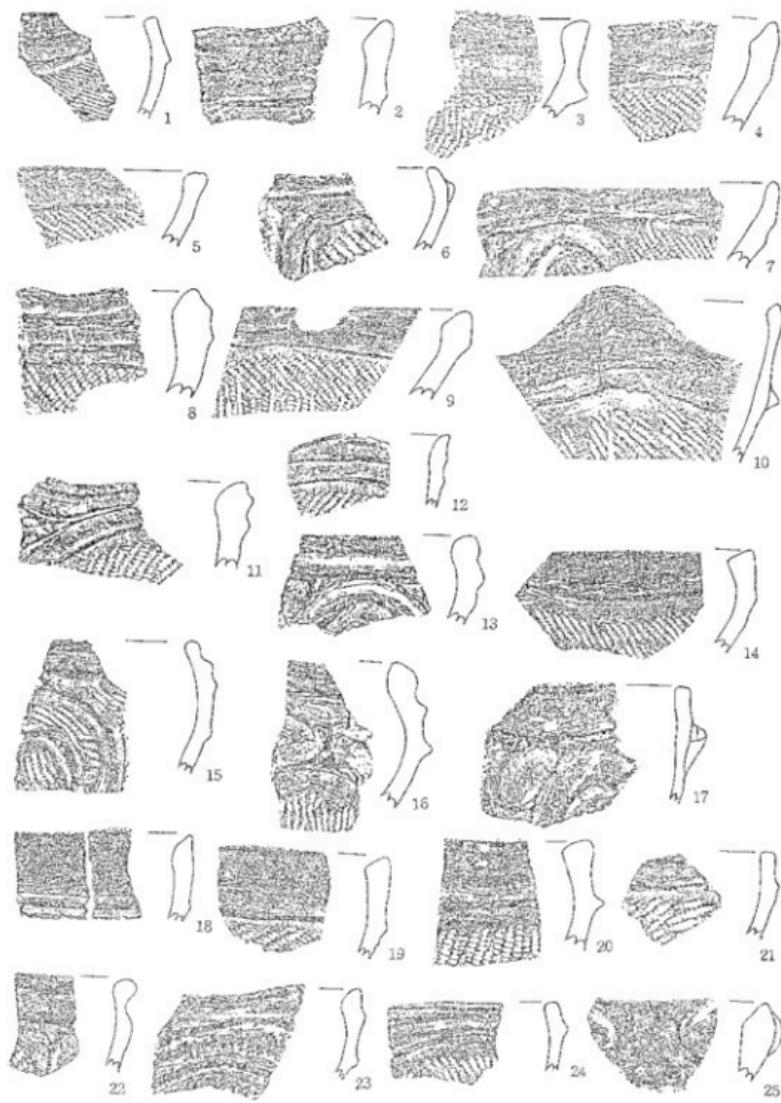
第62図 繩文式土器



第63圖 繩文式土器

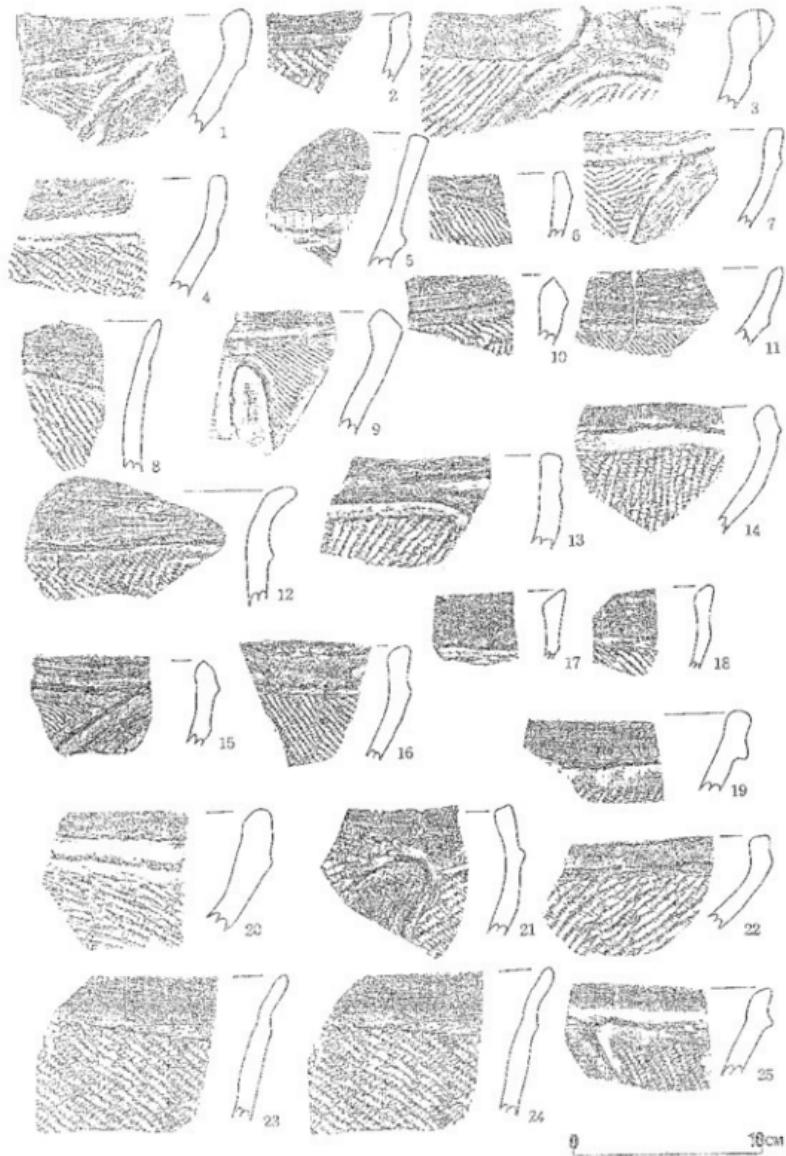


第64図 繩文式土器

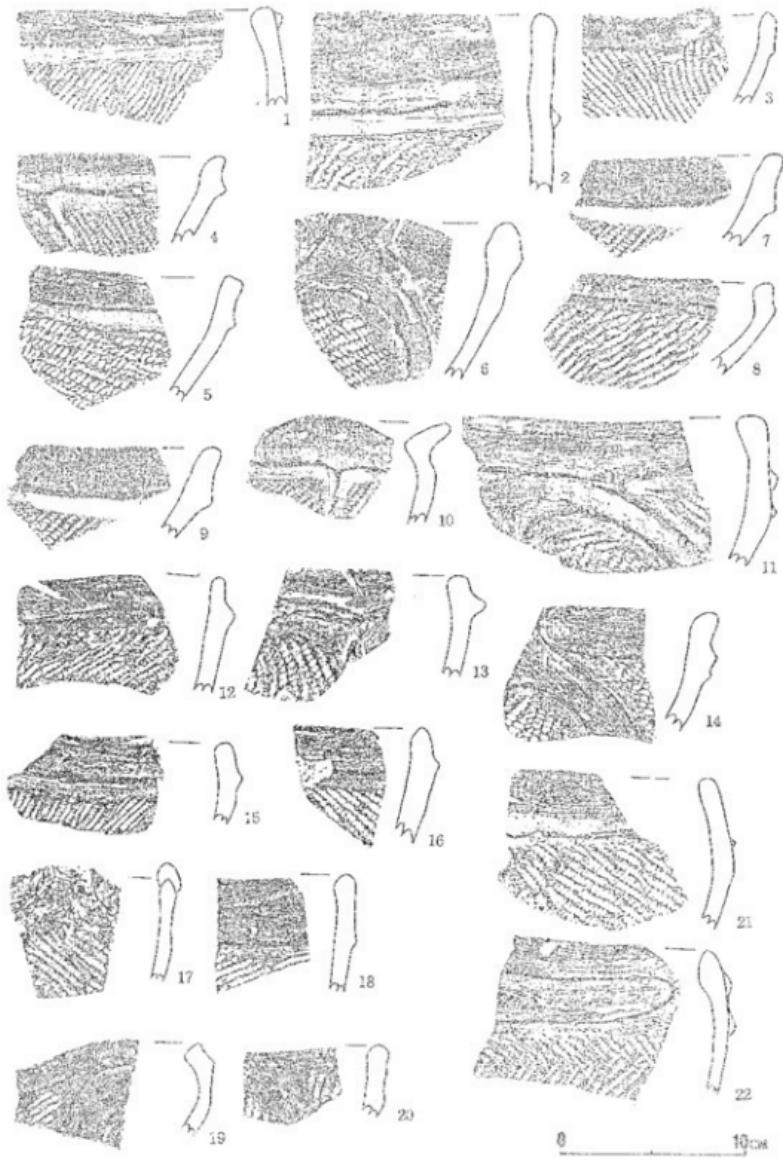


6 10CM

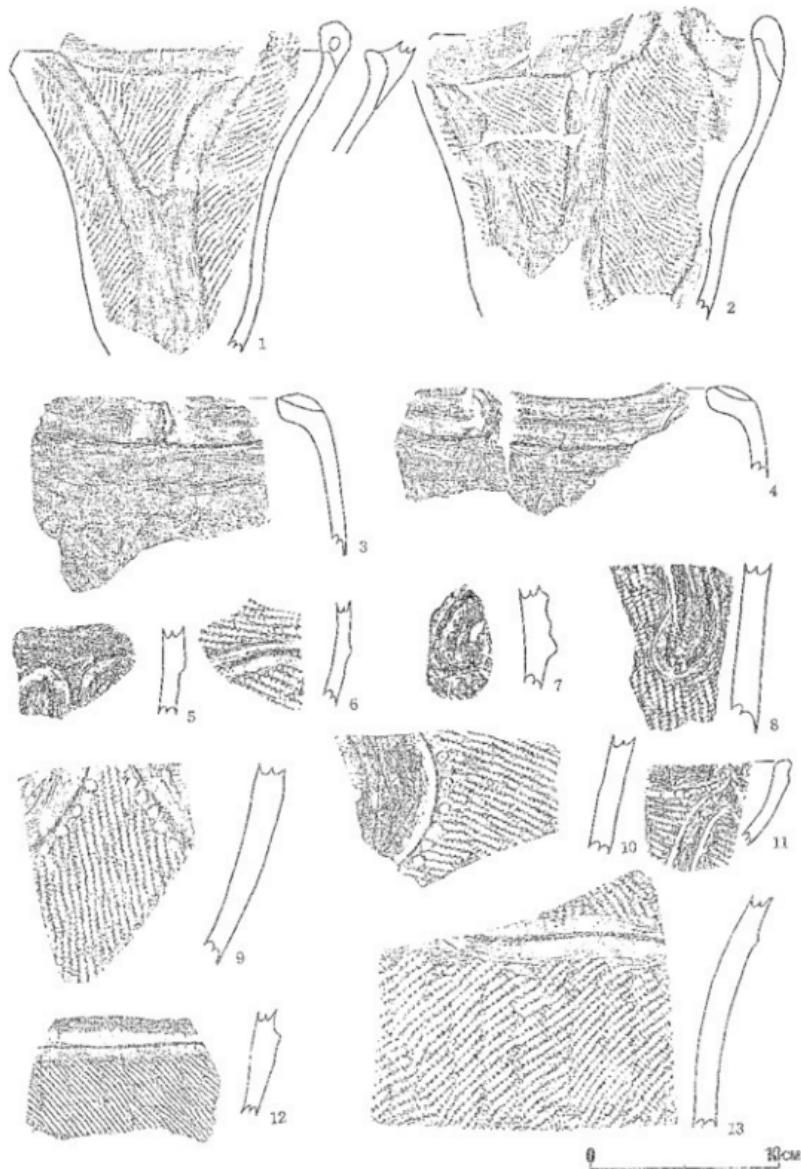
第65図 繩文式土器



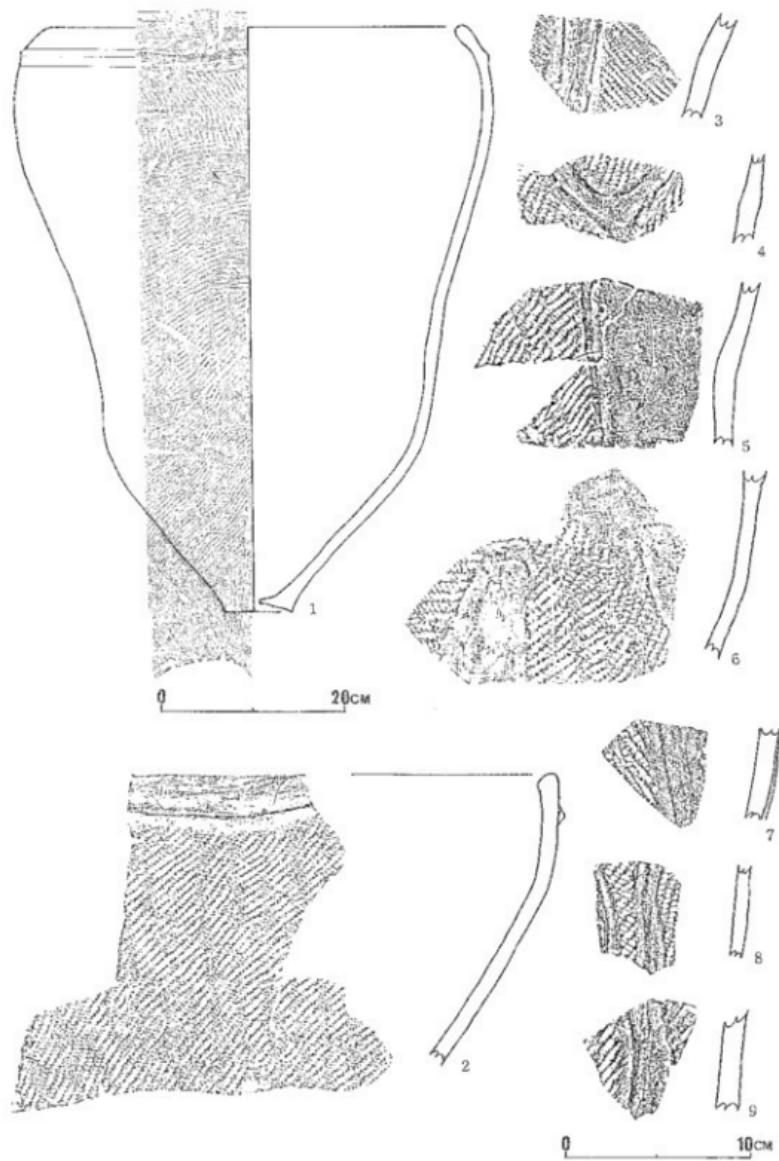
第86圖 繩文式上器



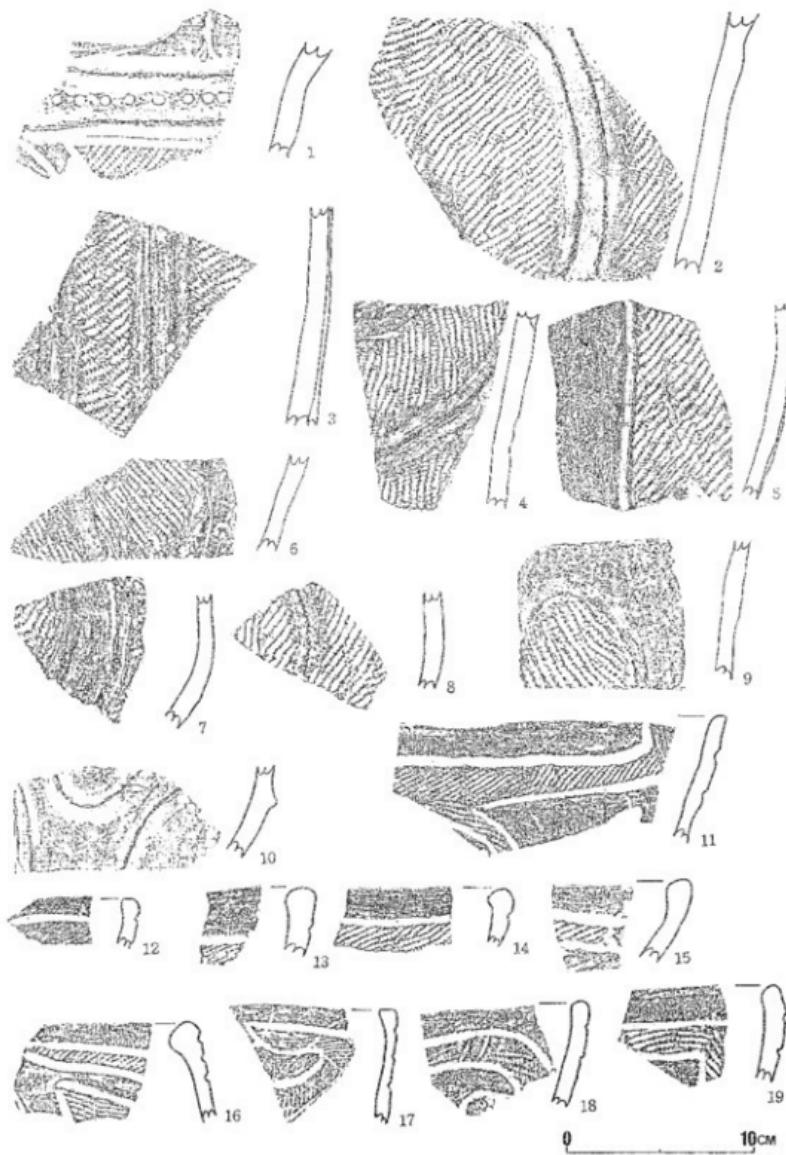
第67図 編文式土器



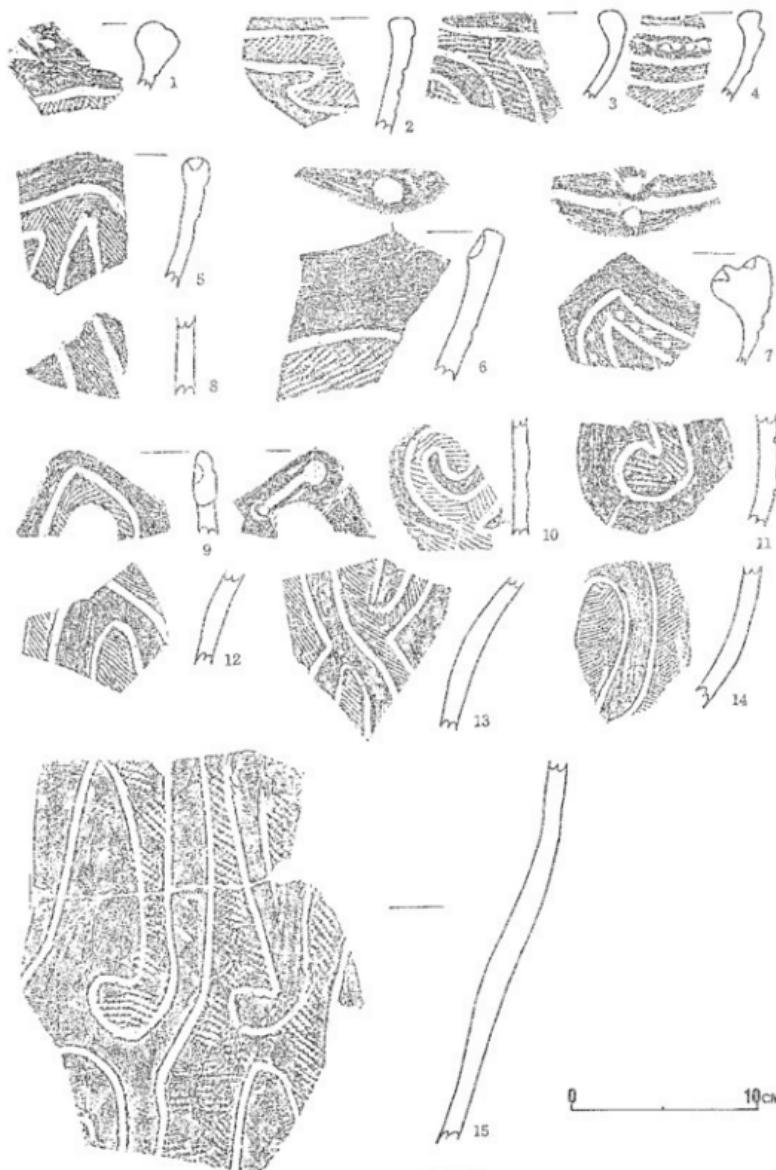
第68図 繩文式土器



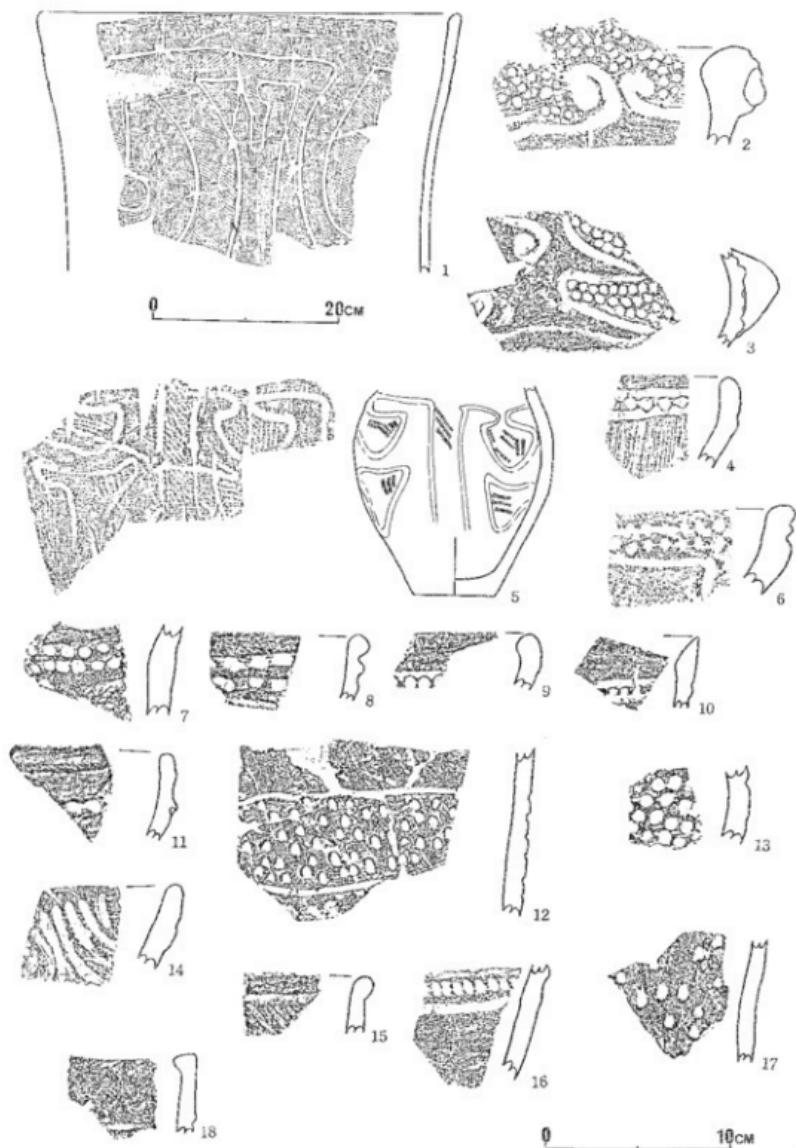
第69図 縄文式土器



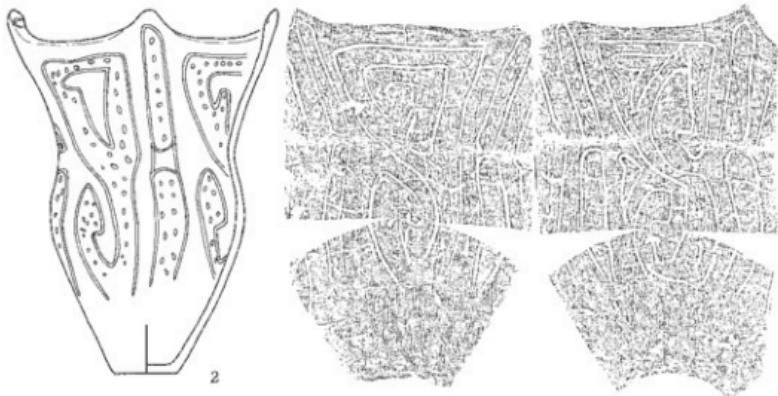
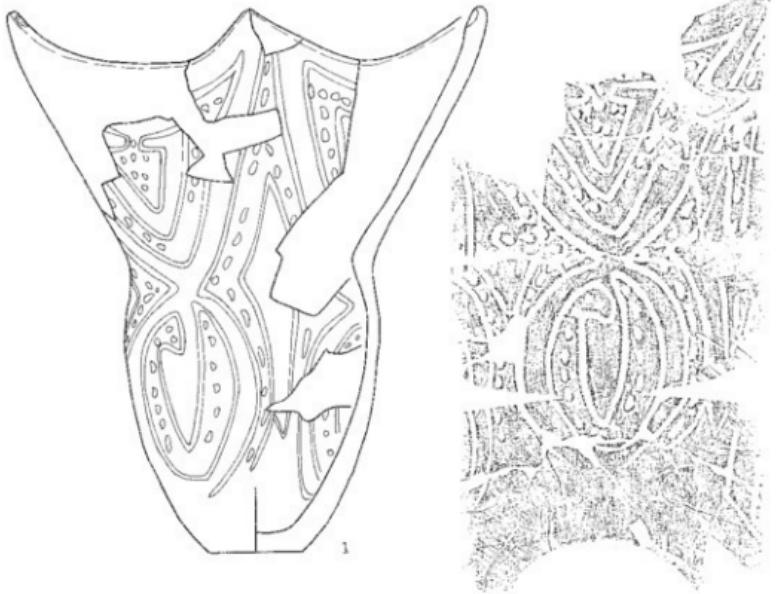
第70図 繩文式土器



第71図 繩文式土器

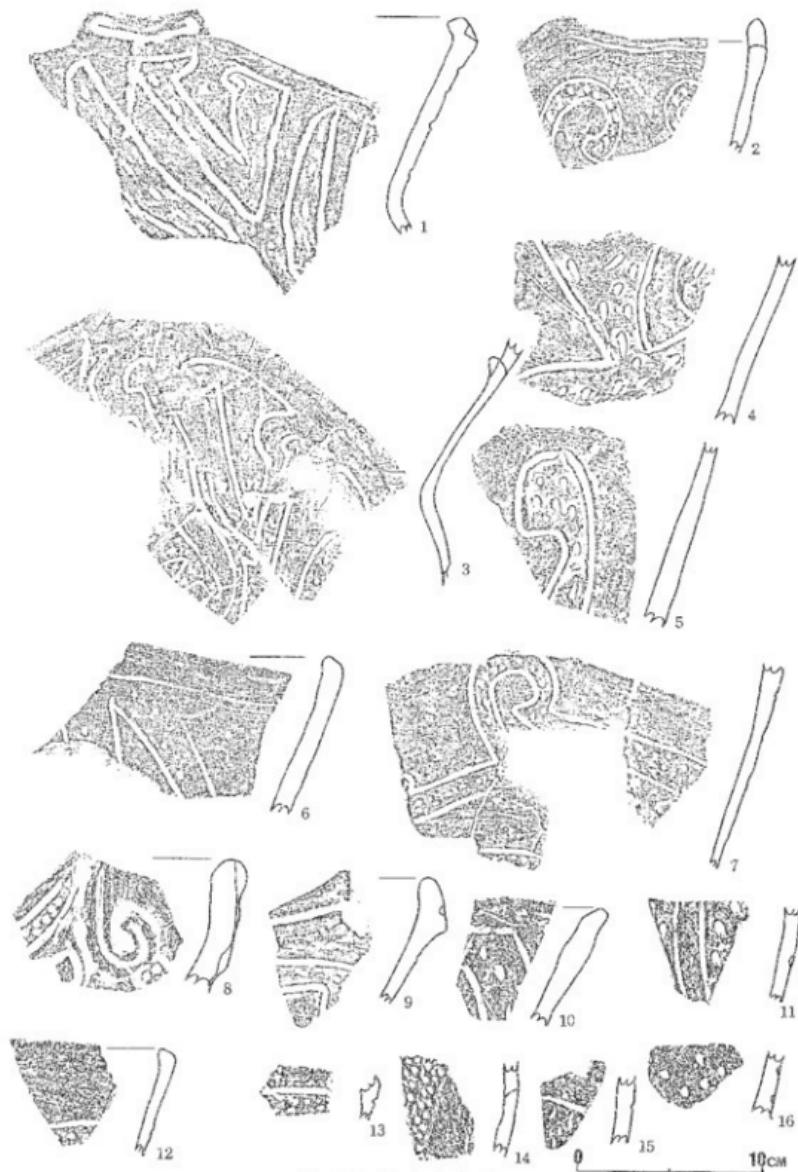


第72図 繩文式土器

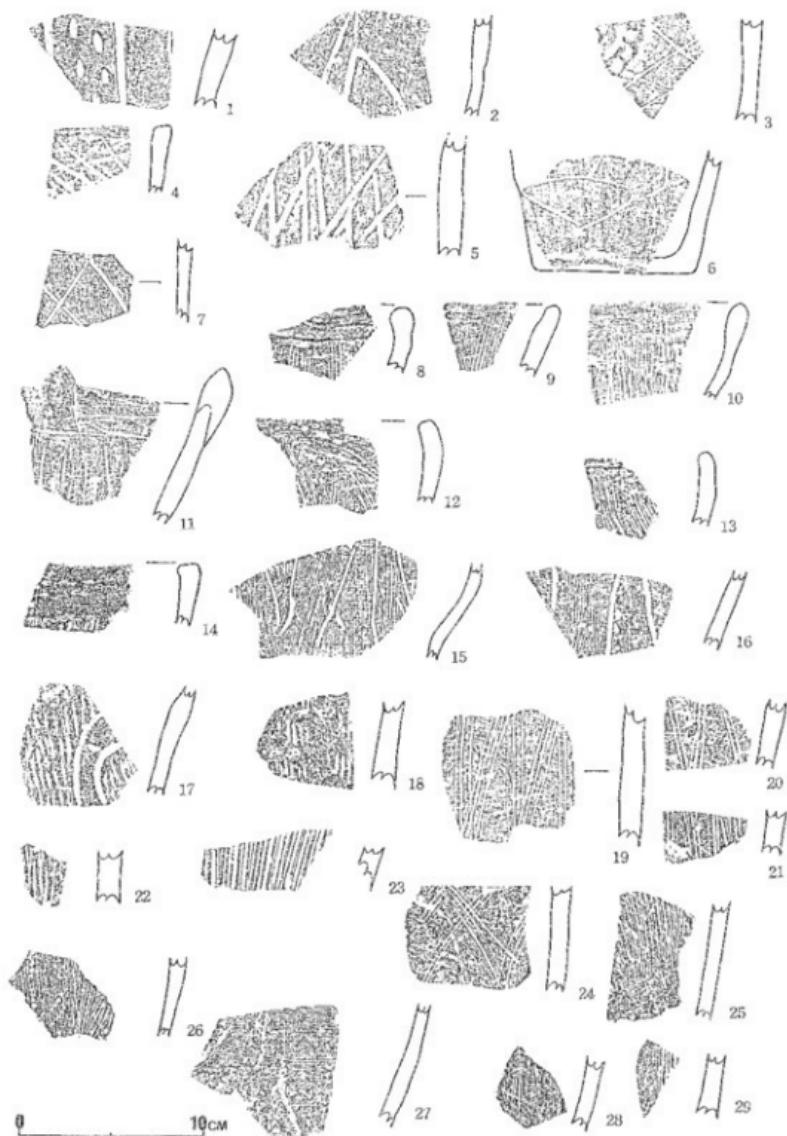


0 20CM

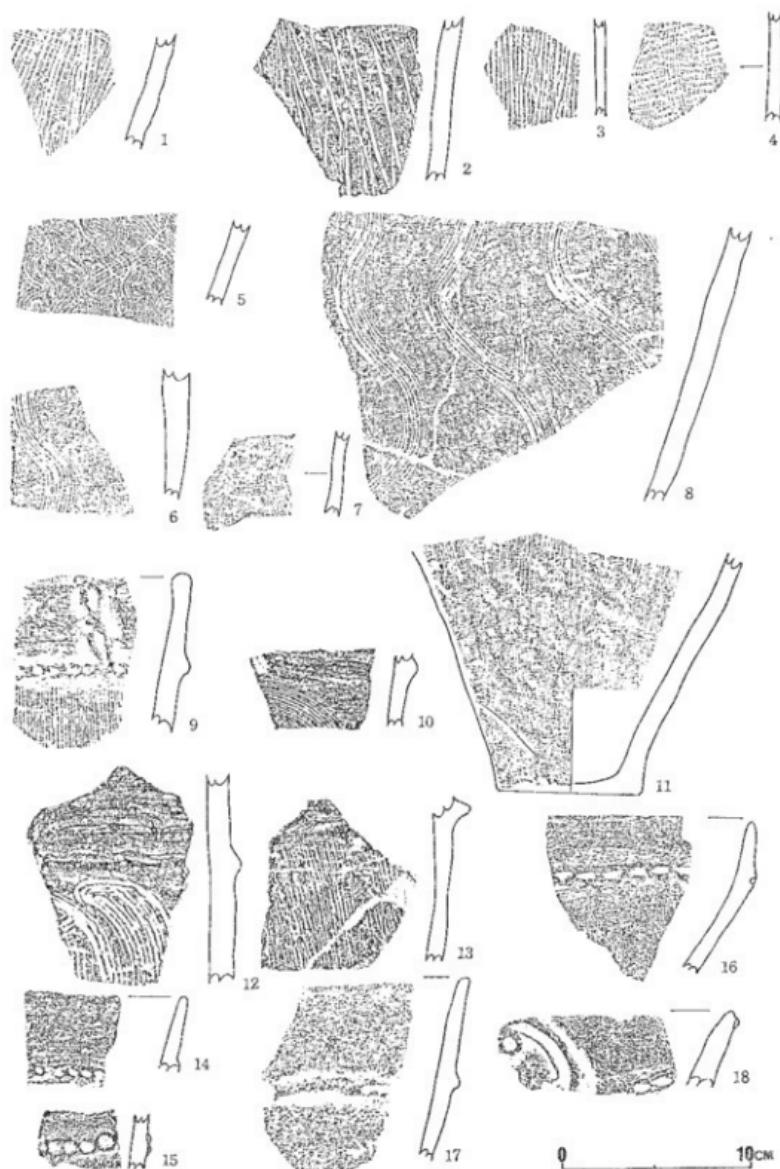
第73圖 繩文式土器



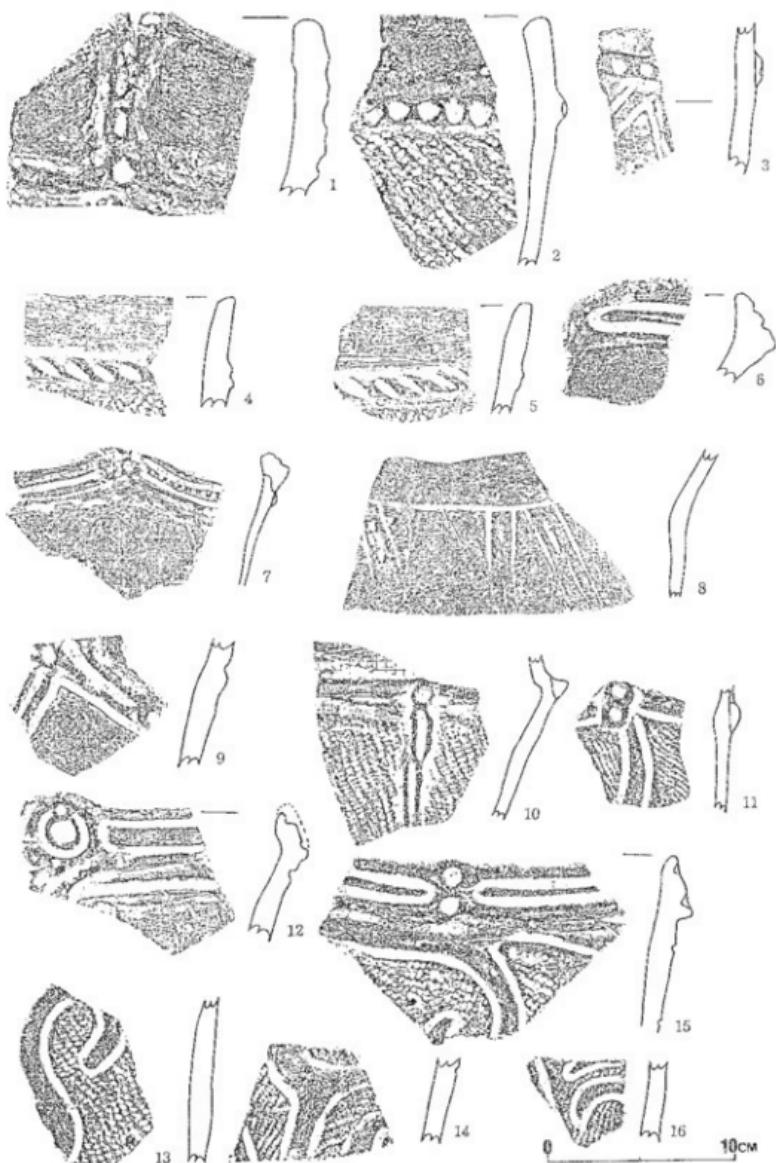
第74図 繩文式上器



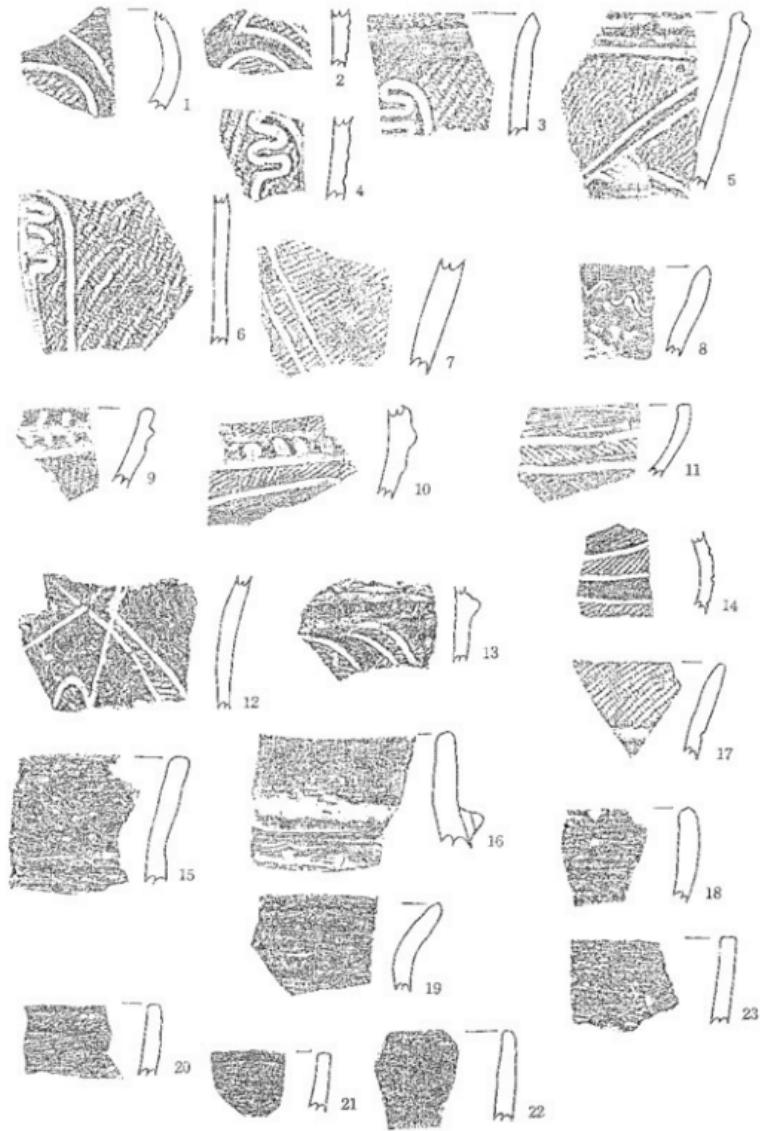
第75図 繩文式土器



第76図 繩文式土器



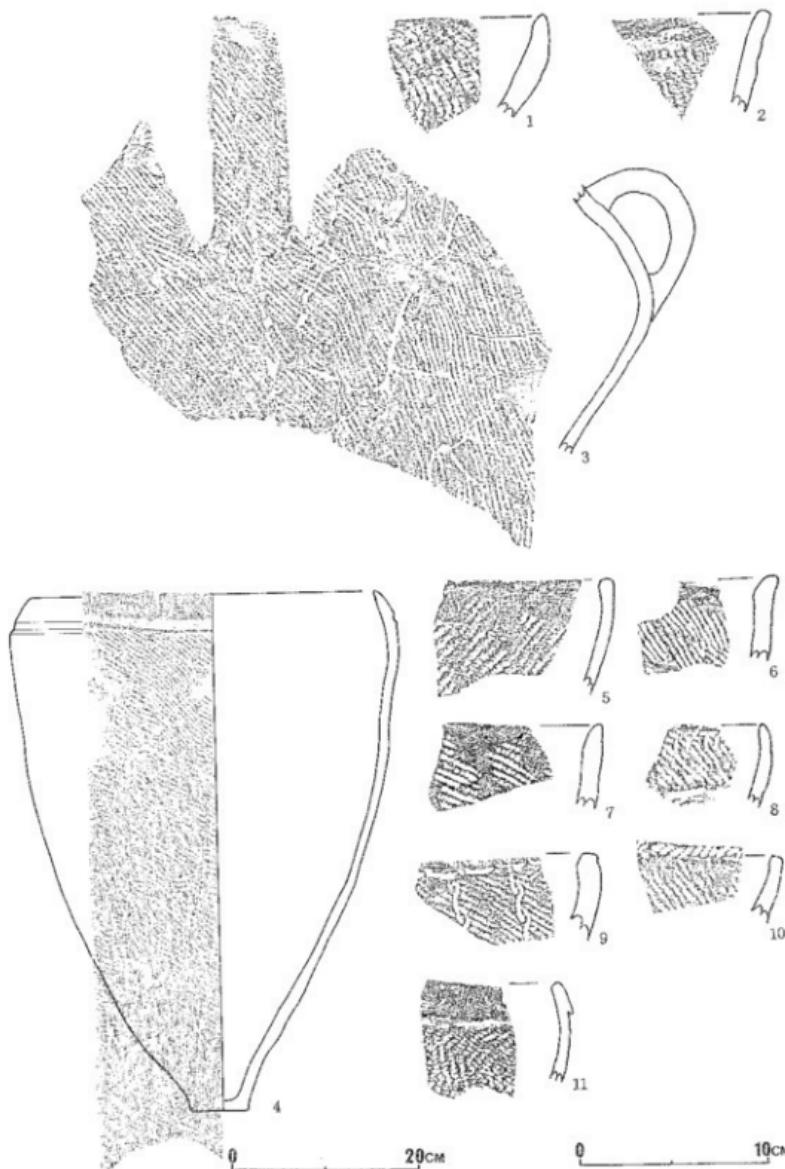
第77図 縄文式土器



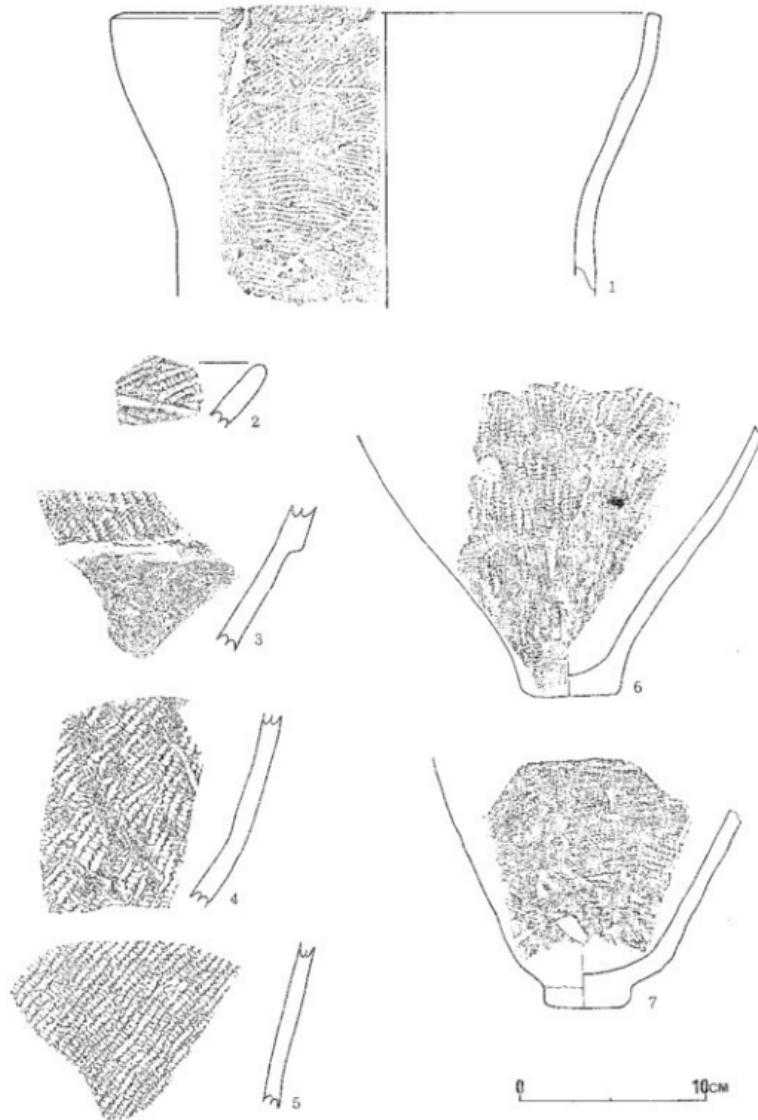
第78図 繩文式上器



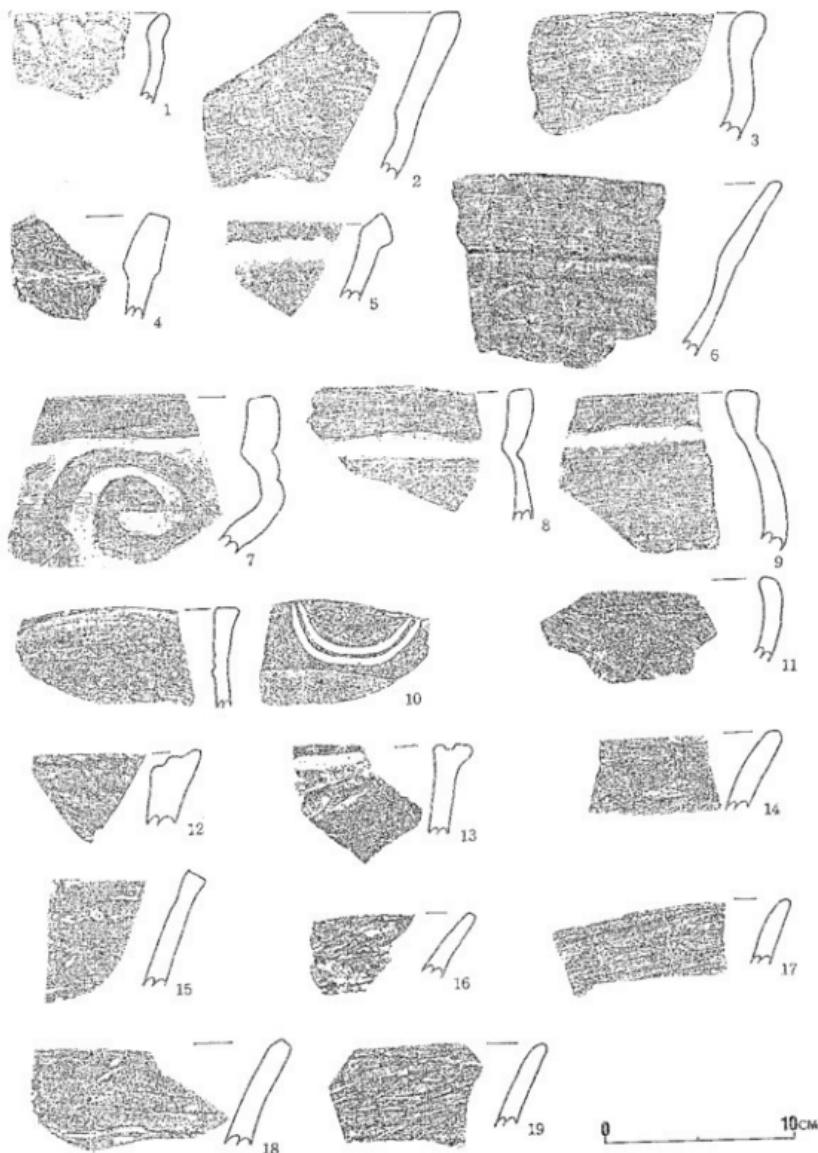
第79図 繩文式土器



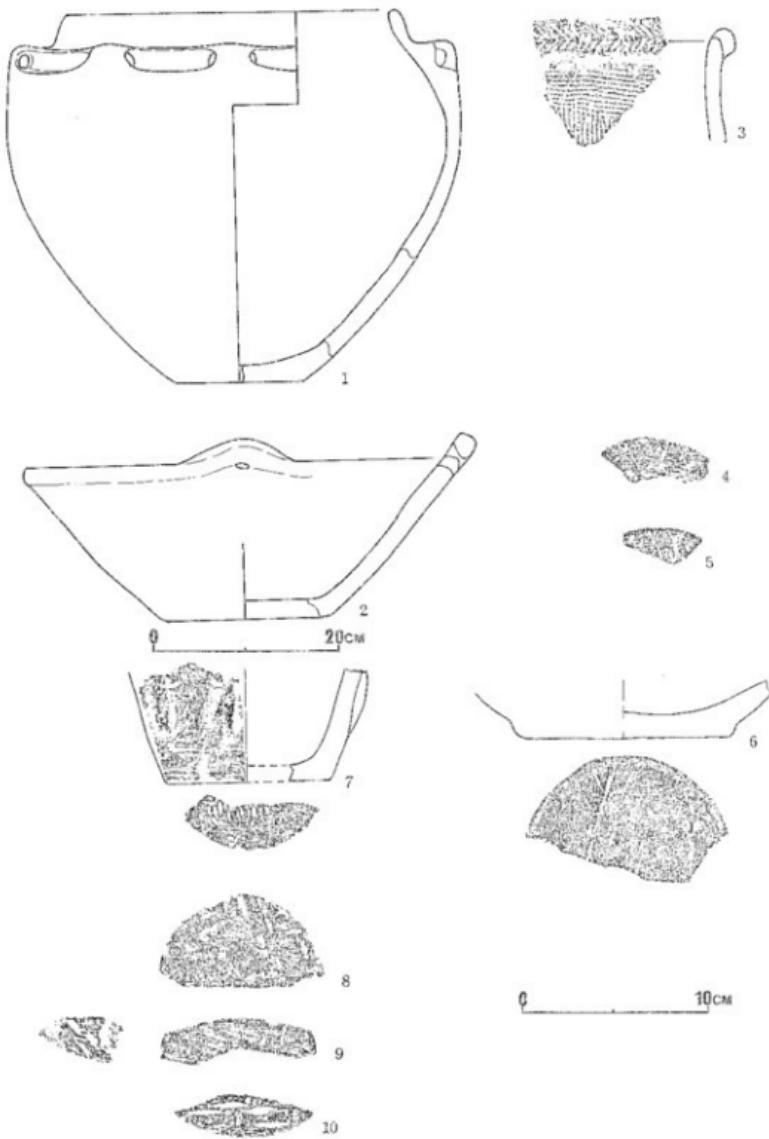
第80図 縄文式土器



第81圖 繩文式上器



第82図 縄文式土器



第83図 繩文式土器

2. 石 器

石器は土器にくらべると出土量はかなり少ないが、磨製石斧・打製石斧・石鎌・石錐・スクレイパー・すり石・礫器・砥石・石錘・石皿・四石の各種がある。しかし、すべて生産活動あるいは生活用具としての石器であり、装飾品や宗教的な道具としての石器は出土しなかった。

1～6は磨製石斧である。磨製石斧は合計8点出土した。1は完形で、刃部は丸みを帯び、中央部から側縁部にかけて叩きと思われる痕跡がある。2は中位から刃部にかけてのもので、刃部は丸みを帯びる。3は刃部が欠損しており、他と比較すると厚みがある。5は1号住居址床面直上出土のもので、上端部は急にすばまり丸みを帯びる。

7～11は打製石斧である。打製石斧は合計20点出土した。形態はすべて分銅形のものである。いずれも扁平な石を使用し、8以外はすべて両面に自然面を残している。8は1号住居址出土のもので、片面だけ自然面が残る。

12～14は石鎌である。石鎌は合計3点出土した。12・14はえぐりのあるもので、14は先端部と脚部が欠損している。石材はチャートである。13は5号土壙から出土したもので、えぐりが浅く、石材は赤紫色をしたチャートと思われる。

15は石錐と思われる。片面の一部に自然面を残している。

16～18はスクレイパーと思われる。16は周縁部の一部に調整を加えている。17は一部を欠損しているが、周縁部一帯に調整を加えている。表採品である。18は27号土壙中層から出土したもので、下端と側縁の一部に調整を加えている。石材は、16・17が墨曜石、18がチャートである。

19～26はすり石である。すり石は全部で50点出土した。完形は10点で残りは欠損している。これらは形態によって、ほぼ方形を呈するもの8点、円形あるいは楕円形を呈するもの26点、不整形のもの16点に分類できる。さらに、中央部に叩きによる小さな凹みを片面あるいは両面に1ないし2個あるものと、叩きによる痕跡のないものに分類できる。19～23は小さな凹みのあるもので、26はすり面ははっきりしないが、両面と側面の3箇所に凹みがある。24は片面に不整形な叩きによる痕跡が数か所ある。25は1号土壙上・下層出土のもので、上端部と側面及び下端から側面にかけての3か所に叩きによる痕跡がある。

27・28は礫器である。27は下端部に刃部があり、28は下端部から一方の側縁部にかけて刃部がある。

29・30は砥石と思われる。小型のもので、側縁部を整形し、両面にすり跡がある。29は1号住居址から出土した。

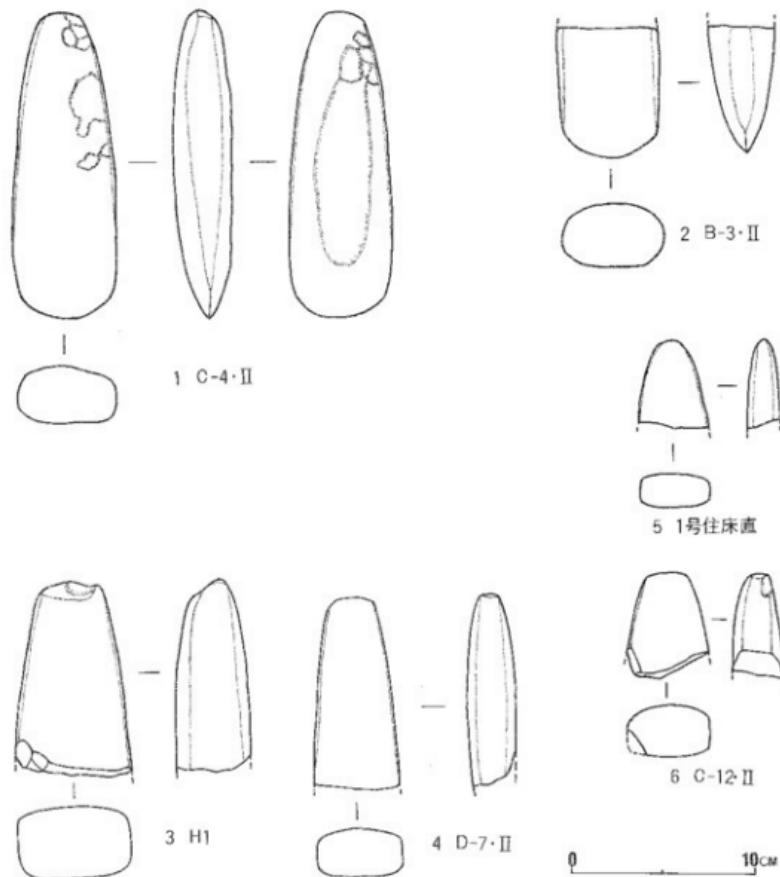
31は石錘で1点のみ出土した。2分の1ほど欠損している。上端部と片方の側縁部を打ち欠き、片面は中央部まで溝状に打ち欠いている。

石皿と四石は合計32点出土した。小破片が多いため、はっきり区別できるのは石皿が1点、四

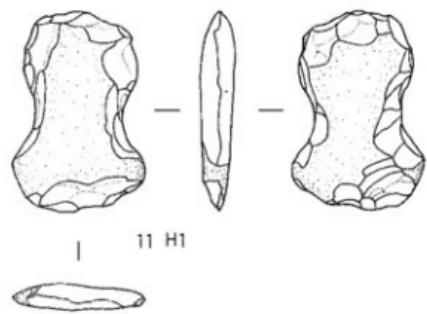
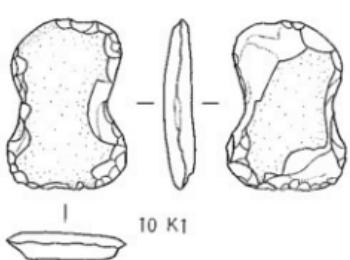
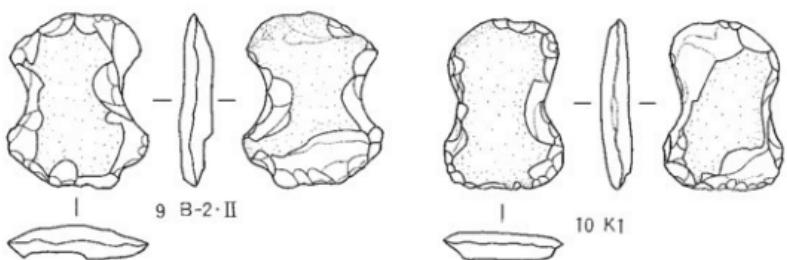
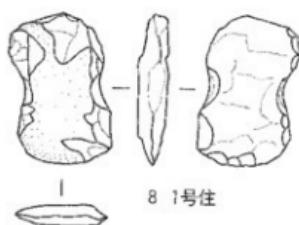
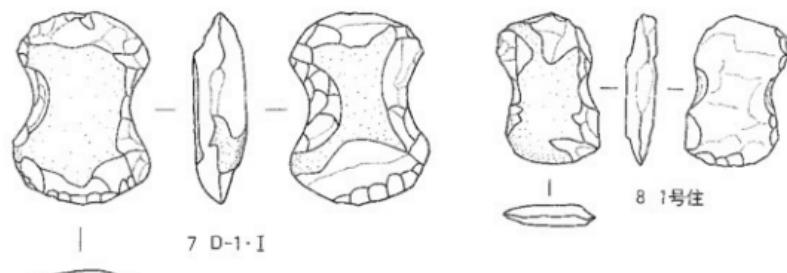
石が8点で、残り13点は不明である。

石皿は、ほとんどが片面に大きなすり面があり、その表面に小さな凹みがある。32は27号土壇覆土上層から出土した。

凹石は、凹みが片面だけに数個あるもの、両面に数個あるもの、片面に数個・片面に多数あるものに分類できる。33は、3番目のものである。

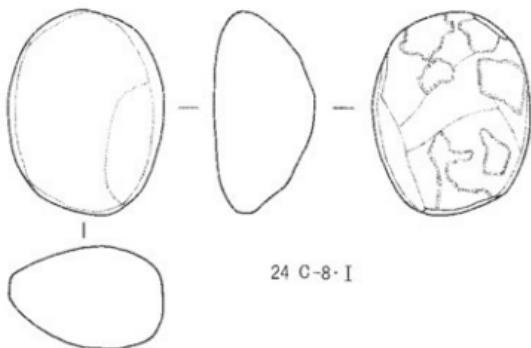


第84図 磨製石斧

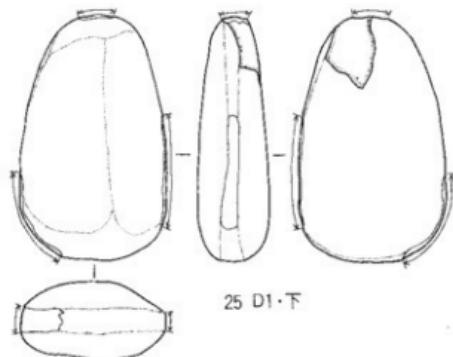


0 10CM

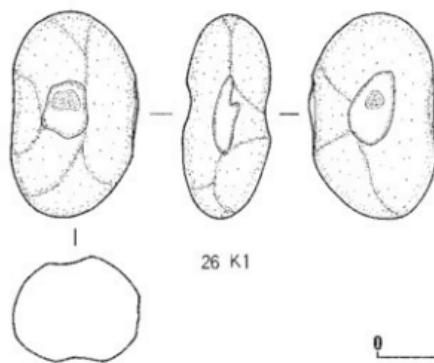
第85図 打製石斧



24 C-8-I



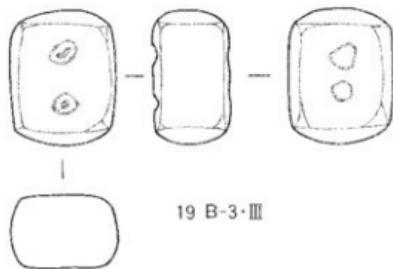
25 D1-下



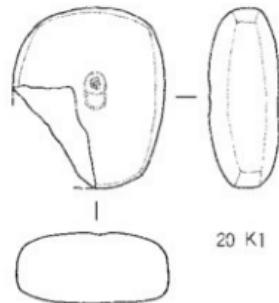
26 K1

0 10CM

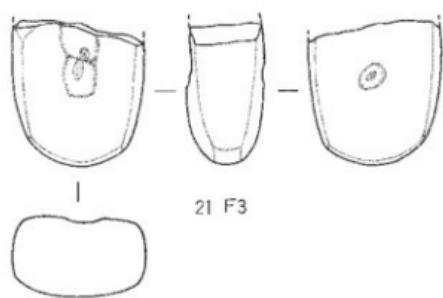
第86図 すり石



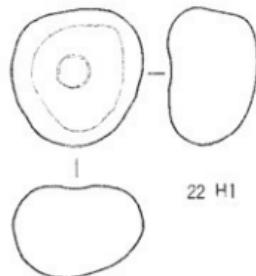
19 B-3-III



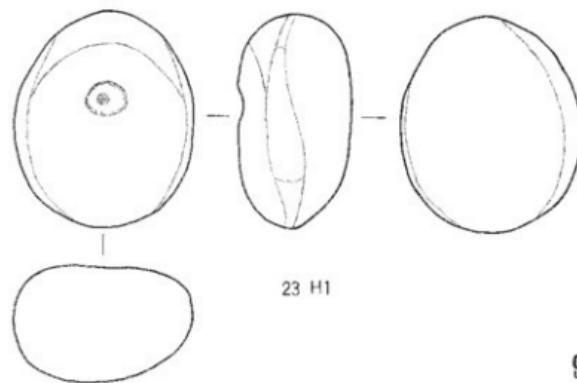
20 K1



21 F3



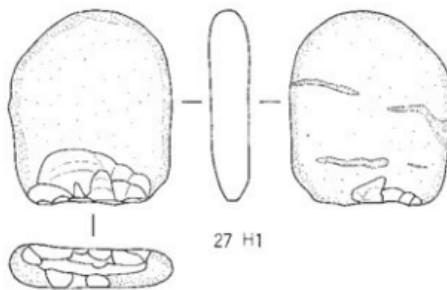
22 H1



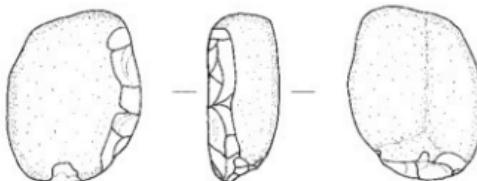
23 H1

0 10CM

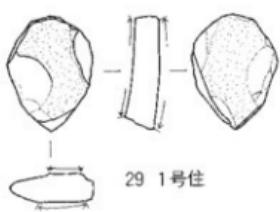
第 87 図 すり 石



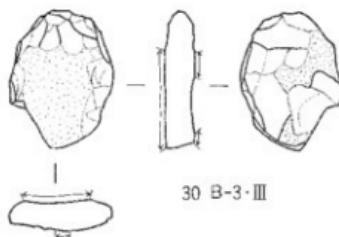
27 H1



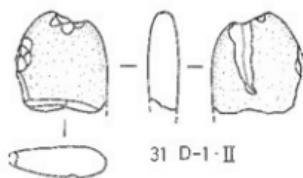
28 C-4-II



29 1号住



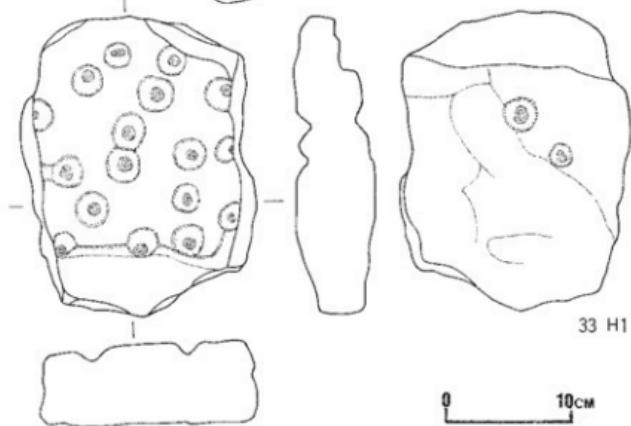
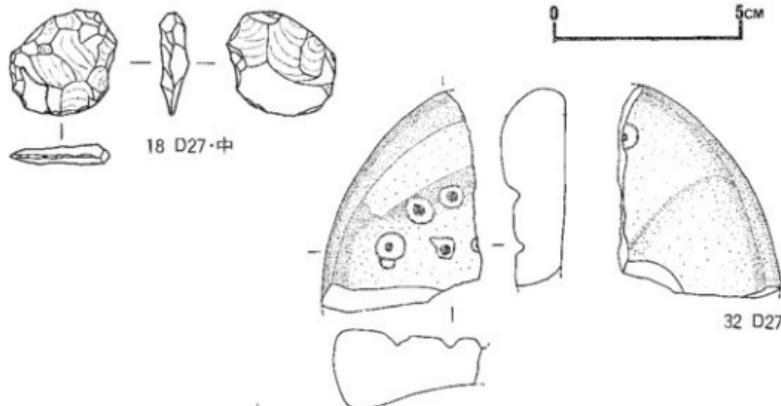
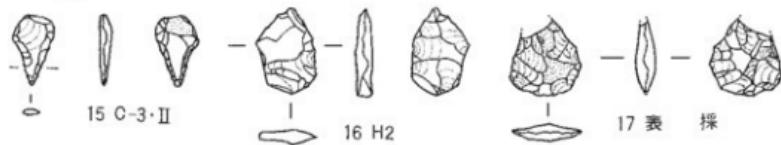
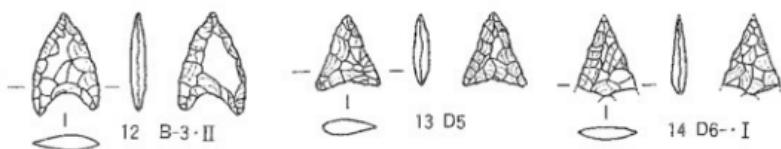
30 B-3-III



31 D-1-II

0 10CM

第88図 踏器・砾石・石錐



第89図 石器・石錐・スクレバー・石皿・凹石

3. 土 製 品

土製品は出土量も種類も少なかった。耳飾りや土偶等も出土していない。

1～14は土製円盤である。土製円盤は合計37点出土した。すべて土器片を利用したもので、周縁部をきれいにすったもの8点、部分的にすったもの4点、打ち欠いただけのもの25点に分類できる。1・2・6～10・13が周縁部全体をすったもの、4・12が部分的にすったもの、3・5・11・14が打ち欠いただけのものである。

15～17は有孔土製円盤で3点出土した。土器片を利用したもので、周縁部をきれいにすっている。孔は中央部にあり、内面からきれいにすられている。

有孔のものを含め土製円盤は、1号土壙から6点まとまって出土した。4・10・15が覆土上層、2・3が覆土中層、12が覆土下層から出土した。他に遺構から出土したものは11が13号土壙覆土中層、13が21号土壙、14が1号住居址である。

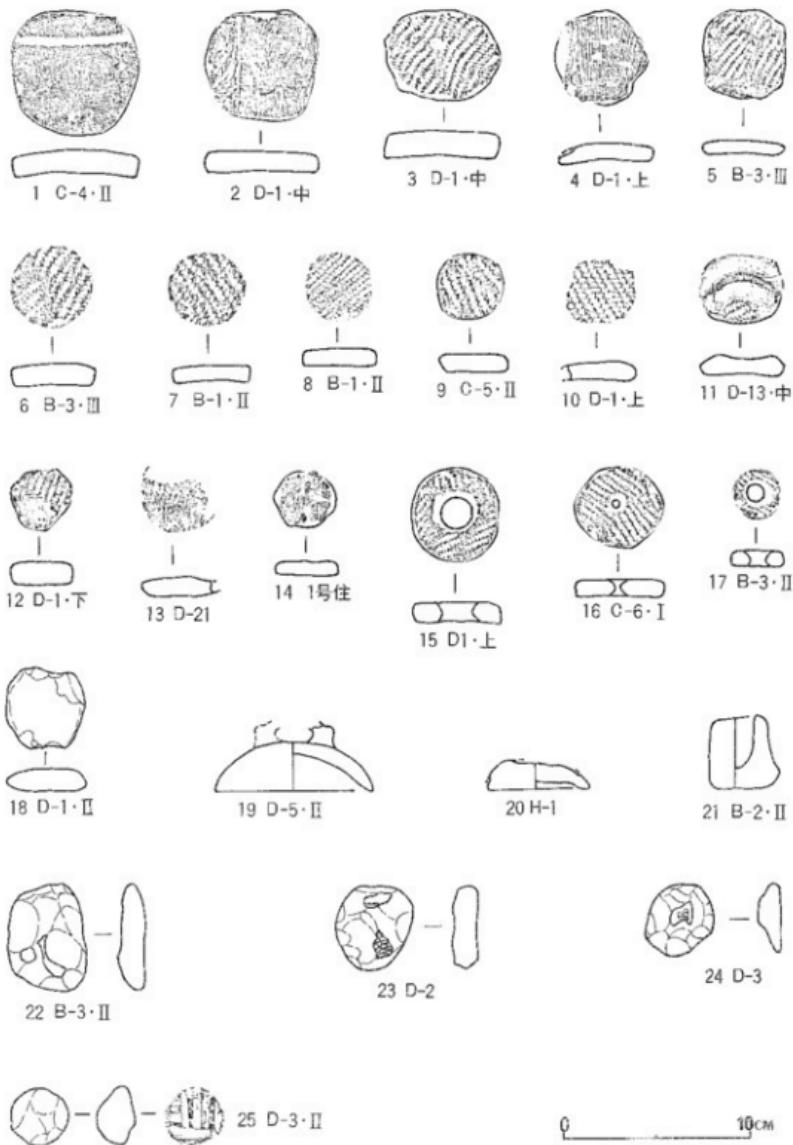
18は土鐘で1点だけ出土した。両端を打ち欠いている。全面にすられたような痕跡があるが、土器片を利用したものと思われる。

19・20は土製蓋と思われる。19はつまみ部が半分欠損している。20もつまみがあったと思われる。

21は小型の手づくね土器である。内側は指先が入る程度である。

22～24は土器片を利用したもので、周縁部と表側を打ち欠いて落している。23・24は部分的に繩文が残っている。22は表面を落した後に、土器製作時のものと思われる指の跡が現れている。23は2号土壙、24は3号土壙から出土した。

25は何であるか不明であるが、円形を呈し片面は球状に丸くなり、その裏はややふくらむ程度で、網代と思われる痕跡がついている。



第90圖 土製品

第2節 弥生時代の遺物

弥生式土器（第91図）

弥生式土器はグリッド、1号方形周溝墓周溝覆土、1号埴封土・同溝覆土、1号住居址覆土より、総数52個の破片が出土している。Ⅲ文様帶の胴部片が34個で最も多く、Ⅰ文様帶の口縁部片は5個、Ⅱ文様帶の頸部片は7個、底部片が6個で、図上復元も含めて、完形は1個も出土していない。そのうち、拓影には33個を図示した。

Ⅰ文様帶は付加条縄文と単節縄文の施文が見られ、1を除いて複合口縁である。Ⅱ文様帶は施文具をとりあげてみると、3本・4本・6本の櫛状工具があげられる。Ⅲ文様帶を構成する縄文はⅠ文様帶と同じである。なお、付加条縄文は第一種のみ観察できる。

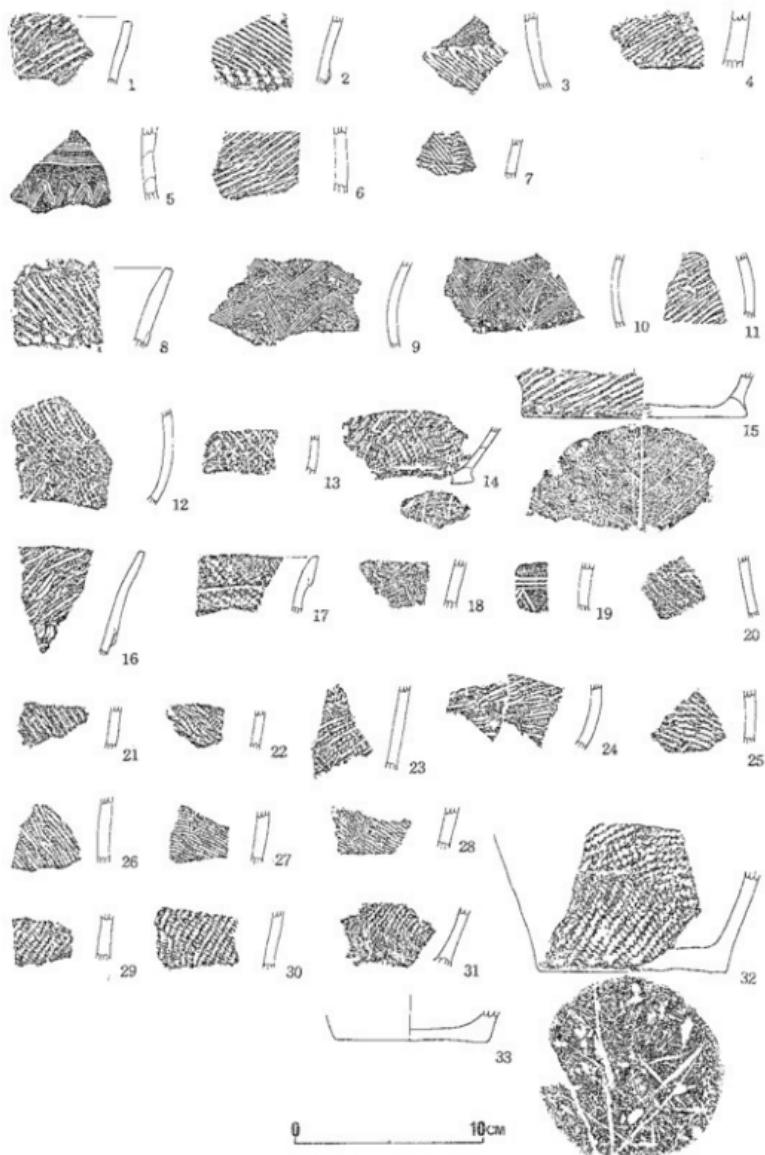
グリット出土は1～4である。1は口縁部で口唇部には原体の押捺が見られる。口縁部は器面の荒れがひどいが、付加条縄文であろう。2は貼り付けによる複合口縁で付加条縄文が施され、口縁部下端には原体が押圧されている。3は頸部で、無文帶の下は単節Rし縄文である。4は胴部で付加条縄文である。胎土にはいずれも石英・長石などの砂粒が混入しており、焼成は1を除き良好である。

1号方形周溝墓周溝覆土出土は5・6・7の3片のみである。5は頸部で4本櫛目の横走櫛目文が二段に施され、その下に同一施文具により横走波状文が施されている（施文は左から右）。6・7は胴部で縄文（6は付加条縄文）がされている。胎土には石英・長石粒などが混入しており、焼成は良好である。

1号埴封土は8～15である。8は貼り付けによる複合口縁で付加条縄文を施し、口縁部下端には原体を押圧している。口唇部にも原体が押捺されている。9・10は頸部で、6本櫛目の連続山形文が施文されているが、10は9の整然と二段に施文されているのに比べると、ややみだれている。11・12・13は胴部で付加条縄文である。14・15は底部で付加条縄文を施し、底部下端がやくぼみを持ち、床付面がやや張り出す形状を呈する。底面にはいずれも木葉痕を有する。9・10・12～14は施文具・色調（黒褐色）・焼成・胎土などから同一個体と考えられる。なお、12の器内面には煤が付着している。いずれも胎土には石英・長石粒などを含み、焼成は良好である。

16～33は1号住居址出土である。16・17は口縁部である。16は貼り付けによる複合口縁で付加条縄文を施し、口唇部に原体の押捺、口縁部下端には原体の押圧が見られる。さらにその下に3本（かそれ以上）櫛目の横走波状文（波の山の部分か）の一部らしいのが観察できる。17は輪積痕を残したように見える複合口縁で、単節縄文（Rしの横回転）を施している。口唇部にも原体の押捺が見られる。18・19・20は頸部で、18は器面の風化がひどく、文様が判然としないが、横走波状文を連続山形文（いずれも櫛目数は不明）が施文されている。19は3本櫛目の横走櫛目文とその下

に連続山形文（3本櫛目か）が施文されている。20は無文帶の下に縄文（単節か付加条縄文か不明）が施されている。21・30は胴部で縄文（21～26は付加条縄文、27・28は単節LRしの横回転、29・30は単節LRの横回転）が施されている。31は底部がぬけ落ちた胴部片で付加条縄文の下はわずかに無文帶となっている。32・33は底部である。32は表裏面の風化がはなはだしく、文様は不明である。33は全面に単節のLR縄文（横回転）を施し、底面は木葉痕を行す。32・33は14・15の底部と比較すると、底部下端のくぼみ、床付面の張り出しが見られない。32を除き、焼成はいずれも良好で、胎土には石英・長石粒などを混入している。21・27・33の器外面には煤が付着している。また、33の器内面はあれがひどい。さて、この中で床直は24、炉上が26で他は覆土内である。



第91岡 弥生式土器

第3節 古墳時代の遺物

1. 壺（底部穿孔土器）

2号方形周溝墓の溝内出土の壺形土器で、口縁部を2／3程欠いている。胴部下部は焼成後意識的に打ち欠いて欠損させている。球形に近い胴部から頸部は垂直気味に立ち上がり、一端折れて緩い稜をもち、やや大きく外反しながら聞く口縁部と接合している。器表面は全体にハケ目が施されているが、内面の口縁部から頸部にかけての部分と、胴部下部にもハケ目がみられる。ハケ目はやや粗い日のものと細目の2種類がみられ、口縁部から頸部にかけては細目を縱にていねいに施し、胴部はやや縦に斜行させている。なお胴部下部はハケ目の後へラによる磨り消し（へラ磨き）がみられる。ハケ目の単位は9～11で頸部と口縁部の接地面にも施されている。輪積痕跡が明瞭で、指頭による整形がなされ、口縁部は呑んだ部分を修正しているのがみられる。推定高、口径は15cmで胴部最大径は12.8cm、胎土は緻密で色調は赤褐色である。

2. 器台

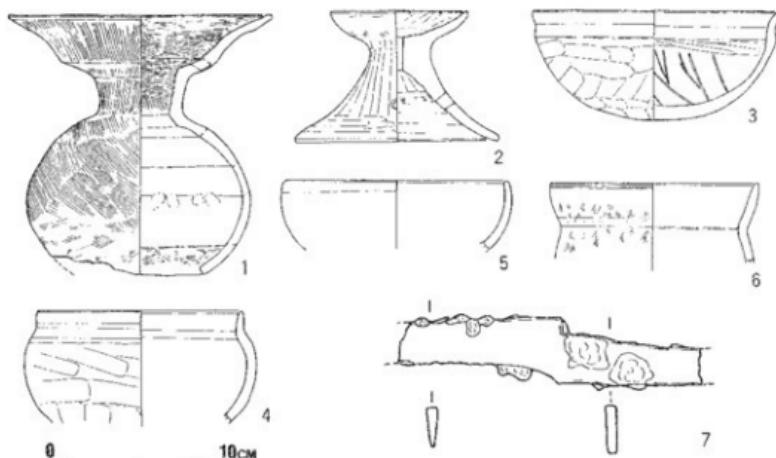
1号方形周溝墓の溝内（下層）出土で完形品である。器受部は緩く外反し、口縁端部が短かく立ち上がる。頸部は比較的しまり気味で、緩く広がる脚部に続く。器受部中央から脚部にかけて貫通孔があり、脚部にも透し孔が3個みられる。孔径は0.9cm、器受部内面はへラ磨きで他はハケ目後へラ磨きされており、ハケ目が薄く残っている。器受部口径7.6～7.8cm、脚部底径11.6cm、高さは7.2cm。胎土に小石粒や砂粒を含むもやや緻密で赤褐色を呈している。

3～6 杯・碗

3・4は古墳の周溝内出土の杯、5は1号住居跡、6はC-11グリッド出土の碗である。3は全体の1／2程残っているが他は破片である。3は丸底で胴部は内湾しながら肩に弱い稜を残して一端垂直気味に立ち上がり、短かく外反する口縁部に続く。外面はへラナデによる整形で、内面には棒状器具による整形痕と暗文がみられる。丹彩され赤褐色を呈している。4は丸味を帯びた胴部が直立気味に立ち上がる口縁部に続く。内外面ともへラナデによる整形で胎土は砂粒、小石粒を多く含みやや粗い。5は内湾しながら立ち上がり、器面はへラナデだがやや雑である。6は口縁部から胴部にかけての部分で内外面ともへラナデだが外面には薄くハケ目が残る。

7. 刀子

古墳周溝の覆土下層から出土したもので、両端が欠損している。



第92図 古墳時代の遺物

第4節 歴史時代の遺物

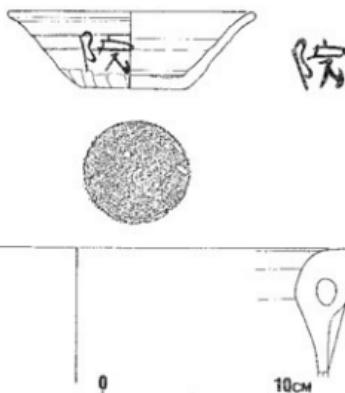
1. 須恵器杯(墨書き器)

D-3グリッド出土の完形品である。胴部には口クロ成形の弱い稜がみられ、胴部はやや外反気味に立ち上がり、口縁部付近で外側に開く。胴下部は手持ちによるヘラ整形、底面は回転ヘラ整形後、さらにヘラで整形している。胴部中央に薄く墨書き文字「院」がみられる。胎土に長石粒等を含みやや粗いが焼成は良好で灰色を呈する。口径13.4cm、高さ4.3cm、底部径5.9cmを測る。

2. 内耳土器

1号溝出土の破片である。

平線の口縁部で外面全体に多量の煤が付着している。



第93図 歴史時代の遺物



東側から遺跡正面



南西から



西から遺構全景



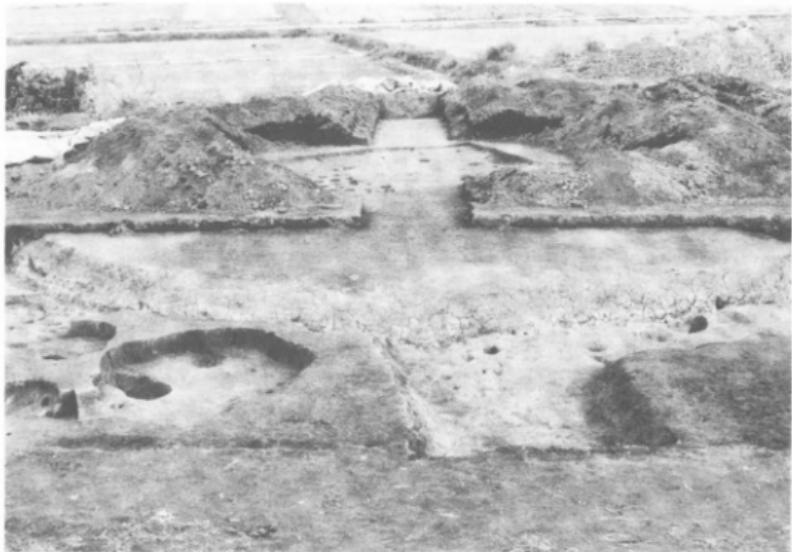
南から遺構全景



北西から全景



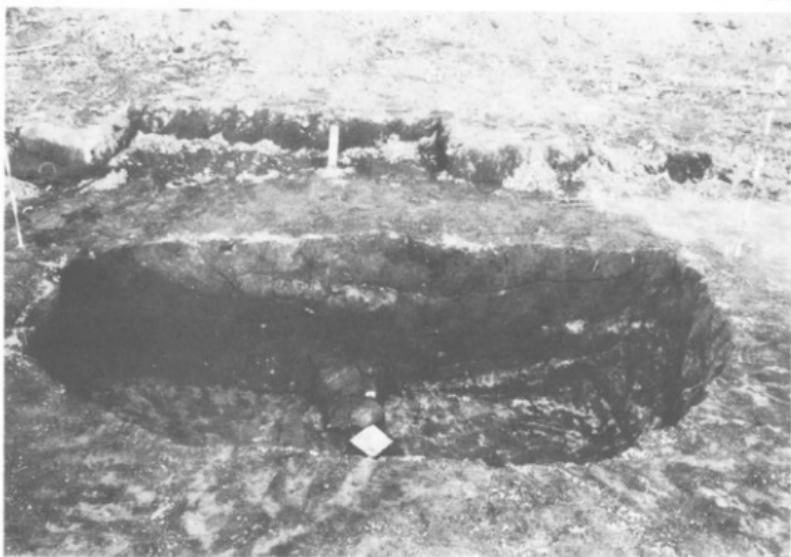
北西調査区



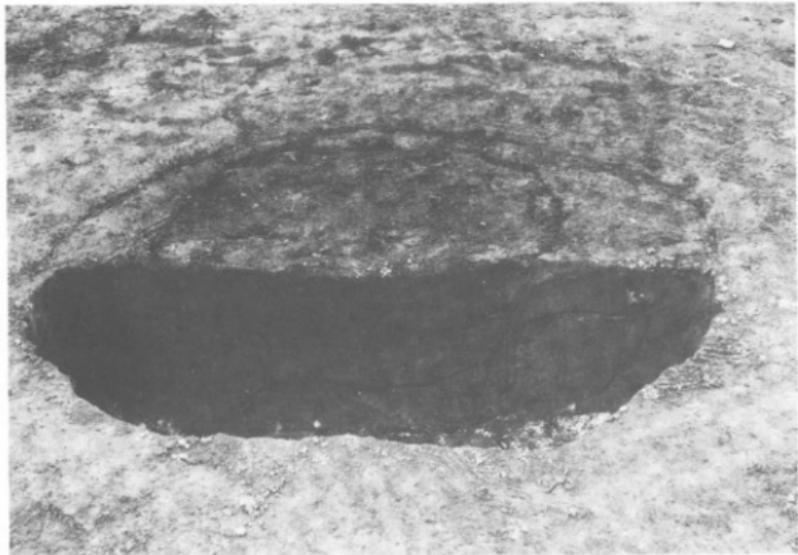
古墳北周溝



方形周溝墓（H1）東溝



1号土壙 (D 1)

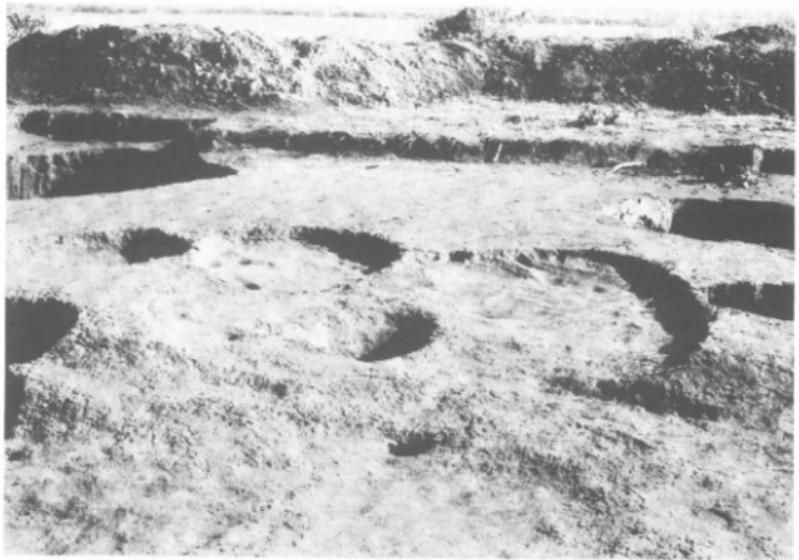


2号土壤 (D 2)

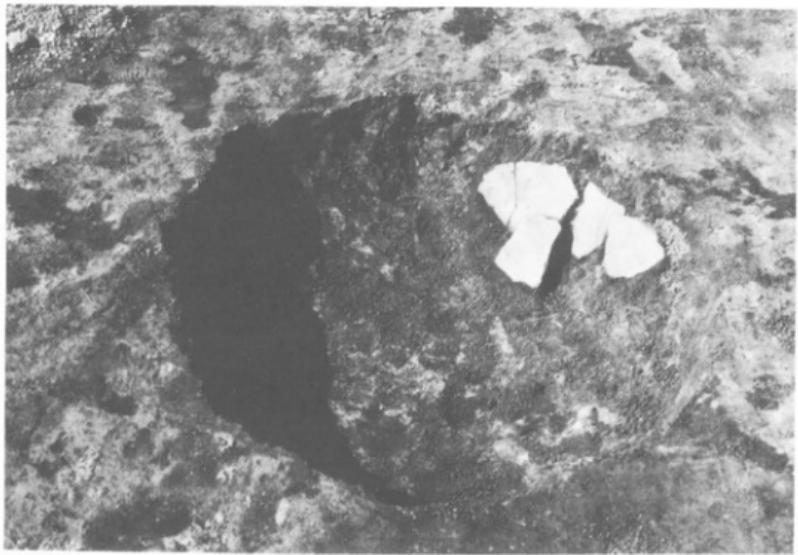
图版 7 造迹



3号土壤 (D 3)



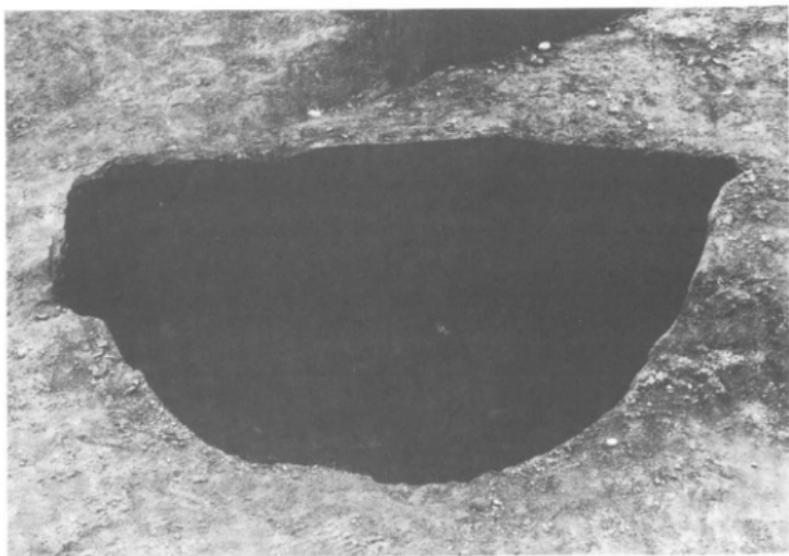
4、5、6号土壙全景 (D 4、5、6)



5号土壙 (D 5)



7号土壤 (D 7)



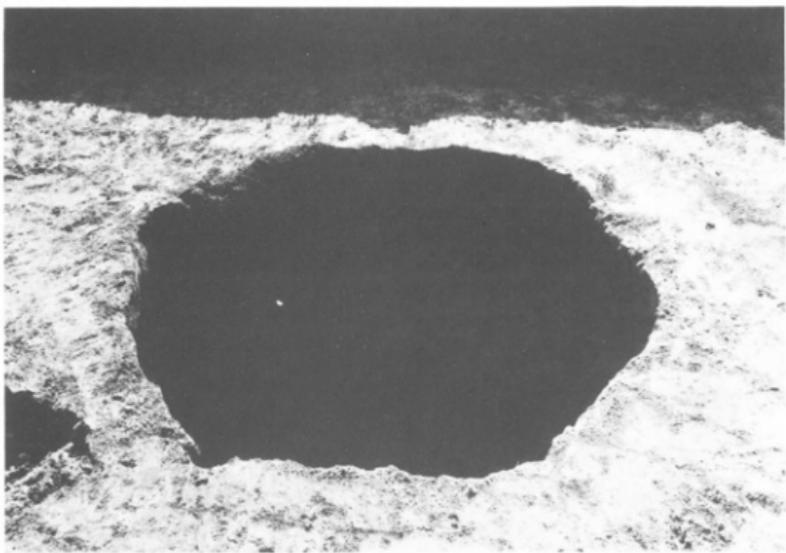
9号土壤 (D 9) 断面



9号土壤 (D 9)



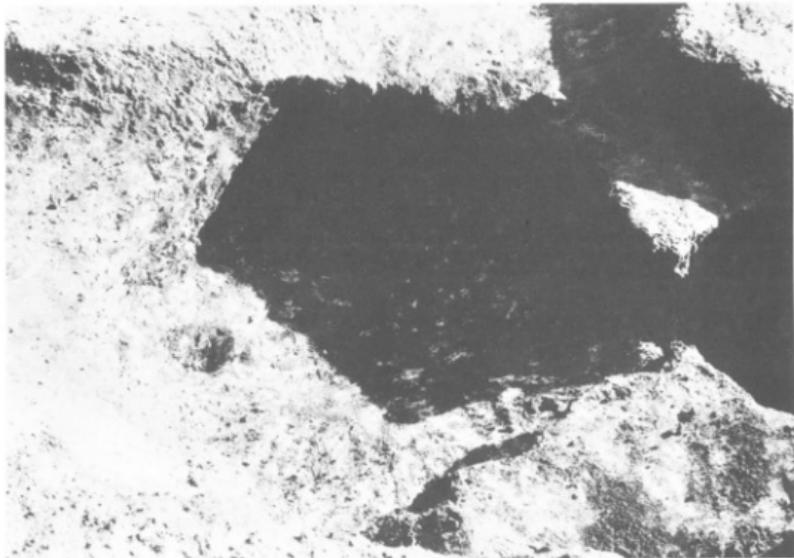
13号土壤 (D 13) 遗物出土状態



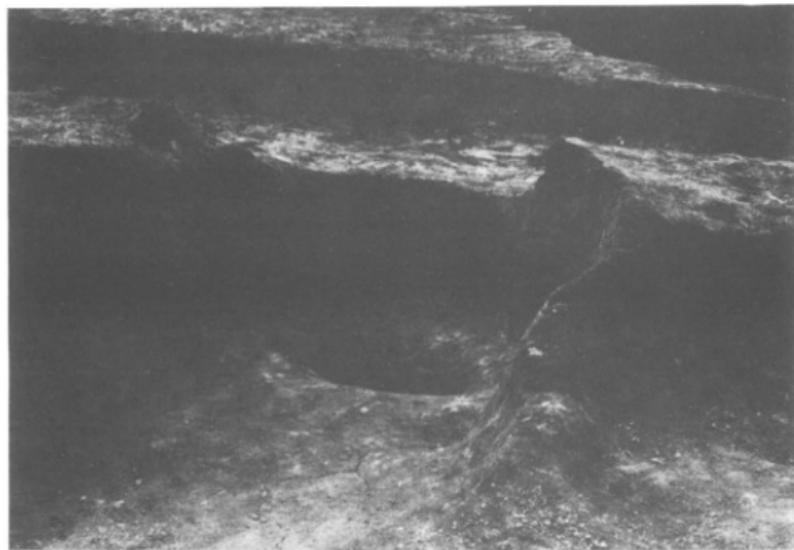
19号土壤 (D 19)



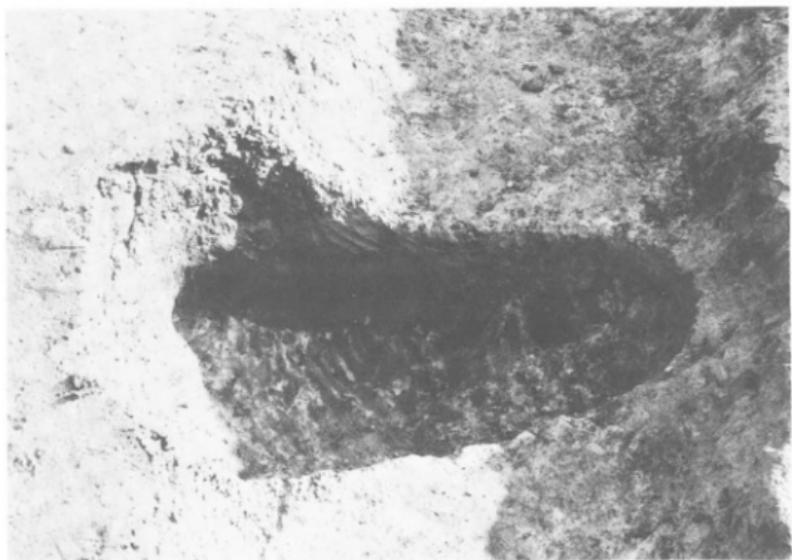
19, 20号土壤 (D 19, D 20)



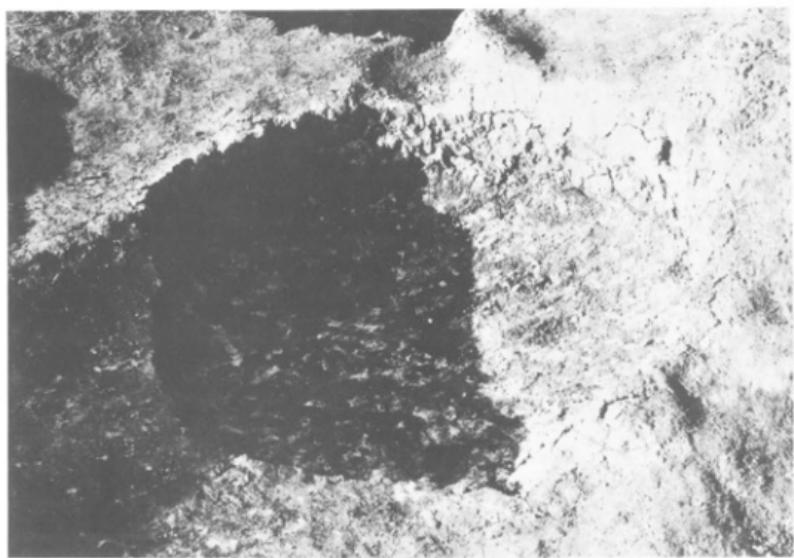
22号土壤 (D 22)



23号土壤 (D 23)



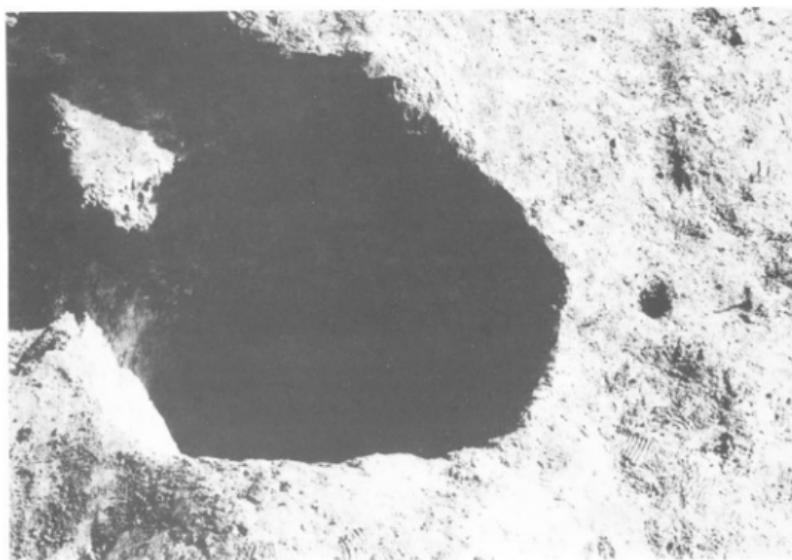
24号土壤 (D 24)



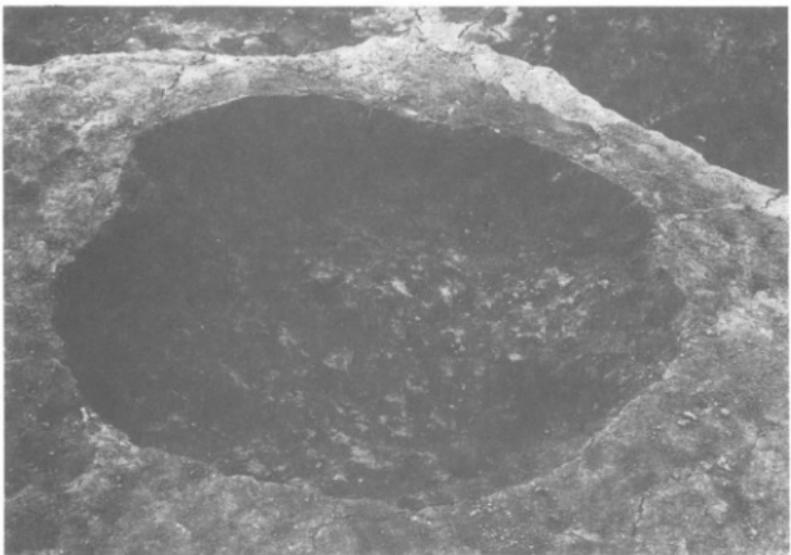
25号土壤 (D 25)



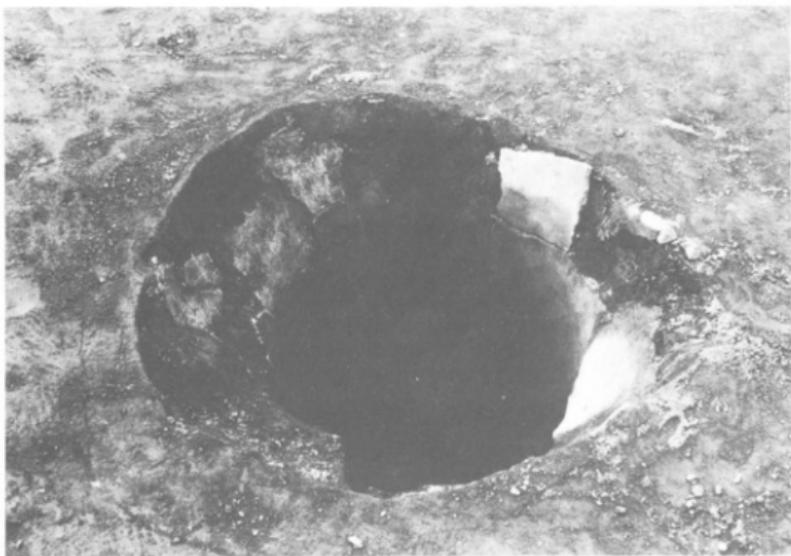
27号土壤（D 27）遺物出土状態



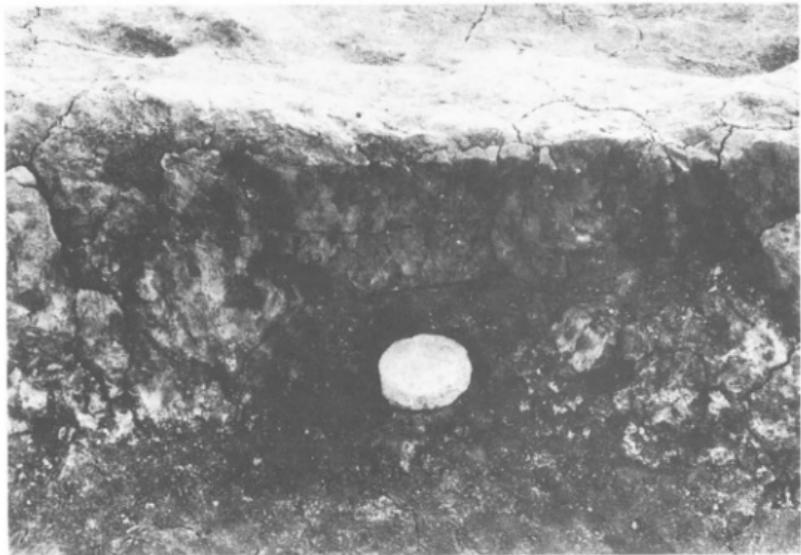
27号土壤（D 27）



31号土壤 (D 31) 断面



32号土壤 (D 32)



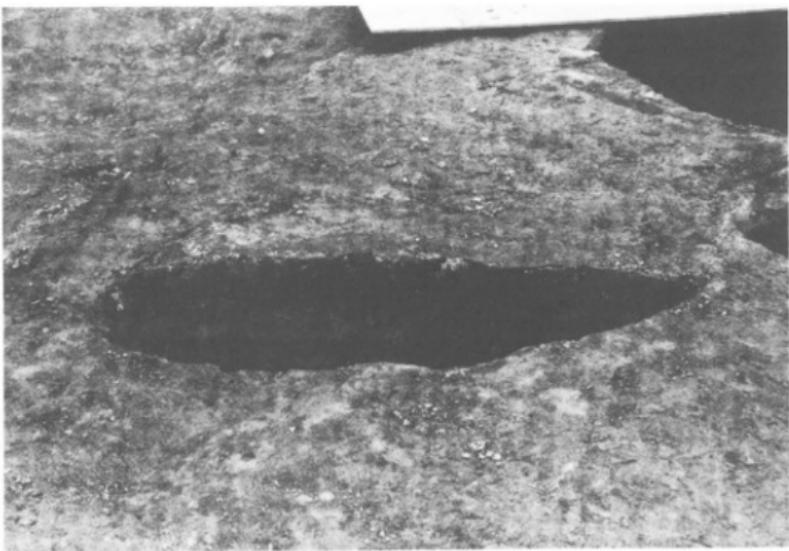
33号土壤 (D 33)



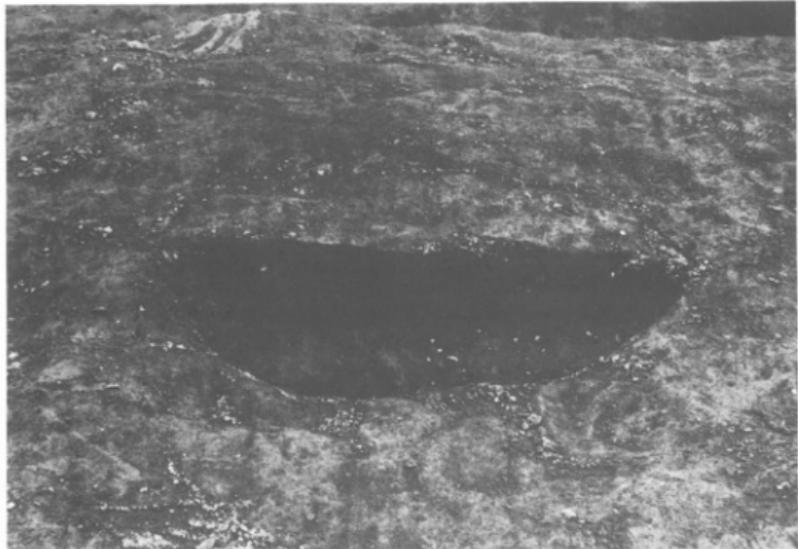
1 号 埋 窑 (U 1)



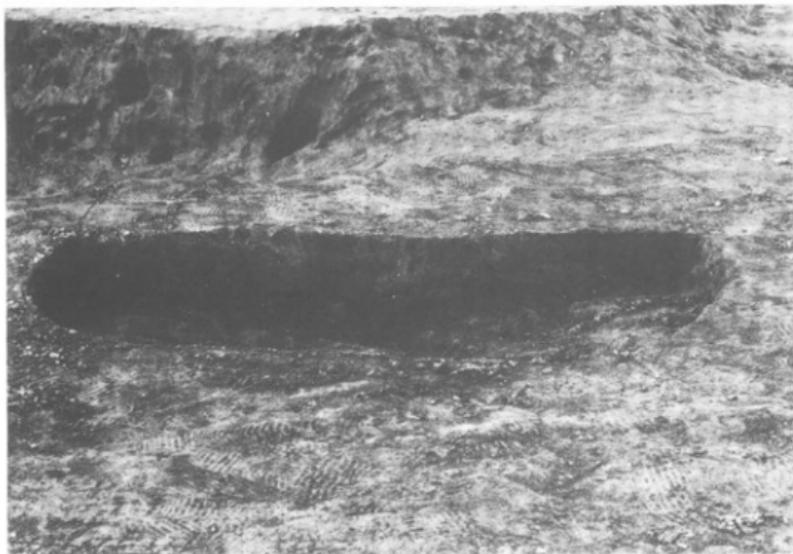
2号埋甕 (U 2)



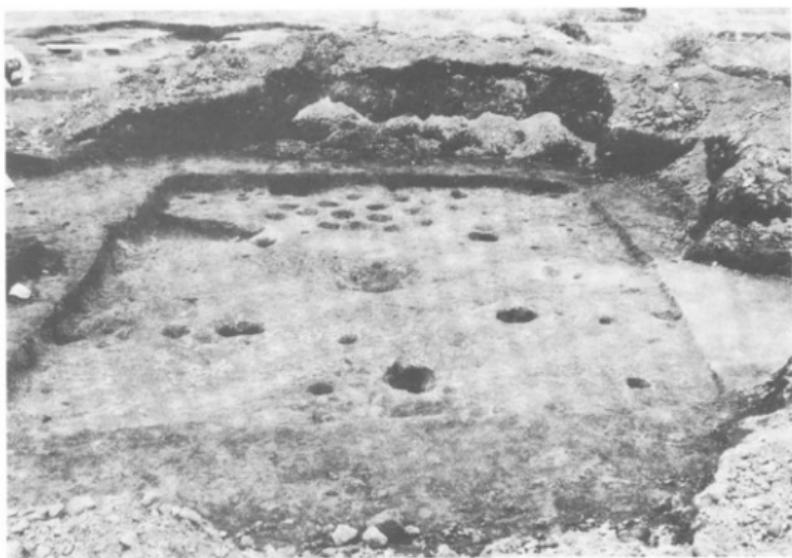
1号焼土壙 (F 1)



2号烧土壤 (F 2)



3号烧土壤 (F 3)



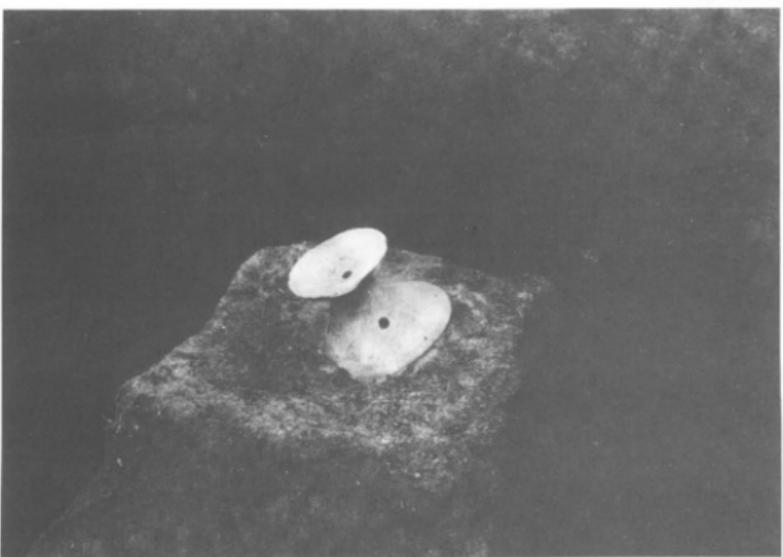
1号住居址（弥生時代）



1号方形周溝墓（東→）(H 1)



1号方形周溝墓（東南隅部）



1号方形周溝墓



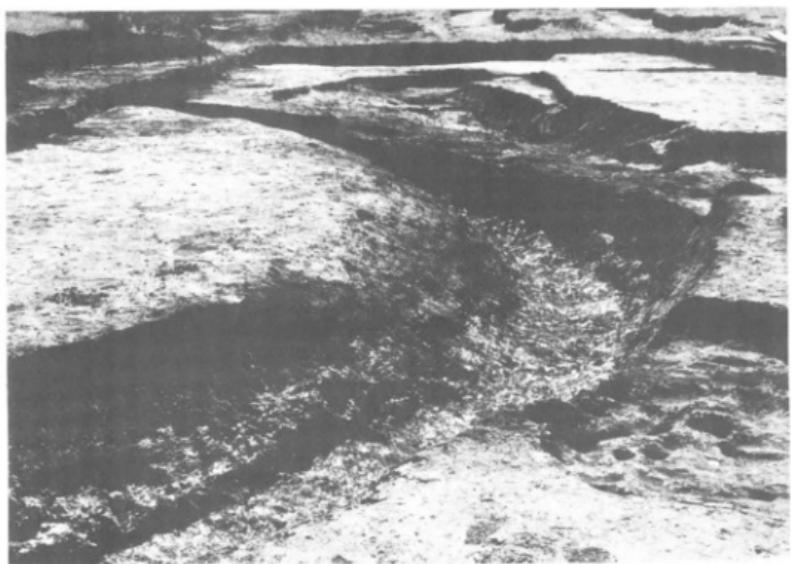
2号方形周溝墓(II 2)



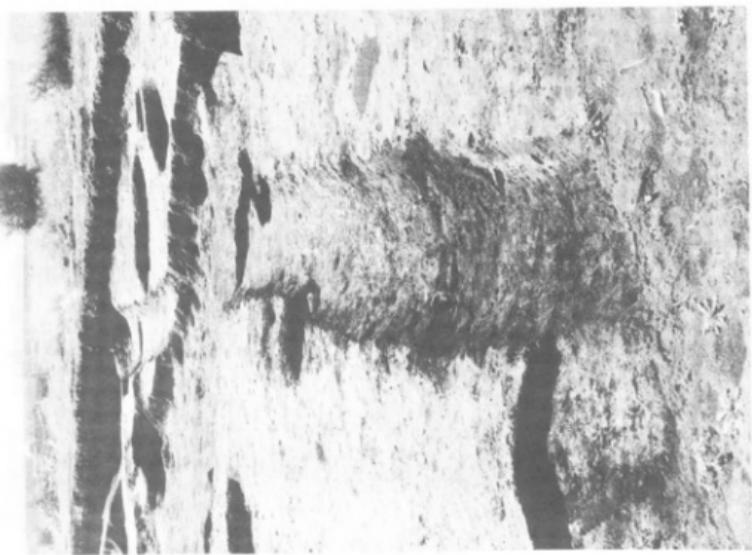
2号方形周溝墓断面



同 遺物出土状態

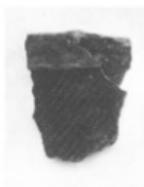


古墳周溝

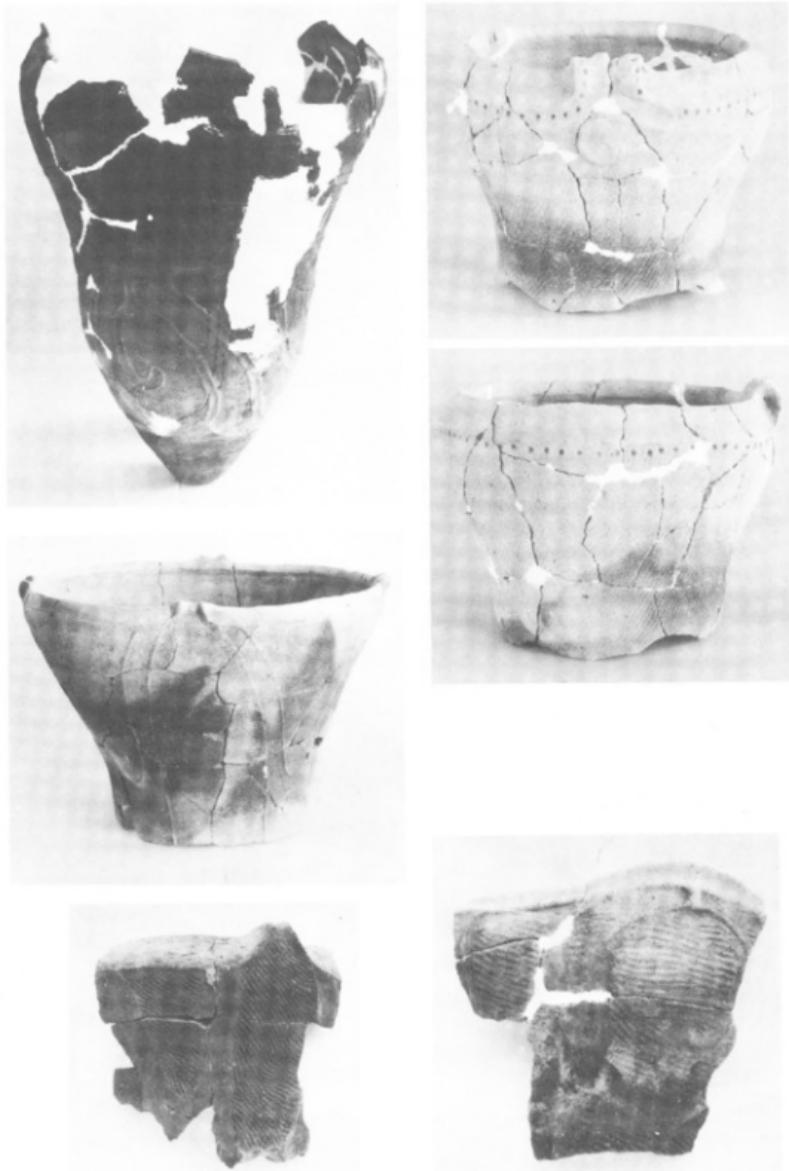


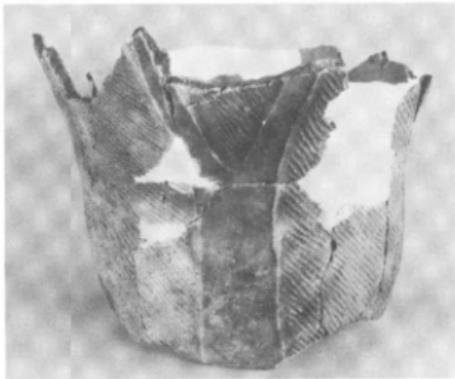
1号溝

图版24 遗物

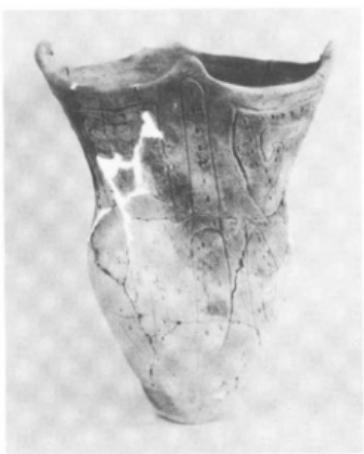
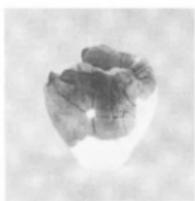


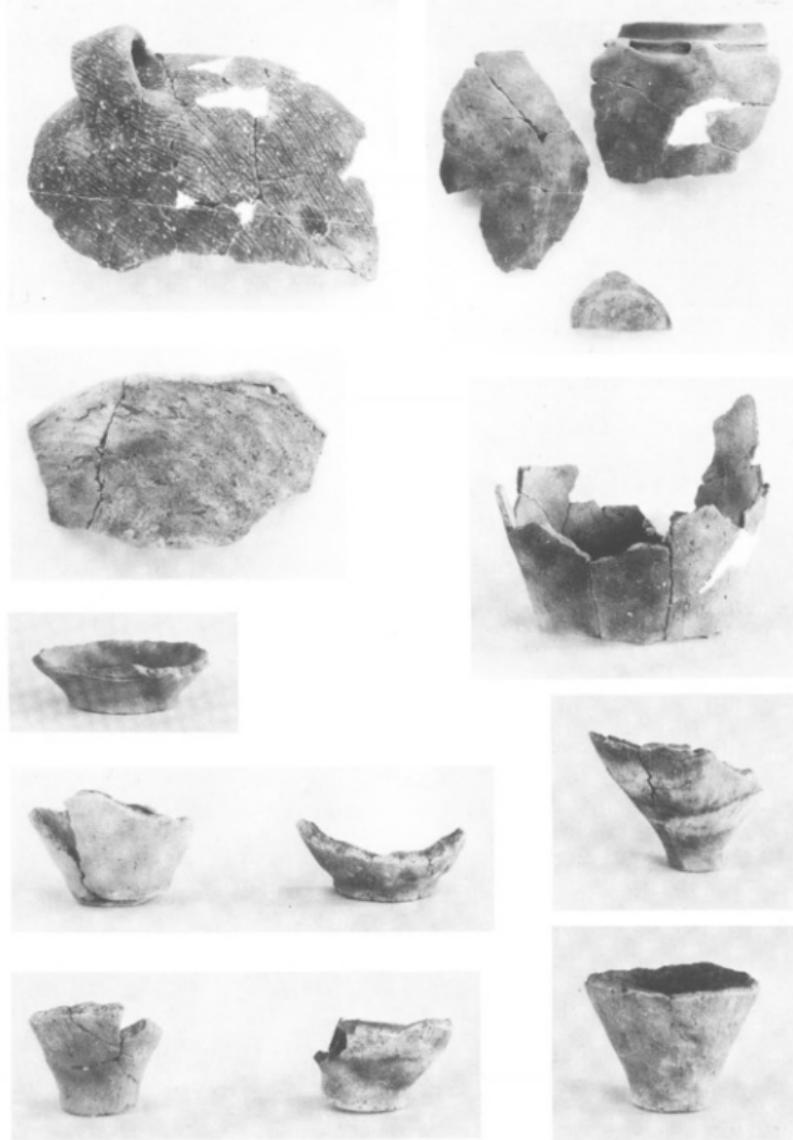
图版25 遗物





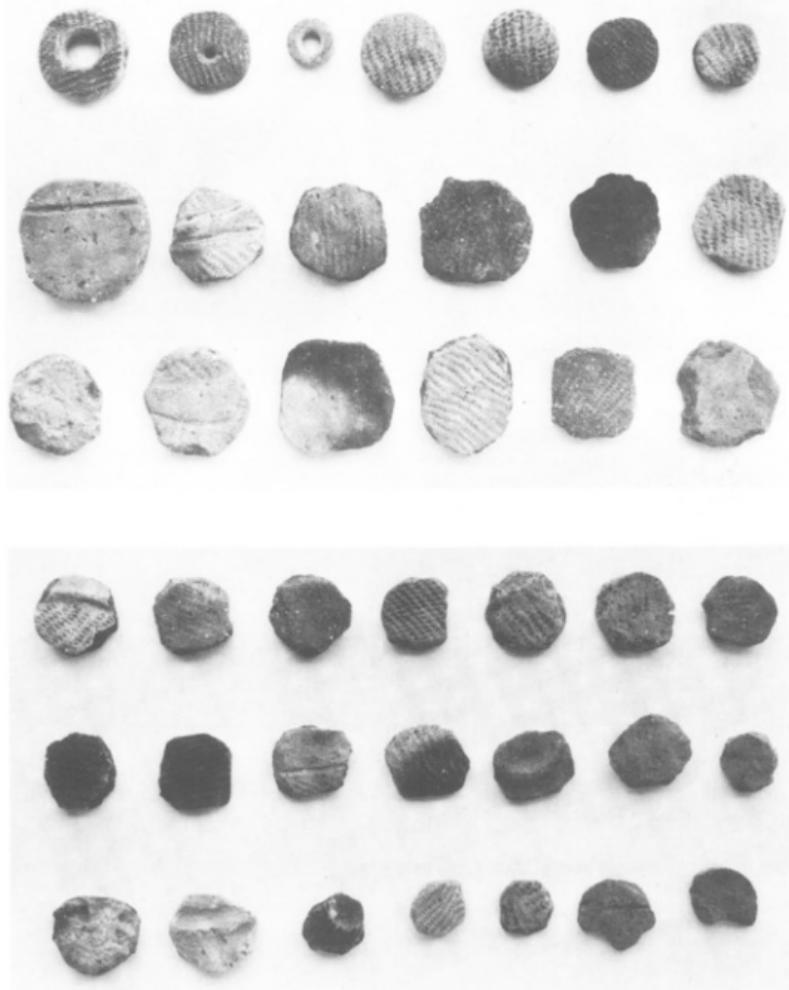
図版27 遺物



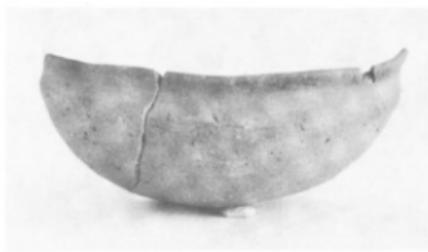
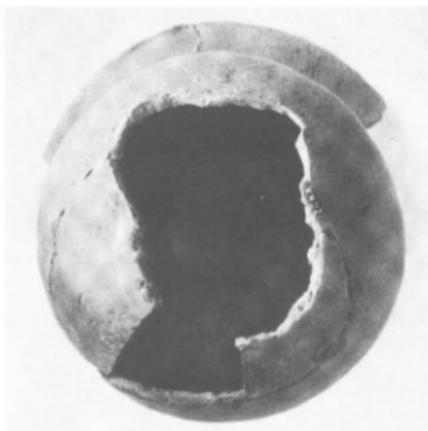


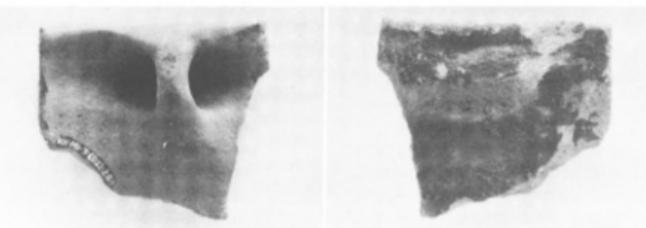
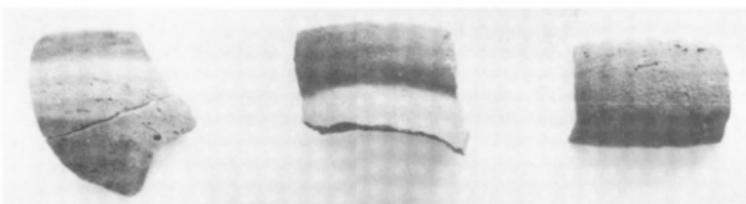




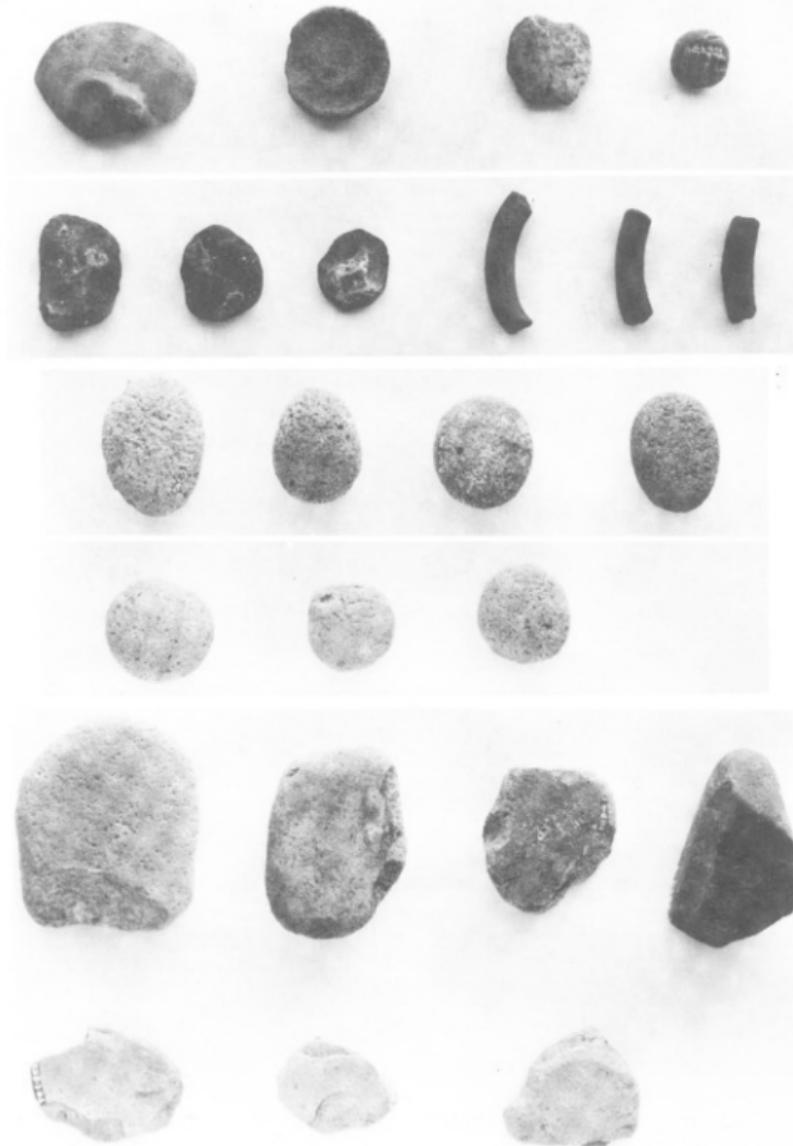


图版32 遗物

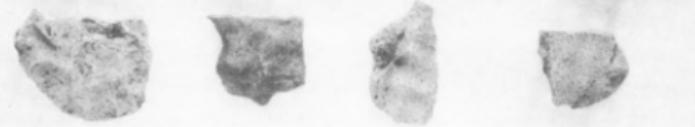
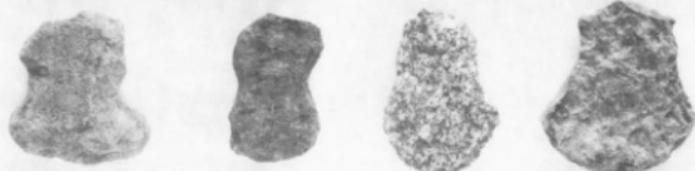


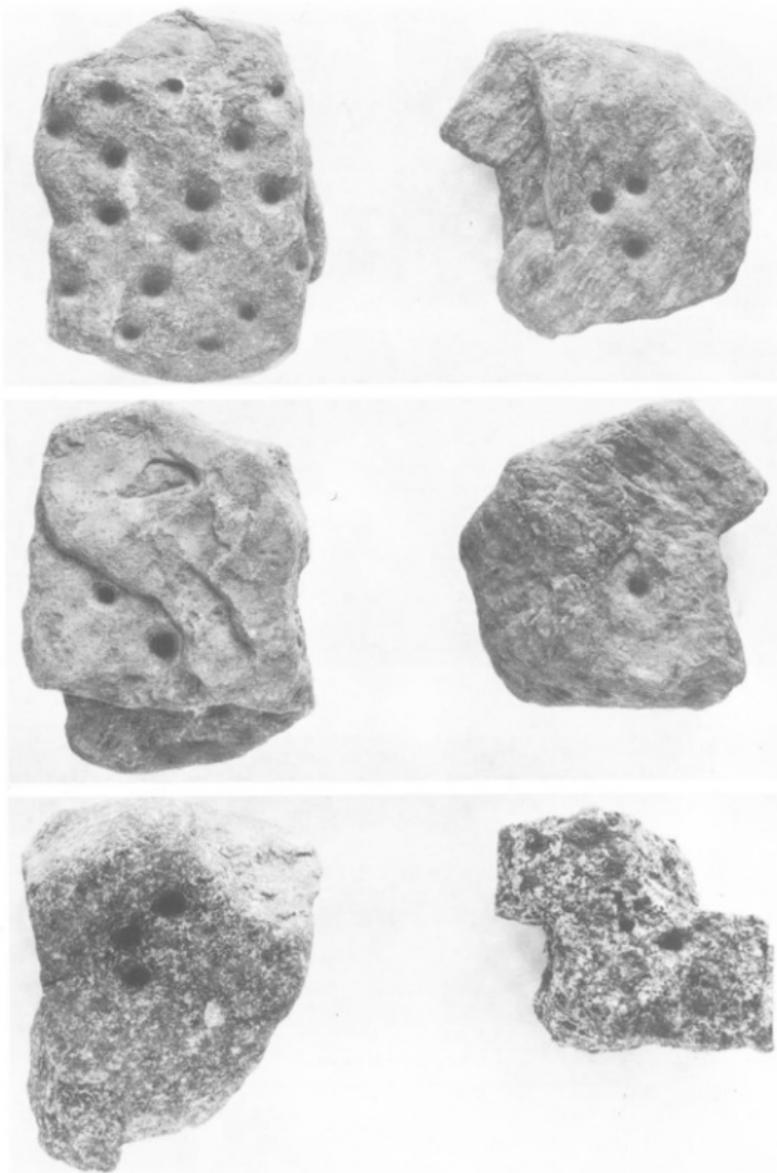


図版34 遺物

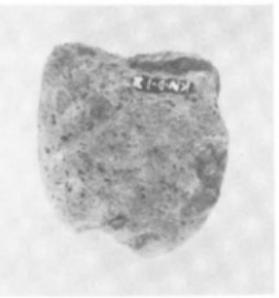
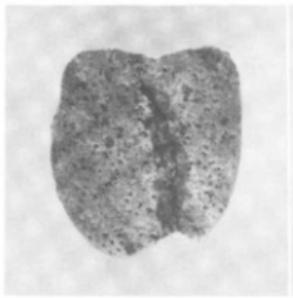
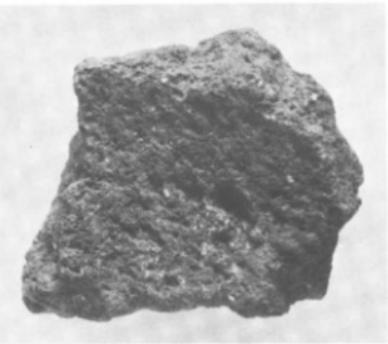
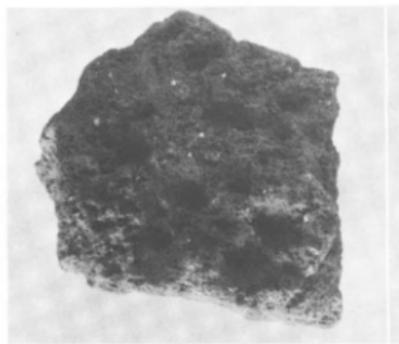








图版38 遗物



茨城県明野町埋蔵文化財発掘調査報告第1集

倉持遺跡—第1年次調査—

昭和58年3月30日発行

編集 明野町教育委員会

発行 明野町長 加倉井 正利
茨城県真壁郡明野町大字海老ヶ島 1,300 番地

印刷 ワタヒキ印刷株式会社
水戸市城東1丁目5-21
